

17  
383

時代私観



# 時代私観

## 目次

思想上の日英同盟と親露主義	一
明治暗殺史の詩趣	一五
現代思潮の一瞥	三二
平凡論	四三
英吉利思想	五二
新思想としての自然主義	七五
青年大會及び救世軍大會所感	八六

明治  
41 11 37  
内交

必要なる性慾文學……………	九五
寧ろ不良教員を撰まん哉……………	一〇一
誤用せられたる高遠の真理……………	一一〇
電車とイブセン……………	一二三
非武士道論……………	一三一
新興の文學は宗教の牙營に切り込み……………	一四五
教育上注意すべき事實……………	一五二
外國思想と現代の教育……………	一六一
机上小觀……………	一八一
一 自覺の苦悶……………	一八一
二 基督教會は時勢に後れたり……………	一八五
三 伯爵大隈重信閣下……………	一九二

四 自然に接するの機……………	一九七
五 所謂煩悶の側面觀……………	二〇三
六 西園寺内閣の文政……………	二一〇
七 小説中の生活問題……………	二一四
八 文相の訓令出で、高野に女人登山の禁制解かる……………	二二一
博覽會美術館所感……………	二二八
神様の進化……………	二三四
自然を友としたる文化と自然を敵としたる文化……………	二四三
福澤先生……………	二六四
蘇峰先生に送りてアンナ、カレニナの情操を論ず……………	二七三

時代私觀目次終

# 時代私観

戸川秋骨

## ○思想上の日英同盟と親露主義

英に親しむべきか、抑もまた露に近づくべきかは、我が經世家の考慮を煩はせし問題にして、諸家各其の見を異にする所なるべし。日英同盟成れるの後と雖も猶ほ此の種の論議は時に應じて繰りかへされたり。外邦に對する一國の關係は、必ず其等の一を擇んで提携し、他を敵視するの外餘地なきものか、門外漢の余の知るところに非ず。今や日英同盟の他日佛協約あり日露又た益々親善ならんとするが如く、同時に歐州に於ける英露の關係は昔日の如くに非ずして頗る順調にあり。即ち東邦に於ける亞布汗

二  
國境問題の如きも圓滿なる妥協を遂げたりと云ふ。極東に於ける兩者の關係また其の利害甚しく相反するものに非ざる可し。蓋し日英の同盟と共に日露の相提携するを得ば、开は世界の幸福なるべきか。斯く云ふ余は柄になき政治論を爲さんとするに非ず、聊か此の二大強國の關係より我が思想界の歸趣を窺はんと欲するのみ。我が國の思想界にも亦た日英同盟論と親露主義とあり言太だ好事に過ぎたるの慊あれども、大體斯かる名稱を加へて差支へなかる可し。

二  
余は先づ親露主義の如何なるものかを説かん。日露の戦争鬧なるの時、世間が口を極めて敵國を罵り、頻に人心を鼓舞しつゝありしに際し、一部の人士が特に露西亞文學に憧憬し殊に有爲の青年が多なる其の影響を享けつゝありしは、嘗て余の注意したりし所にして又た世人の共に認めたる所なり。余が所謂親露主義なる名稱を興へたるは斯くの如き一派の思想を指せるなり。彼等人士の憧憬するは必ずしも露西亞文

學に限れるに非ず、或は佛蘭西文學に或は伊太利文學に其の一味類似の傾向を追ふもの即ち是れなり。しかも其の最も嗜好し私淑するところは露西亞にあり。

曰くツルゲニエフ、トルストイ、ドストイエフスキイ、ゴルキイ、チエーホフ、アレドレエフ、メレジコフスキイ是等の名は常に文壇に繰りかへされ、特に新進氣鋭の文人が愛好し、崇拜するところなり。今その實際の状態を云はんとせば、これを其の翻譯に就いて見るに如くはなし。翻譯界に於ては吾人は先づツルゲニエフの「オン、セ、イズ」(其前夜)を擧ぐ可し。トルストイの「チャイルドフツド、ポトイフツド、云々」(生立の記)亦た既に翻譯を見たり。更にツルゲニエフの「ルーデン」(浮草)既に公にせられて、トルストイの「復活」また將に世に出んとせり。シンキウキツチに至りては、嚴密なる意味に於て露西亞の作物と見るには多少の異議ある可しと雖も亦た極めてこれに近きものなり。而して其の「クオ、ヴァデス」(何處へ)「ザット、サード、クーマン」(二人畫工)もまた發賣され、しかも頗る好評を博せり。歐州文學の數多き

四  
が中に此の最近に於ける翻譯を擧ぐるも猶ほ斯くの如し、是れ豈露西亞文學萬歲に非ずや。親露主義が翕然として思想界に勢を有すと云ふも決して誇大の言に非ず。識者は單に此の現象を以て書生仲間<sup>ニ</sup>に於ける一時の風潮と觀る可からざるなり。

三

斯くの如きは事實明白に世に現はれたるものなり、若し夫れ隠れたるに於ては、其の勢力の如何に深大なるかを知らず。例之ば相應に外國語を解し得る學生に、その愛好し又は一讀したる西洋の作物を問へ、彼等は必ずツルゲニエフを以て答ふ可し、これ余が實驗したる所なり。猶ほ聞くが如くんば、山間の小都會に於てすら、ツルゲニエフの英譯書は店頭<sup>ニ</sup>の書架に掲げらると云ふ。其の勢力の深甚なる寧ろ意外とすべきのみ。人或は言はん<sup>ニ</sup>開は作品の價值若しくは其の趣味如何によるに非ず、英譯書の解釋に容易きが故のみと。蓋し開は正に一面の理由なる可し、然れども果してそは理由の總てなるか。斯く云ふ人は未だ露西亞の作物を讀まざる人にはあらざるか、抑も亦

讀みて而して猶ほ此の言を爲すか。前者ならば先づ一讀を煩はすべく、一讀を煩はして後論議を試むべし。若し後者ならば余は斯くの如き人を以て初より論議を交ふ可き人に非ずと云はんのみ。

然らば何故に露西亞文學が斯くの如き勢力を有するや。余は嘗て英吉利思想を説きて其の日本に行はれざる理由を述べ、遇ま露西亞文學のしかく好迎さるゝ所以に及べり。今再び是を爰に説くこと能はざるも猶ほ簡單にこれに就きて一言せんか、彼の國情が我と酷似すると云ふに歸す可し。第一に露西亞は他の歐州の列強と離れて、較や東邦趣味のある處なり、第二に彼と我との間に於ける治者と被治者との關係頗る類似せり、彼の治者と被治者の争は歐州の他の列強のそれの如くに非ずして寧ろ我のそれに近し。第三に歐州の新思想に逢着したることの新しきが相似たり。露西亞が所謂歐州の文明若くは新思潮を吸收せしは猶ほ古きことに非ずして、我が四十年來開明の風に觸れたると似たるものあり。若し夫れ斯くの如きを以て類似に非ずとなすものあらば、試み

に我が國情と英吉利の國情とを比較せよ、而して其の懸隔する所の甚しきを見れば直ちに露西亞の我に近きを領するならん。余は今日露の類似を説くに非ざるを以て多言すること能はず、唯だかゝる事情より親露主義のしかく多大の勢力あるを一言するのみ。

六

#### 四

翻つて日英同盟とは如何なるものかを見んに、我が思想界に於ては疾より日英同盟なるもの成立して存せり。唯だ其の同盟は親露主義の如く深き考慮あり若くは嗜好ありてのことなりしか、或は偶然の成行（レーゼー、フェヤ）によりて推移し來りしものか、其の有様は寧ろ後者の關係の如しと雖も、开は今余の言はんと欲する所に非ず。兎に角我が國の始めて米國に依りて誘導せられしより以來、米國とその用語なる英語とを通して英國に結びしは事實なり。唯だそれ斯くの如き關係によりて成りし同盟なり、我が人士の英吉利思想を欽慕し、英吉利風を愛好して成りしものとは自ら異なるものあり。同時に識者は自然の成り行きに従つて英に私淑したるなり、自ら進んで特に英

風を紹介したるものに非ず。故に形の上にては同盟なりと雖も、其の實質に於ては果して然かくこれに影響せらるゝ處ありや、實に疑問なりとす。たゞ近時漸く英の美風、其の長所を感得するもの尠からずと雖も、猶ほ一般に英吉利思想をよく了解し是に心酔せる者を見ざるは事實なり。

例之ば文藝上の作品として敬重せらるゝもの、英吉利の文學に於ては沙翁あり、ミルトンあり其數實に夥多しと雖も、古代より現代に至るまで幾多の作品のうち、眞に我が邦人に感化を興へしもの幾許なる可きか。例之ば沙翁の如きは是を了解する二三の識者には絶好の大作なるべし、然かもこれを實際に了知する者幾ばくかある。實に余の如きも沙翁の著書に對しては殆ど門外漢なり。ミルトンの如きも文藝専門の士を外にしてはこれを通讀したる者すら尠かる可く、況や其の鑑賞に至りては極めて稀なる可し。余は徒に自家を以て他を付度するものに非ず。唯た人の常に口にする沙翁の偉大なること、ミルトンの雄渾なることも、其の實際の結果に至りてはこれを我が思想

七

界若しくは文壇の何處に求め得可きか、聊か疑問なりとなすのみ。沙翁、ミルトンの昔を語るは他の嗤を招くの恐あり、翻つて最近代の英吉利文學を見るにその孰れが實際の結果を我が文壇に貢献したりしか。少くとも余は彼の露西亞文學の如くその具體的に顯著ならざるを認む。然らば果して英文學の効果は絶無なりや。余の所謂日英同盟なるものは有名無實に過ぎざるか。何ぞ必しも然らん。英吉利の如き歴史を有し事々物々に根據を有し、其の基礎の確實なる、門閥大家の如きは、他の成り上り者の如きと自ら其の態度を異にし、其の我が思想界に與ふる影響に於ても亦た自ら漸進的にして、然かも確實なる所あり。よしや我の嗜好より進むでこれを迎へたるに非ずと雖も其の親灸の日短からず従つてその溟々のうちに蒙りたる感化の如きは蓋し少々ならざるべし。

## 五

余は日英同盟派を以て我が政海の官僚派とを比較せんと欲す。政治上に日英同盟を

完成しだるは桂侯の内閣にして、桂侯の内閣は山縣侯の興黨によりて成る。即ち官僚派なり。然れども余が思想界の日英同盟派を以て官僚派と云ふは、斯くの如き政治上の意義あるの故に非ず。其の勢力扶殖の道、頗る今の官僚派山縣一派の遺口に類するものあればなり。

思ふに英文學に關する翻譯は一沙翁の外殆ど皆無の姿なり。近時マックス、オオレルの翻譯續出すると雖も這は果して英文學の代表と認むべきか頗る疑はし。少くとも著者は佛蘭西趣味に感化され居ること頗る多大なり。實際日英派は現代の文運に沒交渉なりと云ふも過言に非ざるの感あり。たま〜二三の戯曲の紹介さるゝものありと雖も开はもとより論するに足らず。殊に公衆の注目する所のものは多く純英の産物に非ざるものに多し。重ねて言ふ事實果して斯して斯くの如しとせば日英同盟の關係は我が思想界に何等の關する所なきか。曰く極めて然らず。蓋し此の派は別に偉大なる勢力範圍を有す。余の所謂官僚派とは即ち此の勢力範圍を比較して呼びたるものな



り。然らば思想界の官僚とは何ぞや、曰く教育界より紹介さるゝ思想の範圍是なり。

## 六

英吉利の思想は下、中學校の一年級より、上は大學の文科大学に至るまで、終始一貫して、學生の腦裡に注入せらる。中學校の五年間は暫く云はず、最も思想を消化し受納し得る高等學校に於て、學生の受くる其の影響は幾ばくなるべきか。教科書は多く名著の採萃なりと雖も、其の間に散見する英吉利の思想は決して少しとせず。彼等學生は高等學校の三年間、若くは更に大學の三年間に於て、英文學の大體に通じ假令彼等の本性及び嗜好は親露的にして、其の學習する英文學は外部より單に注入さるゝものなりとするも、此の長年月の間、奚ぞよく其の感化なくして過ぐるものならんや。彼等はスキントンの如き教科書によりて英文學の一端にも通ず、彼等はドイツケンス、サツカレエの小説は云ふまでもなく、ステイヴンソンもキップリングも一讀するもの機會を有す。カアライルやラスキンは事古りて、今やハリソンもラングも教科書に收め

らるゝなり。唯た教ふる者に文學的感情なく、刺戟的活火を缺けばこそ、甚しき影響なきなれ、教授者其人が英吉利思想を消化し會得し、且つこれを愛好するものならんには、其の結果の顯著なるものあらん事疑を容れず。しかも斯く連年絶る間なく、人は更迭すると雖も材は變はらず、惇々として訓育せらるゝの結果は自ら一種の影響を興てまた一種の思想を創り出す。之れ豈官僚派の不言不語の間に行政機關を占領し立法部をさへ卷席せんとするに比すべからずや。况や最近に至りては學校の教科書も益々進みて劇にピネロを見、小説にバーデイを採り其の勢宛然官僚派の議會を操縦せんとするが如きものあるに於てをや。

## 七

今の政界に官僚黨と政友會とが對抗するが如く、思想界のうち主として文界に於ては此の日英派と親露派との對抗を見る。恰も在野黨と在朝黨との如きか。兩者必ずしも相争ひ相背くに非ずと雖も、前者の後者を目して素養無き輕薄者流とするあれば、後

者は前者を目して因循守舊の徒となす。余は今具体的に何人が前者にして、何人が後者なりと指摘せざるべし。又たしかく明確に指示すること能はざるなり。然れども大勢の自ら此の兩派に分岐せるは事實なり。例之ば上田敏氏（氏を以て日英派の代表とするには非ずと雖も）の英文學科の出身にして、クラシックスの趣味あるが如き、島村抱月氏（氏に於ても目して純親露派とは云ふを得ざるが）早稻田より出て、自然主義を唱ふるが如き其の一端を見るに足るべし。

抑も輓近文壇の風潮は極めて親露派に傾けるが如しと雖も、博士坪内氏は英文學の研究より文壇に出てたり、夏目氏もとより英文學科の出身にして、又た最もよく英吉利思想を鑑賞し消化したる人なり。二葉亭氏の親露派なる、鷗外氏の局外に立てる等ありと雖も、要するに政界の官僚黨が人材を網羅するが如く、高材の士は反つて日英黨にあり、時代の趨勢は未だ必しも全然親露主義に傾けるには非ざる可し。

余は相撲の番附の如く漫に人名を羅列するには非ず唯だ具体的に斯かる二傾向を標

の示せんと欲せしのみ。しかも开は眞に唯だ傾向に過ぎず。更に大局より見れば。斯かる分派は素より末葉の論のみ。日英の同盟も親露主義も要は國家の大計を定めんと欲するより出づるとせば、文壇の兩傾向も亦た我が思想界の發展を期するより起れる現象に過ぎざる可きのみ。

## 八

英帝の斡旋は列國の合同となり歐洲の平和を贏ち得たり。即ち從來反目し來りし、英佛の關係も、英露の關係も或はこれより一洗せられて、新天地に入りたるに非ざるかと疑はる。我に於ても日英同盟に次ぐに日佛協約あり次に日露も融和せんとせり、之れ實に普遍の平和に非ずや。由來我が經世家は露國を敵視し來り然るに其の敵國も今や漸く與國たらんとす、之れ慶す可き事實に非ずや。

翻つて思想界の方面を觀るに英吉利思想と露西亞思想とは到底一致す可からざるか。一見兩者は甚しく相違せるものあり。健全にして秩序ある英吉利思想と、新進にして

破壊的なる露西亞主義と、其相違する所決して少なからず。然れども秩序も破壊も開は一時の現象なり、是を藝術の境より觀れば、彼と是としかく區別すべきものに非ざる可し。趣味の相違よりすればこそ各人個々の嗜好も出づれ、开は必しも反目し排擠すべきものに非ず。余を以て見れば兩者の調和はしかく困難なるものにあらず。各人互に心を開き他を容れ他の長を認めんか、日英同盟と親露主義とは全然兩立し、提携して藝術の野思想の世界に遊び得んなり。

## 九

若しそれ吾が國人に天性親露的思想ありとすれば、さらに英吉利的質實の風を以てこれを補ふも可なるべく、はた英吉利的固牢の傾向あらば露西亞的急激の思想を以てこれを緩和するの要あるべし。熟れにもせよ經世の志あるもの、宜しく此の兩思想に就て一考を煩はすべきなり。只余をして言はしむれば、露西亞思想に於てもはた、英吉利氣質に於ても、共に深大莊重の趣ありて、輕跳浮華の風なきは兩者その歸を一にす。而して兩者に共通のこの一點は尤も吾れに欠乏する處にして、而かも未だ英吉利風よりも、はた露西亞主義よりも感化を受けざる處なるが如し。この一事蓋し吾人の深く鑑むべき處ならん。

## ●明治暗殺史の詩趣

刺客及びその行動たる暗殺の如く頗る戯曲的にしてまたロオマンチックなるものはあらず。深夜白刃を揮つてこれを敵手に加へ、白晝爆彈を抛つて忽ち他を壊滅せしむ、その事實すでに戯曲的にしてまたロオマンチックなり。況んやその間にはこれを國事のために敢行する公共心あり。これと共に自家の鬱憤を漏らす私心の供ふあり。その其情は萬別にして、而も人間心裡の機微を味はしむる感興の多き暗殺の如きはあらざるべし。左ればシャーロット、コルデーの事は佛蘭西革命史中に傑出したる精華にあらずや。左ればまたブルータスのシーザーに於ける沙翁の大手腕を煩はしたるにあらずや。

シーザーのブルータスの剣を瞥見するや、汝も亦たかと呼べる、その一言の特に喧傳せらるる所以のもの、爰に暗殺の詩的趣味を收めたればなり。況んや友を犠牲にしたるブルータスの行爲も、大勢の前には何等の功果を齎らさず、共和の羅馬は等しく失はれて、帝國の羅馬ここに魏然として建立せられたるをや。吾人は遠くシャロット、コルデーやブルータスを呼ぶの要なし。最も近くは所謂露探と呼ばれたるもの、殺害また多大の詩興を興ふるものにあらずや。白晝大都の公道に於て白刃を他の胸側に加ふ。事すでに歌舞伎場裡の所作を見るが如し。さらにまた刺客の心裡に入らんか、こゝに多種多様の情致は認めらるべし。その殺害の行爲となりて顯出するまでの経路波瀾は如何に興味深かるべきか。蓋し深大の理智と想像力とさらに多大なる同情の念とを有せずは味ひ難き處ならむ。

併しながら今やロオマンチックの時代はやうやく去らんとせり。吾人は實利實驗の時代に入れり比較考量の時代に入れり。斯の如き時代に於ては従來の如きロオマンチック

の行爲また多く見るべからず。吾が過去の刺客暗殺は多くロオマンチックの風致を伴ひて頗る芝居が、りの趣ありき。然れども今後に至りては、その行動もまたその行動に至らしむる心裡の徑路に至りても、共に實利實驗の時代の風潮に順ふべきか。吾人は西洋に往々暗殺の行はるるを知る。然れどもかれの暗殺は甚だ詩興に乏し。その詩趣あるもの上記ブルータスやコルデーの如きは稀れ也、少くとも近世に於ける暗殺にはかくの如き趣なし。大統領カルノーの場合然り、澳國皇后陛下の場合然り、マキンレーの事件然り、近くは葡國皇帝太子の暗殺また何等の詩趣を伴はざるが如し。吾が國情の凡て西歐の大勢に風靡されつゝあるが如く、暗殺の一事また歐化してやうやくその趣を變ずる事あるべし。白刃に代ふるに短銃を以てし、國家若くは國民の休戚を念慮するに代へて、虚無主義若くは社會主義の如き所謂主義を以て暗殺的行爲の動機となすに至るべし。吾人は埃國皇后陛下を弑し奉りたるもの、何等國家國民の事を念頭に置かざりしを知る。マキンレーの場合に至りては殆んど何のための暗殺なるや吾人が

了解に苦しみし程なりき。若しこれ等の場合に何等かの意義ありとすれば、そは只漠然たる無政府主義若くは虚無主義より來れるが如し。余はかくの如き抽象的の主張よりしてまたかくの如き殺人的行爲の生るゝを怪むものなり。

然りと雖どもたとへ時勢は推移し、今や比較考量の世となり、左眇右顧の時となりしと雖も、凡そ他の生命を害はんとするもの、その心裡に何等の苦衷なかるべきか、何等の苦悶なかるべきか。而してさらに何等ロオマンチックにしてまた戯曲的の趣なかるべきか。吾人は思ふ、時勢の推移と共に時代思潮の變遷と共に刺客の行爲は一層の詩趣を増すものなりと。現代の思想現代の人物は事物を即決するの斷なし。則ちかれを思ひこれを思ひ悶々の情殊に深かるべき筈なり。かくの如き現代人の暗殺の行動に出でんとするや、その苦衷と苦悶とは所詮前時代の人の想像に及ばざるものなくばあらず。かくの如き心意の状態はやがて狂的となるべく、従つてその暗殺の行爲は尤も興味あるものたるを得んなり。

凡て人間の行爲はその時代思潮の印刻を伴ふ、殊に暗殺に於ては明確なる時代の印刻を見る。吾人は吾が國史の上代に於て狹穂彦の弑逆未遂を見たりと雖も、そは上古の事芒遠として事蹟の明らかにすべきものなし。同じく上代に於ける入鹿誅戮の如きは頗る興味ある事實なりとす。蘇我氏の專横と共に其の進歩的行動と、これに反する保守的運動ならびに鎌足の經營等、相ひ並び相ひ反して入鹿の誅戮に終る。これ則ち國運の消長と進歩保守兩主義の衝突とを表示すべき好個の戯曲なり。下りて戰國時代には戰國時代らしき暗殺あり、義朝のそれの如き然り。さらに源平二家より北條氏に至るの間に於ける暗殺の如きは、一面に因果應報の宗教的意義を示すと共に政權與奪の術數を見るべき特殊の戯曲を構成す。徳川氏に至りては、將軍家を害はんとしたるもの、特に家光將軍の屢々難に遇はんとしたる、諸侯の間に於ける所謂御家騒動を惹起したる、これまた好個の題目ならずや。徳川氏時代に於ける此種の暗殺が只所謂御家騒動としてのみ残り文學史上特殊の印象をとどめざりしは、時勢のやみがたき處なりと雖もま

た甚遺憾の事ならずとせず。

かくの如く考へ來りて明治の暗殺史を觀ればその興趣一段の深きを覺ゆ。これを概説すれば明治の暗殺史は進歩的思想と保守的精神との衝突に出づ。吾人はまた維新の前後に於て幾多の暗殺ありしを知る。ために幾多名士の終に明治の舞臺に顯はれざりしを知る。余は今さらに茲處にその名を列擧せざるべし。併しながら當時の暗殺にはまた特殊の趣あり。當時に於ける進歩保守の兩思想は、勤王佐幕の黨與となりて顯れさらにその公心と私心とは、相ひ纏れ相交りて極めて複雑なる戯曲を示す。吾人は未だ明治の小説に於て偉人の心裡を寫したるものに接せず。所謂歴史小説なるものは大抵は偉人の事蹟を單に表面より記述したるにとまりて、心裡の推移を明らかにしたるものを見ず。作家にして若し維新前後の暗殺を研究せんか。則ち偉人の性格その心裡の苦悶は極めて興味ある材たるを得ん。余は未だ英雄偉人の性格を示したる作物のなきを惜む。

暗殺は明治の改曆以後にも多く行はれたり。今のその第四十一年に至るまで數へ來らば、遂行と未遂とを合はせて、數年にして一人を出しし割合なり。但し余がこゝに暗殺といふは公人のそれをいふ。私人の場合に至りては、殆んど枚擧に暇あらず。余がいふは殊に政治の舞臺に於て顯はれたる暗殺に關するものなり。以下その一二を擧げんに、

第一に余は大久保參議の紀尾井坂に於ける暗殺をあげざるべからず。余は素より今參議の暗殺の所因をいふの要なかるべし。然れどもその詩趣を言はんがためには、一應その事情を記さざるべからず。由來明治の政治史は對外主義と内治主義との争なり。蓋し對外主義はむしろ保守黨に屬しまた武斷主義なり。内治主義は進歩黨に近くまた文治派なり。内治派は當時大久保參議を中心とし廟堂にその翼を張り、對外派また一味の黨與を以て臺閣にその重きを爲せり、西郷隆盛は即ち自からその中樞たりしか。余は門外漢として斯くの如き政治の内情を縷述するを好まず、また能はず。然しながら

なほ一步をすゝめて言はんは、かくの如くにして互に相持して對抗し來れる兩黨は征韓論に於て衝突し、大勢は内治派をして凱歌を奏せしめ、隆盛をして城山の露と消えしめが、薩南の風雲如何に依りて蹶起せんと欲せし、各地の對外派はこれがため暫らくその息を潜むるに至れり。然れども各地に散在せる對外派、ならびに薩長の政府に平かならざる黨與は、憤滿措く能はず、機に應じて爆發せんとせしが、この氣運は終に發して、加州の士島田一郎が斬奸狀を懷にして、參議を清水谷に一撃するに於て一段を結べり。聞くが如くば島田氏が斬奸狀を懷にして上京するや、加州の士は素よりその警察の官衙またこれを知りて而もこれを抑制せざりしといふ。また如何に對外派の思想と勢力との地方に磅礴たりしかを察すべし。

世に若し參議の暗殺の詩趣を疑ふものあらばそは甚だ事情を解せざる人なるべし。隆盛は廟閣に於ける參議の知己なり。參議は國家のために其友と戈を交へて終にこれを仆せり。對外派の與黨は六十餘州に瀰漫して時に應じてかれに報ひんとせり。島田

一郎はその代表者なり、而して等しく國を憂ふるの士なり。この憂國の士は遂に大久保に一刀を浴て死に到らしめたり。蓋し參議に於て死は易し。只死に至るまでの苦衷は如何に深大なりしか如何に苦悶を重ねしか。一面その友を仆し、他面國內の騷亂を鎮靜す、その間の憂慮恐らく想像の外にあらん。余を以て參議に賛辭を呈するものとす勿れ余は單に詩的想像を記すのみ。嗚呼對外派は一郎を驅て參議を仆せり、併しながら内治派は仆れしか。極めて然からず。大勢は内治派をして殆んど微動をも感せしめず、やがて現代の公爵伊藤はこの大勢に乗りむしるこの大勢に驅られて政局に出現し、參議の後繼者としてさらに一段の光彩を輝かせり。

征韓論以來臺閣を退きし一派は議會に於て内治派と戦を交へたれども、自由黨まつ第一議會に於て時の武斷派と交綏し、爾來一轉して内治派の手中に收められ以て今日に至れり。而も大勢はなほこれに満足せず、征韓論當時の對外派を驅つて殆んど盡く文治派たらしめたり。かくの如くにして余は大久保參議の暗殺を中心として、一面に

西郷の死を想ひ他面に志士島田一郎の死を見、さらに此れを貫くに時代の大勢を以てするを觀す。これ豈に一場の悲劇ならずとせんや。余を以てすればこれ實にシーザーの死に勝りて史劇なるべき價值ある事蹟なりとなさざるを得ず。

第二に注意すべきは子爵森有禮氏の暗殺なり。森子の文部大臣にして尤も適材にまね尤も手腕ありしは吾人の記憶になほ新たなる處なり。公爵伊藤の始めて内閣の制度を定むるや、子は全權公使より擢んでられて文教の主腦に据えられたり。余は子爵が進歩的思想の勇將たりしを知る。その教育の制度に嶄新なる改革を施したりしを知る。而も氏の進歩的思想なるものは所謂輕跳浮華なるものにあらずき。現時の所謂ハイカラ式にあらずしてむしろ莊重嚴勵頗る國威國權の伸張に貢獻する所ありしが如し。たとへば現下吾が學生の体格やうやく回復して、長大強壯を加へたるは、一つに學校の教科に於ける體操と武術との影響に依る。而して體操と武術とは實に森子の革新に依りて學校に紹介されたるものなり。少くとも兵式體操の勵行に至りては子に依つて

遂げられしものなりとす。只それ其思想の極端なるや、恐らくは傍若無人の舉ありて他の誤解を招きしものあるか。

刺客は子爵が伊勢の大廟に靴して上り、杖を以て御簾をかゝげたりとの一事に憤激してかれを刺せり。それ時は紀元節の大典にして而かも國民が永劫に記憶すべき憲法發布の當日、降雪の粉々たるに際せり。子爵將に參内のため家門を出んとするや、刺客は謁を求む。かれはこの大典に子爵を參せしめじと注意せしものと見ゆ、子爵の平民主義は直にかれを引見す。その引見の刹那刺客は忽ち白刃を子爵が大禮服の脇腹に加へたり、而も一刀の下に彼れを仆せり。たま／＼護衛の警官これ認めてまた刺客を仆す。國家最大の慶事の日は忽ち不慶の日となれり。悲劇の日となれり。而して此れより文教の政弛委してまた回復の望みたえたり。

吾人はこの場合に於て前記大久保參議の暗殺とや、趣を異にしたる感興を認む。これに於ては大勢參議の死に依りて動かす、參議の施設は着々その死後に行はれて殆ん



と遺憾なかりき。森子の死に至りては然らず。子は未だ大勢に乗りたる人にあらざりき、子が死と共にその施設殆んど亡びたり。大勢は未だ子が行動の凡てを是認せざりしか。而も悲むべし、文教のこと今日なほその績を見ず。批難攻撃の標的たるもの常に文部を以て第一とす。有爲の人失はれて國家文教の基礎未だ定まらず。これまた一種の偉大なる悲劇にあらずや。参議の場合は刺客の身上に關する悲劇なり。此れは國家の悲劇なり。かれは政治的の戯曲にしてこれは思想上の悲劇なり、子爵の暗殺事小なるが如くにして實は一大悲劇なり。

明治暗殺史の最後の打ち止めは星亨氏の暗殺なり。星亨氏の暗殺は公人のその最後の場合にして、而も尤も詩情に富みまた尤も時代の思潮を示したる事件なりとす。星氏は偉大なる人格を有せりき。而して最も進歩せる思想を有したる公人なりき。その政治の舞臺に於ける遣り口の猛烈辛辣なるは頗ぶる米國式なる事世人の了知せる處なり。而もその猛烈にして辛辣なる傍若無人の行動は、深大の怨嗟を招きしのみなら

ず、かれは大虐政家大悪黨なりとの觀念を多數の腦裏に刻さしめたり。蓋しかれは悪黨なりしなるべし。大亂暴者なりしなるべし。然れども事業は往々悪黨に依りて成る、暴亂者に依りて遂げらる。而も其事業たるや、實に世を害するものゝみにあらずして善良なるものをも合せて成就す。余はかく考ふる毎に英吉利の海軍に想ひ到らざるを得ず。不撓艦隊をたほし英吉利の海軍を樹立したるものはドレークなり。而れどもドレークの素性を洗はゞ實に一個の海賊たるなり。星氏の暴政またドレークの業に近きものあり。かれは水道を經營せり。電車を計劃せり、東京灣の築港をも目論見たり。かれが先づ東京市に着目したる處その異彩を見る。況んやかれがその子分を愛するや懸篤を極め、財を散する事大に、且つその私行の極めて清淨なる現代稀れに見る所なり。かくの如き人格を有するかれはその勢力を東京市の教育界にまで及ぼせり、かれは市の教育會に於て極めて意義あるまた極めて時勢を道破したる演説を試みたり。かれは實に時運を代表したるものなりき。かれをしてこの教育會の壇上に立たしめし時運は眞に

人をあやまらざるものなり。かれはその私行に於てその行動に於て、恐らくは時代の模範となり得べかりしならん。併しながら舊式の思想はこれを以て意外の事となせり、怪しからの事となせり。こゝに於てかこの舊思想は刺客となりて發顯し、市會の議事堂に於てかれを仆せり。これまたシーザー殺害に勝る好個の悲劇にあらざるか。

刺客は舊幕の人なりき。蓋し暴漢星亨の如きをして市政を左右せしむるは、東京市民の恥辱なりと考へしならん。恥辱なりと考へて憤慨せしは當然なり。刺客は武士道の子なりき、孔孟教の兒なりき。武士道と孔孟教とにして意氣あらば、豈に星氏の行動に黙々たるを得べき。而してかれ刺客は世の進運を促す手腕を有せず。その素行は謹嚴なりと雖も、要するに舊式の義人なり、呪はれたる星氏の家庭圓滿なるに比して、刺客の家に明治紳士の甚だ名譽とすべからざるものあるが如きは、則ち以て兩者新舊道義の標準の甚だ異なるを認むべし。余は今孰れを揚げ孰れを貶さんと欲するものにあらず。唯事實をあげてこの新舊思想の衝突を言はんとするのみ。則ちかくの如くに

して仁義禮智一點張なる舊思想は星氏を仆したるなり。

星氏は仆されたり、併しながら今日の東京市民はかれが餘澤を被れり、かれが計劃したる電車は布設せられて東京市の面目は一新せり。東京市をしてさらに商業交通の都となし世界の大都たらしむべかりし東京灣の築港は、不幸にしてかれの死に依りその計劃を挫折せられたり。吾人はこの偉人の死に依りてこの一大事業の蹉跌したるを悲むと共に、さらにそれ以上に悲むべきものあるを見る。そは星氏の死がかくの如き光明の側面を消散せしめしとともに、爾來星氏一流の暗黒面の殘留するに至りし事實なり。星氏は明暗の兩側面を有したりしが、その與黨には黒面のみありて光明なし。刺客の一撃は實に星氏を一層の偉人たらしめしと共に、その殘黨をして主領の偉勳なくして獨りその悪行をのみ繼續せしむるに至れり。それ星氏の人格の大はその暴虐と共に幾多の掬すべき美所を發揮し仰ぐべき光彫を發揚せり。然れども星氏なき後のその與黨は氏の人格なくして、只その醜惡をのみ模し常に市政を危からしめんとす。これ

豈に甚だ悲むべき事ならずとせんや。

三〇

此に於てか見る、刺客の行爲は却りてその敵手の名を成し、その目的とせる風教の維持はこれを遂ぐる事能はず、却つてこれを悪化するに終れり。これ正に明治史上の一大悲劇なり。余を以てすれば單に道德の一事よりするも、星氏と刺客との間に於て何等上下すべき差等なしと信ず。而してこれまた新氣運と稱する無形の怪物と、舊思想と名付けられたる老翁との格闘にして、刺客は即ちこの兩者を操れる大勢の鬪弄物たりしなり。かくの如く觀じ來りて余は市會の議事堂に於ける星氏の横死を以て、明治年代に於ける尤も興味あるまた尤も意義ある悲劇なりとなすものなり。只余は今こゝに星氏の場合に於ける刺客事件の感興を盡す能はざるを憾みとす。蓋し暗殺は大久保參議の場合に於て明治の政治史及び政黨史の一半に關係し、森子爵の場合に於ては明治の思想史に密接の關係を有し、星氏の場合に於ては、前兩者を合はせて、政治と人文の發展との上に至大の關係を有する悲劇を構成せり。蓋しこれ等の事件はこれを考

究するの深きに従ひて益々詩興を多からしむ。余はかくの如き事件とその事情に關しては殆んど門外漢たり。故に知る處多からず、従つて語る處詳なるを得ず。今は只かくの如き感興のあるべきを記して、特にその文藝上の價值を語らんと欲したるのみ。それ詩興は凡人の事實にも認めらるべし。然れども偉人の事蹟にいたりてはさらにその大なるものあるべし。特に上記刺客の場合の如き一大危機に至りては、單にこれを狀境（シツエーション）として觀察するも好個の詩料たり。人或ひは偉人に於て認むべき詩興あらずとなし、尙ほ偉人は意志の人にして情の人にあらず、故に文藝の主題とするの價值なし、よしやこれを主題とするも何等の感興をあたふるものにあらずといふものあり。これ一見眞實らしくして實は誤謬の甚しきものなり。凡そ偉人とは單に意志の人をいならず、智情意三者の共に大に發達したるものにして始めて偉人たるを得るなり。偉人豈に情に於て缺くるものならんや、只偉人の心を知らんとせば大なる天才と深き考究とを要す。平凡なる作家は只偏狹なる事實と人物とを見るに過

三一

ぎず、偉人の苦悶苦衷を知るは只天才に待つあるのみ。抑も現代の文藝は作家自己の経験に重きを置く、果して然らば現代の作家に偉人の事蹟の詩材として認められざるは宜なり。然れも詩趣詩興は偉人の暗殺に際するか如き危機に於てその絶頂に達す。暗殺は事實に於ても文藝に於てもクライマックスたるべし。余は天才の出で、かくの如き詩題を捕へん事を切望す。それ明治の暗殺史はまた明治の戯曲史なり。何ぞ此の好詩料を委棄して可ならんや。

### ●現代思潮の一瞥

種子は一たび地に入りて温醸せられ、殆んど腐蝕して後始めて新芽を生ず。婦人は重患に等しき苦を経、殆んど死地に入りて始めて孩兒を生む。凡そ腐蝕疾病は新生に必須なり。只兩種の腐蝕疾病其形相似て其内實は同じからず、等しく腐蝕なり、然れども新芽を生ずべきそれと、死のそれとは全然趣を異にす。等しく死の苦なり、然れ

ども繁殖に伴ふ苦と、重病のそれとは正に相反す。前者は始にして後者は終なり。現時の時勢を論ずるもの、口を開けば則ち其腐敗を稱ふ。余は現代を以て、前代に比し必らずしも、しかく腐敗せるものとは思惟せず。然れども假にこれを論者のいふが如しとするも、それは果して死に至るべき腐敗なりや、抑々又新生に嚮ふべき腐敗なりや、先づこれを知らざるべからず。同じく現代を以て腐敗せりとなすも、其間甚しき逕庭あるを知らざるべからず。殊に吾等の注意すべきは、現代に於ける凡ての難撃が青年に向つて投せらるゝの一事なりとす。

廟閣に於ける大官の非行は最早咎むるに暇無く、議員の醜行は尋常の事となれり。教育家の收賄檢舉は半途にして停止せられ、宗教家の不徳はまた顧るものなし。然れども今や青年男女が相携へて公園を散歩すれば、かれ等は墮落書生と見做さるゝなり。高等學校の體格試験に十七人の三等症疑似患者を出せば、受験者の半數は花柳病に罹れりと呼號せらる。青年は凡ての腐敗、凡ての墮落の本源たるが如き觀あり。思ふに

明治維新の大業は當時の青年に依りて成れり。青年の世を聳動する力や大なり。然るに此の覇氣活力に富むべき青年が、當代に於ける最も墮落腐敗せる階級なりとせば、社會の前途、國運の將來、甚だ恐るべきものなしとせず。然れども余は現時の青年が如何に墮落せりと雖、今日の議員の如く、今日の教育家の如く、しかく墮落せりとはい思ふ能はず。これを再思するに今日の青年は吾國現代の凡ての責任を双肩に擔はされしものゝ如し。大官議員の悖徳を咎めざるは、其あまりに繁多なるがためなり。宗教家教育家に至りては其活氣なき、其非行を咎むるの詮だになきなり。獨り青年は然らず、かれ等は此社會に於て尤も望ある輩なり、元氣の充實せるものなり。蓋し青年は何れの時代に於ても、最も清淨にして、最も醇粹なるべきものたり。則ち余は現代の吾が青年がしかく攻撃痛罵の燒點となれるに拘はらず、其燒點たるの一事、却つてかれ等のなほ頼むに足るべき一大要素を有せるに想ひ到らざるを得ず。先輩長老はすでに齒牙にかくるに足らず。今日なほ現代の日本を左右し得べき徒はそれ青年か。然れど

も余が此言若し全然誤想より出で、現代の青年は全く爲すあるに足らず、其腐敗は地中に於ける種子のそれにあらずして、難病患者の病蔕にあるが如きものならんか、それは頗る寒心すべき事に屬す。余は今必らずしもこゝに彼等の現状の孰れにあるかを獨斷せじ。只少しく現代の思潮を覗ひ、かれ等青年をして今日の如く攻撃の燒點たるに至らしめし、其原因を尋ねんと欲するのみ。

第一に吾等は星董の文字に注意すべし。星董黨とは實に現代青年男女の柔弱を笑ひたる侮蔑の語なり。然れども其起因を尋ねれば、そは吾が近代の新思想より生れ來しものに外ならず。徳川期の文學に星董を説きたるものなく、それより溯りてはなほさらに然り。これ偏に西歐思想の流入に依りて顯はれしものにして、この種の思想は今を去る凡そ十年以前の新體詩に依りて傳へられ、終に今日の流行を見るに至りしものとす。余は星董者流の如何なる階級に屬するかを知らず、然れどもかれ等は兎に角古人の知らざりしものを知り、明治時代の先輩さへ味ふ能はざりしものを味へり。

其有せるもの、可否は暫らく問はず、その前代の事物と異なりて而も新たなるものなるは事實なり。新時代の舊時代を了解し能はざるが如く、舊時代に養はれしものが新時代の星董を了解し得ざるも宜なり。すでに了解し能はず、自から誤解あり。こゝに於てか星董者流は年長者の眼中に全然腐敗墮落の青年男女と認めらる。而してかれ等が實に新時代に於ける新進の標徴たるは人の思ひ到らざる處なり。かれ等星董者流自身は或は弱行の徒ならんも知るべからず、はた腐敗に瀕せるものならんも知るべからず、然れどもかれ等をしてこゝに至らしめし大勢に至つては、實に新進の氣運自然の趨勢たるを失はず。若しこれを導くに其宜しきを得んか、必らずさらに、飛動すべき新現象を招致し得べきなり。今や星董黨やうやく其影を收めて、なほ新なるもの來らんとするにあらずや。來らんとするものの善否は一にこれが指導の如何に依る。蓋しかれ等にして腐敗あらんか、其腐敗は一步を誤らば、全く死に終るべし。然れども其新生に至るも亦一步たり。この際に於ける識者の嚮導は尤も緊要なりとす。若しそれ

煩悶自殺に至りてはまた新時代の一現象にして、一見頗る厭惡すべしと雖、其裏面に至りては、むしろ喜ぶべく祝すべき要素なくばあらず。これまた星董尊重と等しく進歩の標徴たり。余は素より自殺者煩悶の徒の多からんを願ふにあらず、只其新方面に青年の活氣の横溢せるを注意せんと欲するのみ。

第二に注意すべきは東西の文物智識の著るしく融和されしに在り。今より十年以前に於ては、西歐の事物殊に其文藝を唱道し、これを紹介したるもの、必ずしも僅少なりしにあらざりしと雖、よくこれに精通せしものに至りては頗る稀なりき。蓋し今日と雖、其精通を問はゞ、むしろ甚だ多からざるべしと雖も、また昔日の比にあらず。且つ其普及實現に至りては實に驚くべきものあり。則ち外國の思想は丸善書店に於ける洋書の賣高と共に吾が青年社會に浸潤せるなり。今や中學高等學校の生徒、すでに高尚雄大なる書冊を購入して其書架を飾る時代となれり。然るに西歐の思想は根柢に於て吾が在來の思想と其趣を異にせり。たとへば從來情力を有し、なほ今後も暫らく

其情力の盡きざるべき儒教若くは武士道の如き、青年の間に於ては今日其勢力極めて薄弱となれり。かれ等は新らしき思想の影響を受けたるなり。若し今年長の人此の状態を見れば何とか評すらん。蓋しこれを目して直ちに墮落腐敗となすの外、また言ふ處を知らざるべし。年長の人は忠孝の外、さらに此れに超絶したる道義の根本思想ある事を夢想だも爲し能はざるべし。而も今日の先輩多くは斯くの如き人なるに於てや、猥に青年の墮落を呼ばるゝも怪むに足らじ。

殊に學術の進歩は急速にして、昨日の先覺者今日時勢に後るゝ觀あり。斯くの如き時代に於ては自から時務に通せりと思惟しつゝも、また不知不識の間に頑迷の亞流となり了する恐れあり。時はしかく如く向上的なり。其急激なるや往々輕浮の態度を伴ふ難あり。而も時代の飽まで進みてやまざらんとするは事實なり。この間に於て多少の犠牲を出し、創痕を被るものあるはまた己みがたし。余は現時の學界若くは想界に於ける向上的精神の横溢せるを見、これを以てなほ將に來るべき大飛躍の階梯たるべし

と信ず。頑迷固陋の徒この趨勢に妨をなし、この氣運を杜絶せしめざれば幸なり。然れども。今や社會の一面を見れば新進の士、競て其要路に立てり。此の氣運幸に永く衰滅を免れんか。

第三に吾等は風俗の變遷を見る。今日を以て奢侈の氣風やうやく盛なりと爲すは、また所謂先覺者の憂慮なり。思ふに現時社會に樞要の位置を占むる人の、殆んど其凡ては弊衣粗食辛勞苦學して今日に至りしものゝみ。現時の青年が衣食を美にし、裝飾を盛にし、殆んど紳士の如くなるは、これ等先輩諸氏の考量よりすれば、頗る其意氣の銷沈を示すものなるべし。然りかれ等の意氣は壯大にあらざるべし。今日の世はなほ弊衣粗食に甘じ、苦學して身を立つべき秋なるやも知るべからず。然れども素と弊衣其ものに賞すべき所あるにあらず。粗食其ものに何等の長所なし。要は意氣の如何にあるべし。この意氣にして銷沈せざらんか、盛裝美食また厭ふべき限りにあらず。さらばこれを他面より見れば、今日に於ける社會の生活状態は前日と全然趣を異にせり、

其程度は著るく上昇せり。活氣燃るが如き青年の、此社會にありて周圍の壯觀に誘導せらるゝもの、焉んぞ其風に化せざるを得んや。況や又新時代青年の腦力を用ふる、實際昔日の如き弊衣粗食のよく堪ふる處にあらざるを如何にすべき。西歐の學生、殊に英米國の大學生の、全然紳士と異らざる生活を送れるは、夙に吾人の風聞せる處にあらずや。吾が青年のかれが如き状態に向つて進むはまた自然の己みがたき處たるのみならず。さらに又其必要となす處たり。

吾が教育界の現状を見るに、學校教育は青年が他日世に出で、成功を博せんとする其準備の場たるに過ぎず。然るに英米の高等教育は紳士たるべき資格をつくるに在り。則ちかの青年の行爲は素より、其風尚習俗みな紳士たり。かくの如くにして眞實の紳士は養成せらる。吾に於ては初めより後日の立身を期す。故に學生たる青年は、上長よりの嚴命に依りて簡朴質素を旨とす。簡朴質素は可なりと雖も、これを尙ぶ所以に至りては甚だ其意を得ざるものあり。何となれば、かれ等は修業の途にあるものなり

との理由の下に強ひられて、これを守るものなればなり。則ち學生時代の質素簡朴は他日の驕奢を豫期するものなればなり。而してこれ一つに教育者の偏見より出づ。余は此の一事に關しても疾くに故福澤先生の卓見に服せざるを得ず。先生は實に學生に向つて風裝の忽にすべからざるを説きたり。慶應義塾學生の風俗が一異彩を放てるはこれがためなり。只それ其弊に至りては末徒の誤解のみ。今や時勢は所謂奢侈を要求す。これ自然の道なり。風俗の變遷を以て直ちに奢侈となす、すでに誤れるなり。然るに年長者往々此事理を解せず、これを以て現代の墮落となし、徒に慷慨するは頗る其當を得ず。それ現時の青年には意氣を失ひ、徒に奢侈を追ふもの多かるべし。然どもかれ等は則ち此の風俗變遷の際に於て犠牲となれるものたり。今後識者の指導誤まるなくば、この趨勢より新風俗新氣風出づべく、はた新紳士道起るべし。只吾等の深く注意すべきは、現代のなほ幼稚にして前途のなほ頗る遠きに在り。現代の氣風習俗にして、若しこれに停滯の趣あらんか、これ即ち進取の意氣を失へるものにして、尤も憂



慮すべきものなり。今は多少の犠牲に顧慮する處なく、飽まで向上邁進すべきなり。

病めるものは食を欲せず。病者にしてなほ食欲あらんか、其病はなほ危急を告ぐべきものにあらず。欲望は實に生命なり。余は欲望を愛す。余は生命の必須條件たる欲望を愛す。星董の尊重、新智識の鼓吹、華美の風尚、これ等は絮説をまたず、青年の非行また此欲望の發現に外ならず。かれ等青年果して不品行なるか、これを極言すればこれ亦其有爲の力あるを示す。斯の如き今日の風潮風俗にして其指導者を得んか、來るべき新社會を組織すべき緊要の素たらん。徒らに禁遏主義を持して得たりとなすは時勢を徳るものなり。只現時に於て尤も戒むべきは輕兆の風なりとす。事物の變轉急にして、新を追ふに急がはしきや、輕薄の風は自からこれに伴ふを免れずと雖も、この氣風にして存せんか、將來の發展恐らくは望むを得じ。何となれば輕薄はまた満足停滯を伴ふものなれば也。たとへば人の濫りに成功を説きしが如き亦此種の現象なり。然れども今ややうやく其効果なきを覺れるが如きものあるは甚慶すべきなり。

たとひ今日の青年を墮落せりとし、時代を以て腐敗せりとするも、余は如上の趨勢よりしてその腐敗なるものが、社會を枯死せしむる底の者にあらずして、むしろ或は新生を興起せしむるものにあらざるかを感せずんばあらず。識者の出で、現代を指導するあらば更に幸なり。

### ● 平 凡 論

凡そ人の幼年時代の希望は將來陸軍大將たらむと欲するにあり、若くは臺閣の大臣たらむと欲するに在り。やうやく長じては希望の所詮現實にせられざるを覺ると雖もなほ且つ馬車を街路に驅らむことを願ふ。斯くの如きは少年自からの望む處たるのみならず、父兄も亦その幼なき子弟を勵ますに、かゝる野望を懷持すべきを以てす。而も希望する所は容易に得られず。進んで少年の中學に入り高等學校に入り、その識の進み智の開くに比例して、その野心は益々退縮し、業を太學に卒ふる頃に追ひては、七十

四四  
圓八十圓の月俸をさへ切望するに至る。而も此の容易なるべき願望をさへ達し得られずして、卒業の後には五十圓六十圓の薄給なほ且つこれを得るに汲々たるものあり。此れ豈に甚だ平凡にあらずや。淺間敷次第なりと雖も、またやむべからざる實情なりとす。

人間一生の歴史はまた世界の歴史なり。幼少時代のロオマンチックは中年以後に至りて平凡化する。古の歴史はロオマンチックなり。その人物もロオマンチックなり。吾人は成吉思汗の雄志を知る、アレキサンダ大王の壯圖を見る。シイザアの大業、シヤアレマンの歐洲一統、曹孟徳の雄邁、秀吉の三韓征伐、而してナポレオンの事業、何れもみなロオマンチックの色彩あり。素より上古若くは往昔の事、これを後代より見れば、何れかその傳奇的稗史的雲霧の事實を蔽ふものなくばあらずと雖も、これを最近の事實と時勢とに比するに、自からその異なる處なくばあらず。蓋し偉人の時代去りたればなり。獨逸の故宰相ビスマアクはその政略に於て、はたその人格に於て、最

近代の人にあらず、や、ロオマンチックの面影を傳へたる最後の偉人なりき。かれが政權を掌握せるの間、獨逸の國權は大に振張せり。ビスマアクの後ビスマアクなし。ホオヘンロオヘ公もビユウロオ伯も、むしろこれ平凡なる政治家ならずや。然れども宰相が平凡なりとの故を以て、吾人は未だ獨逸の國勢衰へ、獨逸の國權振はずといふ事を聞かず。グラッドストオンは偉人なりき。グラッドストオン逝き、ソルスベリイ侯なき後英吉利の政界は平凡化せり。チエンバレンエン氏嘖々の名ありしと雖も、爲政の局にあたれるものはバルフォア氏なり、カメル、バンナアマン氏なり。而も英吉利の國威些かも毀損せられたるを聞かず。英雄時代は去れり。ロオマンチックは過去の時代となれり。現代はデモクラチックの時代なり。余は貴族制度を愛す。專制を愛す。然れども時代の趨勢はデモクラチックなり。事實は事實なり。而も悲むべき事實なりと雖も、吾人は此の事實を認知せざるべからず。蓋し古にありては、何事も一人に依りて代表せられたり。民衆の智能才幹は一人に集中せり。凡てを集中したる此の一人は

則ち偉人なり。すでに偉人なり。その行動自から尋常にあらず、則ちまたロオマンチツクなる所以なり。然るに現代はこれに反す。現代は凡ての智能と才幹とを一人に與ふるを許さず。これを萬人に配與す。民衆は盡く爲政者なり、民衆は盡く軍士なり。故に一人出でざるも國家はなほ強大なり。例へば古にありては一人に與ふるに百の方を以てせり。現代にありては十人が各十の力を有す、若くは二十人が各十の力を有す各個人が有する所の能力は小なりと雖も、その總計は則ち大なり。華々しき行動の世を眩惑せしむるものなしと雖も、功績は却りて少しとせず。これ現代の状況なり。事態かくの如くなれば、現代に於ては事實も平凡なり、人物も平凡ならざるを得ざるなり、然れども此の平凡は有力なり。幼年時代の陸軍大將は些の能力なしと雖も、中年以後の月俸若くは年俸は多大の功果あり。デモクラチツクの平凡は悲むべしと雖も、その功果に至りてはまた意想の外にあり。

デモクラシイの平凡化は今後益々大なるべし。然れどもそは永久に繼續すべきものか。それ人間一生米鹽の事に齷齪するに至りては、これまた昆蟲の生涯と異なる所なし。月俸五十圓六十圓時代の生活にはなほ多少の空想あり、なほ多少の理想を存す。若しそれこれより一步を下りて糠味噌と味噌汁との間に葬り去られむか、そは甚しく平凡なると共に、また甚だ憫むにたへたるものなり。幼年少年時代の希望は全然夢幻なりき、空想なりき。然れども月俸五十圓六十圓以後の希望は現實なり、剴切なり。人間の眞個の價値と成果とは此以後に顯るべし、是より後の奮勵努力は則ち一々功果を伴ふ。幼年少年時代の空想は日を経るに従ひてやうやくその影を收む。中年以後の希望は則ち刻々にこれに近接し得るなり。ひと度標準以下に陥りたる希望は、これより再び上昇して、恐らくはこゝに始めて幼年時代の空想を現實にする事を得む也。只その功果は必らずしも形而下に限られず、さらに高き形而上に顯はるゝ事あり。余があまりに比喩に拘泥するを笑ふ勿れ。あまりに預言者の口吻を用ふるを笑ふ勿れ。思ふに現代の傾向は益々デモクラチツクの平凡に趨くと雖も、個人の上に於けると等しく、此の

趨勢は自から新局面を展開して、理想の實世界に現實にせらるるの時代を招致すべし。吾人は歴史がデモクラシーの平凡を以て終り、物質化を以て終局すと信ずる能はざるなり。

これを文藝の歴史に見るに、古の文學は多く神異を説けり、ホオマアの詩には神怪を見ず。然りと雖もその謠ふ處は天界の事なり、偉人の事なり、智者と勇士との事なり。拉典の文學に於ても伊太利の文學に於ても、その詩材は高大幽遠の事を多しとす。ダントの筆は尤も現實的なるべしと雖も、その思想は天上地下の幽明の事に屬す。ミルトンの失樂園の如き素より天界の事なり。ホオマアの天の事を語りながら恰も地の事なるが如きに反し、ミルトンに於ては地上の事なほ天界を想はしむ。蓋しミルトンは尤も空想夢幻なるものか。歴史上最後のロオマンチックとも見るべき偉人はナポレオンなるべし。ナポレオンに比すべき想界の偉人はゲエテなり。ゲエテは必ずしもロオマンチックの詩人にあらず、當代にありては尤も平凡なる尤もデモクラチックな

る態度をとりたるものと云ふべく、親からも亦斯くの如き自信を有せしならむか。その悪魔は素よりダンテの悪魔にあらず、ミルトンの見たるが如き恐ろしき風格と相貌とのあるにあらず、寧ろ殆ど尋常の人間にして、人と語り人と交はり人と共に樂しむ。ファウストの此れに魅せらるゝも宜なり。然れども此の殆んど全く人間の如くなるがなかになほ一片の鬼氣を有す。オペラに見るメフヒストが、なほ頭上一條の細長き角を有するは、蓋しよくゲエテの所觀を具體的に示したるものか。此の點に於てゲエテはなほ古の人たるを免れず。なほ多少ロオマンチックの色彩を帯ぶるを免れず。かれは文藝史上ナポレオンと等しき位置にありといふべし。則ち半は古の人にして半は近世の人なり。

現代の悪魔は全然人間なり。その頭には角を見ず、その眼光は尋常なり。余は今こゝに斯くの如き悪魔を指示する能はず。然れども佛露の自然派のうちには屢々此種の性格を認め得るなり。今やロオマンチックは殆んどその跡を絶てり。現代に於ける大體の

傾向は自然派なり。よしやその勢は昔日の如くなる能はずとするも。その影響は文藝の各部に残れり。日常平凡の事實を材としてこれを小説となす。平凡なる事實が則ち觀者の考察に依りて小説たるなり。(今日吾が文壇に代表せられたりといふ此派が、果して實際にこれを代表せるか。余は些か疑なきを得ず。)吾人の日常行動及び見聞は則ち小説なり。此れを勇士の死、佳人の薄命を要件としたる小説に比するに、その差幾何なるか。所謂社會の大理想宇宙の大真理を説くものと比するに、その平凡なる何ぞしかく甚しきや。然れども宇宙の真理は却つて日常の些事にあり。自然派の主張は現代の趨勢にしてまた不動の眞理なり。而してかくの如きは小説に於てこそや、新事實なるべしと雖も、詩の世界に於てはすでに疾くに感得せられし傾向なりとす。十九世紀劈頭の自然派は則ちこれなり。落葉と小猫を以て嘲られたる湖派の詩人は則ちこれなり。路傍の野花、一頭の田鼠を以て詩料とせしは近き過去の事にあらずや。現代に於て吾人の一舉手一投足が小説の材たるまた怪しむに足らず。而も此の平凡なる材料

に對する觀察の様式の極めて通俗平凡なる、正にデモクラット時代の趨勢に附合せるものといふべし。

併しながら文藝の發展はこゝに終るべきか。余はまたこゝにかの比喻を假用すの必要を見る。文藝が只平凡の寫實と平凡の描寫と平凡の主觀とを以て終るものとすれば、そは殆んど無用の閑事業なり。吾人は平凡なる事實のうちに深大の理を認めざるべからず。平凡を以て眞個の文學たらしめざるべからず。一羽の蝶白魚の頭の寄生蟲は、學士が一代の研究に餘る大問題なり。況んや人間の一舉一動また深大の意なからむや、今後の文學はかくの如き題目の眞面目なる研究なるべし。所謂新らしき今日の自然派の主張がやゝかゝる傾向を有するは、やがてその一轉化を起すべき前提ならずとせむや。余は今こゝに文藝の事を論せむと欲するものにあらず。只文藝も、亦た大勢の渦中にありて孤立するものにあらず、時勢と共に益々平凡化し去るを述べ、さらにその時運と共に一轉化すべきを言ひたるのみ。

個人の一生と世界の歴史と文藝の發展と、豈に一々その途を異にするものならむや。余は今平凡の甚だ重んずべくまた頗る味ふべきもの多きを言はむと欲するなり。

### ●英吉利思想

#### 一

余は頃日雑誌「新潮」に對し、何故に英文學は日本に行はれざるか、との疑問に就て、一條の談話を試みたり、今またこゝに英吉利思想の如何を説くに前き立ちて、再び此の疑問に對する解釋を興へ、さらに本題に入らんと欲す。素よりなほ溯りてこれを尋究すれば、果して英文學が日本に行はれざるか此の疑問がすでに疑問なるべし。然りと雖も現時吾が時流の文壇に紹介され、評論され、翻譯さるゝ處、多くはこれ大陸文學にして、白堊島裡の文事を談ずるものは極めて稀れに、よしこれありとするも多くは時代後れにあらざれば、俗文學の紹介に過ぎざるが如し。現状にして斯くの如

くなれば、余は少くとも現時に於ては、英文學の日本に行はれざる事實を承認して、此の疑問を提出せんと欲するなり、余はこゝに重ねて此の疑問に答へんと欲すと雖も未だその眞因を究めたりとなすものにはあらず。只近者偶ま／＼思ひ到りし處を披陳せんと欲するのみ。則ちその第一の原因は、社會一斑に於ける英語の讀書力の不完全なるにあり、第二の原因は趣味の修養の異なるにあり、以上は吾人の有せざる諸點にして、むしろ消極的方面なるが、さらに吾人の有する所にして、英文學の趣味と一致せざる積極的方面如何と見るに、則ち第三の原因として、日本社會の趨勢を擧げざるべからず。なほ第四の原因には、同じく日本社會の現状の英文學を受くるに適せざるにあり、第五の原因には思想の相違あり。その由來する處なほ多々あるべしと雖も暫らく以上の五因を擧げてこれを説かんと欲す。

#### 二

第一の原因たるべき英語の讀書方に就て見んに、今日の狀態にありては、たとへ大

學の課程を終へたるものと雖も、その優等なるものを除きては、英文學を玩味するの讀書力なし。中學校以來専ら語學の修業に力を致したる大學卒業生に於て然りとせば一般の讀者若くは文筆の士の讀書力に至りては想像するに難からず。余は敢て學生若くは一斑の讀者に就てのみ言ふにはあらず、十年若くは二十年中學高等學校に於て教鞭をとれる英語専門の教師たりとも、キツブリングの英語を玩味し得るものは少なかるべく、メレデイスの英文を鑑賞するは、容易の事にあらずといふのみ。

歐洲の諸國語のうちにて、英語は尤も難解なる國語の一たり。凡そ一國の言語はその解釋の難易と共に、その特殊の色彩を有す。この特殊の色彩は容易に鑑賞しがたく従ひてまた容易に他國語に翻譯しがたし。余の難解といふは則ち此の謂にして、英文學の如きはその尤も甚しきものなりとす。然れども若し英文學にして、一たび此れが他國語に反譯せらるゝに及びては、その特有の色彩の失はるゝと共に、その解釋は原文に對すると自から難易を異にするものあり。

英語英文學の難解に反して、大陸諸國の國語及び文學は、露西亞の外むしろ容易なるものあり。佛蘭西語佛蘭西文に至りては、頗る容易に解釋され得べき特色を有す。解釋の容易は、自から人をしてこれに近づかしむるの便あり。これ則ち佛文學の、吾が文壇に紹介され、批評され、また多く翻譯さるゝ所以ならんか。然れども佛文學と共に、他の大陸文學をしてさらに解釋に容易ならしむるものあり。則ちその翻譯なり。さなきだに解釋に多くの困難を有せざる大陸文學は、その翻譯に依りて、さらにその容易の度をして多からしむ。たとへば佛蘭西文學の英譯されたるものは、その辭句文章共に極めて平易なり。由來大陸國語の比較的容易なるが上に、さらに英吉利譯に依りて一層の容易を致すや、そはやがて一斑讀書社會の讀書力に相當す。こゝに於てか讀書社會も文筆の士も、争ひて大陸文學に趨く、その趨くの急なるや、また大陸文學の英譯が、往々不完全なるが如きは敢て問ふ處にあらざるなり。而もかくの如きはまた自然の數ならずとせんや。モーパッサンは尤も多く吾が文壇に翻譯されたるもの

なり、而もその大多数は英譯に依りたるものなり。試みにその英譯をとりて此れを一讀するに、その平易なる殆んど日々の新聞紙を讀むが如くなり。英譯則ちかくの如くなれば、中學程度の讀書力を以て容易にこれを讀破し得べし。余は嘗て某高等學校々友會の雜誌に於て、此の作家の翻譯を見たり。解釋の困難が、吾が時流文壇に於ける英文學の消長に多大の關係あるはこれを以ても察するを得ん。

## 三

何事にも輕快を好む吾が現代の趣味は、莊重を尙ぶ英吉利趣味と一致せざる處あり。たとへば今日の吾が時流文壇に於ては長篇と見るべき小説の刊行せらるゝ事極めて稀なり。近時や、長篇を求むるの傾向なきにあらずと雖も、大體に於てはなほ短篇に執着す。一つは社會状態のやみがたきに出づと雖も、所謂單行本なるものも、多くは短篇の合本なり、よし一貫したる小説と雖も、これを英國流の小説に比すれば、なほ短篇たるを免れず。その量に於てかれの作に對比し得るものは極めて少なし。量の

問題は直ちに趣味の問題にはあらざるべしと雖も、自から多少の關係なきを得ず。聞くが如くは、英吉利の社會は短篇小説を喜ばず、若し短篇集を公にせんと欲せば、これに長篇らしき外装を施し、表題の如きも一貫したる小説らしきものを撰みてこれに被らしめ、かくして始めて世に問ふを常とせりとか、かくの如きは自から彼我の趣味の異なるより來れりとすべからずや、

さらに我が文壇に流行せる外國文學を見るも大抵は短篇に外ならず、ゾラを外にしては、流行の佛蘭西小説を始め、ハウプトマン、ゾーデルマン、若くはイブセン等の戯曲の長篇にあらざるは勿論、ゴルキー一流と雖も、その世に喧傳せらるゝものは多く短篇にありとす。然れども趣味は單にかくの如き量の問題にあらず。やゝ長篇なるダナンチオが迎へられ、ゾラが流行せしが如きは、全く吾が趣味の、北歐的英吉利の割切なるものを好まずして、南歐的奔放なるもの若しくは陽氣なるものを愛するが爲めなるべきか。蓋し現代の日本は英吉利に於けるが如き趣味を有せず。然れども余は今



こゝに此の問題に深く入らざるべし。何となればそれは後段思想の問題と併せてこれを説くべく、さらに英吉利思想に對照してこれを説かんと欲すればなり。

## 四

第三の原因に至りては尤も有力なるものと見るべし。英吉利の極めて保守的なるに反して、吾れは驚くべき進歩的態度をとれり。進歩的と言はんよりはむしろ突飛的態度なり。歐洲にさへ未だ實際に行はれざるものが、すでに日本に於ては時代後れに屬する事あり。昨獨逸に學び、今は佛蘭西に趨き、かれをとり、これを撰びて、廻走する狀は則ち走馬燈なり。かくの如き狀勢にありては、たとへその趣味もその讀書力も凡て英文學を鑑賞するに足れりとするも、その流行は恐らく永續するものにあらず。況んやその然らざるに於てをや。

然れどもかくの如きは、吾が社會并に思想界の現状やみがたき處なりとす。吾れに於ては智に於てもまた情に於ても、常に何者をか求むるに急なり。故に若し新らたな

るものを認めたらんには、直ちに迎へてこれを味ふ、只その新奇ならざるを恐る。而もその慾望はたえず廻轉す。昨はマーテルリンクを喜び、今はイブセンを好む。而もマーテルリンクもイブセンも十年以前に於てすでに一度鑑賞されたるものなり。かくの如き社會に對して、恰も吾が萬世一系の皇統にも比すべき、一定の思想と秩序とを有して、その道程を進む英文學が愛賞せられざるも亦自然の數にあらざるか。

## 五

前段すでに説きしが如く、英吉利は秩序の國なり、事物整然として一定の道程を追ふ。但し秩序と云ひ整然といふは。既定の習慣ありとの謂にして、決して國情の簡潔明瞭なりとの意にあらず、法律は不文律なり、學制は殆んど吾人の了解しがたき状態にあり。その他行政上の組織、貨幣の制度、凡て複雑にして門外漢の容易に覗ひ知りたきは、英吉利風なり。然りと雖もその習俗は、過去幾百年の規定にして嘗て亂れずまたこれを亂さんと欲するものなし。然るに吾が國情は全くこれに反し、一面には建

六〇  
設に力を盡すと共に、他面に於ては破壊に力を致すべき事情の下にあり。極端なる個人主義は極端なる國家主義と相隣りし、熱心なる自由主義は、忽ち忠君愛國者と變ずるの時代なり。彼我の社會狀態の相違かくの如くなれば、その文藝に於ける嗜好の互に相ひ容れ難きまた知るべし。

然るにこれを佛蘭西に見るに、その國情、忽ちにして帝政となり、再び共和政となり、極端なる自由を好むと共に、王黨の餘勢なほ盡滅せざるが如き有様にあり。かくの如き状態にある社會の文藝は、また自から吾れに好適するものにあらざるか。さらにこれを見るに吾が時流文壇は、個人の思想に於て、はた社會の狀態に於て、大に東洋的なる露西亞文學を歡迎せり。吾が現代の制度に不満を有する鬱勃たる自由の精神は、トルストイに於て快き代辨者を得たり、ゴルキーに於て思ふ存分にその懷抱する處を吐露せられたり。さらに一轉して、ドストイェフスキー、メレヂコヴスキーの如きに於て頗る吾が思想に適應するものを認めたり。一言これを蔽へば露西亞文學の

直情徑行は、頗る吾が現代の思想にかなへり。これ一つに國情若くは社會狀態が酷似するがためにあらざるか。若しそれ英國の千遍一律なる社會制度に比し、吾れの社會を見んにはその異なる處幾何ぞや。

## 六

英文學の吾れに行はれざる最後の原因は、彼我の思想の相違にありとす。すでに思想の相違といふ、實は此一語のうちに趣味の相違も社會制度の相違も、凡て抱括せらるべきものとす。こゝに於てか先づ起るべき問題あり、曰く英吉利思想は到底吾が思想と一致すべからざるものか、疑問はこれなり。今暫らく彼我の相違を論ずるをやめてこゝに英吉利思想の如何を説かしめよ。

なほ之に前き立ち暫らく余をして余の所感をのべしめよ。こゝに同じく一讀せんと欲する、英國文學と大陸小説とありとせば、余は必らず前者を撰ぶを常とせり。此れ蓋し余の學ぶ處に偏すると、余の性癖の然らしむるものあればならんか。余はかく

の如く思惟し、さらに思ふに、英國思想は極めて吾が思想に縁遠きものにして、到底これに親炙すべからず。従て余は吾が外國文學及び外國語研究の、先づ南歐のそれに依らざりしを以て、終世の恨事となせり。素より余一個の性情はこれを愛好すと雖もそは一個の私事にして、以て公に及ぼすべきものにあらずと信せり。特に日英同盟の發表せられ、さらにその改訂の公にせらるゝに當りてや、余はこれに對して多大の疑惑を抱けり。只若しこの盟約を以て攻守同盟一時の權略に止まらしめんか、必らずしもこれに對して憂慮するの要なし。然れども苟も同盟を以て、兩人種の間における心情の融和、利害の一致たらしめんと欲せば、日英同盟の如きは、或はそれ失計に非ざりしか、余は當時此の如き感を禁ずる能はざりき。英國と結ばんよりは、むしろ佛露の諸國と結ぶの、其同情と利害との關係に於て、互に利益する處あるに非ずや。抑も當路の爲政者、朝野の經世家、何の見る處ありて、此の一大決行を敢てせしか、余に於ては頗る疑惑にたえざるものありき。然れども爾來これを考慮するに、英吉利は果して

吾與國にあざらるか、かれの思想は全然吾れの思想と、その歸趣を異にするものなるか。余は今に至りて、却つて余が過去の考察を疑ふに至れり。今次に先づ彼我類似の諸點を述べん。

## 七

第一日本も英吉利も島帝國なり。形而下の事は今余の述べんと欲する處に非ずと雖も、一國の位置形狀はやがてその思想と連關す。ノルマン人の遠征よりして、近世の英吉利はまた遠征の民族なりし事、こゝに贅するまでもなし。フルード氏の「十六世紀に於ける英國の海員」を讀みしものは、かの海事思想と宗教と而して當時の英吉利思想と如何に連絡せるかを知るべし。而して此の海國的思想を知るものは自から直ちに吾が倭寇の支那海岸に出沒したる以來の海事思想に想ひ到らざるを得ざるべし。日英の海事思想は、蓋し兩國共通の一特徴と見るべきか。餘りにセンチメンタルにして、あまりに空想的なる、吾が現時の文壇は、キップリングの帝國主義的詩歌、ステイツ

ンソンの冒険的小説を鑑賞する能はずとするも、かくの如き侵略的冒険的剛健の思想が吾が民族の内に全然その根拠を有せざるものとは斷すべからず。

なほ日英共通の思想を擧ぐれば、その共に歴史を重んずる處相似たり。吾が萬世一系の皇室を奉載するが如く、かれもその門閥を尊重す。貴族はかれの尤も敬重する處にして、亦社會樞要の地位にあり。幸か不幸か、明治の新事物はその初め多く、歴史を有せざる米人の手に依りて紹介せられ、さらに他面に於ては、共和政の佛蘭西に依りて傳へられしを以て、歐米の諸國は等しく極端なる個人主義平民主義をとれるが如く思惟せられたり。然れども焉んぞ知らん、その實際に於ては、家族主義國家主義が全然吾が習風にあらざる如く、英吉利に於ては、貴族主義階級主義の思想また頗る強大なる力を有せるなり。

若し東京市に智恩院南禪寺、若くは法隆寺東大寺あらしめば、そは恰も東洋のロンドン市たるべし。ロンドン市は嚴として帝國首都の體面を有す。而してその古きは東京

市に勝れり。若しそれロンドン市の古きに、吾が萬世一系の皇室を添えんか、森嚴また侵すべからざる未曾有の帝國を見んなり。かれは都府に於て古く吾れは皇家に於て然り。兩々相異りて而も一點共通の趣あるは、頗る興味ある處ならずとせんや。更らに日英兩者の尤も類似したる點は、兩人種の共に複雑なるにあり。英人はもとゲルマン種族なり、然れどもそのうちにはラテン種族の多大なる混交あり、ケルトの血統あり、その言語の如きも、その文法及び國語の組織に於て、全くゲルマン語なりと雖も、佛蘭西語及びラテン語の混入頗る多量にして、その百分率は却つて前者を壓するもの、如し。吾が日本民族の事に關しては、専門諸家の所説區々なりと雖も、一面に於て蒙古人種あり、他面に於てマレー人種あり、さらに北方アイヌ人種をも交ふる事は、また異論を挿むの餘地なかるべし。従つてその言語の如きも、和漢兩種の用語あるのみならず、マレー、アイヌの言語をさへ交へたりといふ。これ則ち兩者共に島帝國たるの故なるべしと雖も、此の人種混交の結果、また日英兩國その趣を一にするものな

からんや。吾人は一見殆んど縁なきが如き此の日英兩人種に於て、少からず類似の點を認めずばあらず。然れども余は今進んで英吉利の思想を説かざるべからず。

## 八

第一に英吉利人の保守的なるは世既にこれに了す。これを日常の事實に見るに、かれはなほ室に暖爐を用ふ。街路には乗合馬車を見る。その教育制度は頗る不完全なり。その國語を以て大學の教科目とせしは、近く十年以内の事に屬す。歐洲の最新思潮は容易にこゝに入らず、自由思想の發動と共に佛蘭西の革命思想に同情したりし、當時の詩人も、一たびその革命として事實に顯はるゝや、矛を逆まにして此れに反抗するに至りしは、よく英人の思想を顯はしたるものといふべし。

大陸の文學は互に紹介し翻譯して、その思想を交換せるに、英吉利に於ける外國文學の翻譯は頗る遅々たり。これ一には英人の尊大自から恃む處あるが爲めなりと雖も、亦他の新奇に趨くに吝なるの致す處に外ならず。多くの翻譯疾くに獨逸語若くは佛蘭西

語に於て得らるゝに拘はらず、ひとり英譯の得がたきは讀書社會の熟知する處なりとす。蓋し英人の保守は余が今更ら贅するの要なきか。

## 九

英吉利人の思想は莊重なり。莊重の下には尊大、謹嚴、質實、遠大等の如き特徴の含蓄せらるゝものあり。これを細説すれば、一々その例證をあぐべく、その興味また少なからずと雖も、今その用意なし。かりに此等を莊重の一字に抱括して説かんと欲す。

英人の思想は苟も輕浮ならず。常時公刊せらるゝ小説の凡て浩瀚なるは前述の如し。更にその内容に至りても、頗る嚴肅莊重の趣なり。余は敢てメレテスやワード夫人や、さらに溯りてエリオットの作を説かざるべし。むしろこれを卑近なるキツブリングの短篇に見るも、なほ雄大の着想をこゝに認め得べく、ドイツケンスの滑稽に至りてはなほその嘲笑の間に、森嚴なる理想の存在するを見る。遠くアディソンは輕妙を以て

稱せらる、而もその輕妙は文章辭句の輕妙にして、その懷抱せし思想と心情とに至りては、頗る深厚なるものあり。ハーデーの小説は、これを佛蘭西寫實派の小説に比すれば、極めて健全なるものなりと雖も、英吉利の社會はこれに鑿鑿す。

英人の莊重質實は治ねく世の知る處なりと雖も、これを形而下の事物に見るもなほ容易に認知するを得べし。たとへばその市街に見るも然り。大英博物館の如きはむしろ近代の建築に屬すと雖も、なほ頗る莊重の趣あり。若しそれセントポール、ウエストミンスター等の寺院の如き、誰かその莊大嚴肅なるに驚かざらん、寺院の如きはもとこれ莊重なるべきもの、必らずしもこれを以て例と爲すべきにあらずといふものあらば、さらに轉じて一個の橋梁に見るも可なり。吾人はロンドン橋タワー橋等の巍然として(余は敢て巍然といふ)、ロンドン市の重きを爲すを知る則ち、これを寺院に比して、殆んど差異なきを感ぜずばあらず。

## 十

なほ英吉利思想は頗る實際的なり、純理空想は其長ずる處にあらず。その實際的活動は印度に出でてはその侵略となり。濠洲に入りてはその殖民となれり。世界の各方面に領土を有して、二六時中日輪の未だその領土を照らさざりし時なしと誇稱するもの偏に此の實際的活動に外ならず。

英吉利にはカント出でず、ヘーゲルも出でざりき。然れどもカントを生みしヒュームは英吉利の哲學者なり。英吉利の哲學は實際的なり。大陸のデカルト、スピノザに對比すべき、英吉利に於ける近世劈頭の哲學者はホッブスとロックとなり。此の兩家の哲學が如何に純理空想にあらずして、一つは政治的色彩を帯び、他は心理學的傾向を有し、か。ニユートンは高遠なる思想を有せり、然れどもその學説は極めて平凡なる事實より得られたる、高尚なる學理にして而も極めて實際的なり。吾人はファラデーの學界に及ぼしたる偉大の功績を忘るる能はず。而もかれの化學は全くその實驗より出でしものなる事を記憶せざるべからず。若しそれ十九世紀若くは開闢以來の最大事件

たる、ダーウインの學説の如きは、全然これ實際的研究より得たるもの、而してこれの學説發表以後の學界に於ける、その影響に至りては、殆んど吾人の日常見聞し忘れんと欲して忘るゝ能はざる處なり。而もダーウインは最もよく英吉利思想を代表したるものといふを得べきか。吾が學風の多く獨逸式なるは、時代の風潮をして英吉利思想に遠ざからしめ、自から英文學の流行を阻害せしものなきにしもあらざるべし。

抑文藝の方面に於て、最も早く實際的寫實的態度をとりしは英吉利なり。蓋し歐州近代の小説に於て、尤も古き歴史を有するものは即ち英吉利なるを以て、小説に關する凡ての濫觸は、これを英吉利に求むべきなりとは雖も、フィールディングの小説は、則ち所謂寫實寫生の開山といふを得べし。佛蘭西に至りて、むしろ目覺しき活動を現したる自然主義は、遠くはトム、ジョーンズにありといふべし。なほ近くにその源を求むれば自然主義はディケンズ、サツカレーに出で、さらに此れを一個の主張たらしむるに、ダーウインの學説に倚りしものなり。余はダーウインの學説が直接自然主義の

主張となれりといふにあらず、たゞかの學説が冥々のうちに自然主義の態度を強固ならしめたりとなすのみ。

一見迂愚なる如き英吉利は突如としてニュートンを出し、ダーウインを出し、自然主義の門戸を開けり。現時の歐州は思想混亂懷疑のうちであり、この間にありてはなほ保守的態度をとり。古き教權をすてざる英吉利は、また突如何なる新現象を呈出すべきか。二年三年若くは十年、偉大なる小説を出さざるの故を以て、俄かに英國思想の衰兆を説くは早計なり。ゾイクトリア國母陛下在位の時に於けるウエールス太子と、今日のエドワード陛下とその相ひ去ること幾何ぞ。吾人は國君としての陛下の、その行動の偉大にして、而も突如何なる意外の感をなせり。光榮ある孤立をすて、脱兎の如く、世界の大同盟をつくらんとする、その大政策の、如何に質實にして同時に花々しきか。今日の英國思想英吉利文學は。それ或は太子時代の陛下なるなからんや。

倫理道德はまた英國思想と分離すべからざる題目なり。凡て英吉利の哲學が常に實際的傾向を有すとは、即ち哲學が此道德問題に亘るの謂なり。英人の一舉一動が凡て道義的なるは、吾人の屢々見聞する處なり。かれの社會組織は尤もよくこれを證明す。個人携帯の鐵道荷物に對し合ひ札を交附せざるが如き、圖書館裡閱覽者が自由に館内所藏の書籍を手づから取捨するが如き、その適例とすべきか。斯くの如きは結局一つの習慣に過ぎざるべきも、その習慣をして茲處に至らしめしもの、偏に道義の力に依るものといふべし。

只その倫理道德を重んずるの甚しきや 往々文藝も哲學もその配下に隸屬するの觀あり。余はかの宗教が道德の左右する處となるの可否を知らず、然も文藝が狭き意義の道義の囚ふる處となるは甚惜むべし。英國の小説に於て、その倫理以外に脱出せるもの極めて稀なり。素よりこれを廣義に用ふれば、人生は則ち道義なり。ソフォークレスの戯曲も、シエークスピアの戯曲も、この意義に於て倫理を説き道義を訓ふ。然

れども其説き且訓ふるや、意識してには非ず、余の惜むべしと言へるは、其意識しての道德なり。デイケンズもキングスレーも凡て倫理を説く、所謂社會に於ける缺陷を諷ふるは即ちこれなり。サツカレーに至りてはや、その趣を異にすると雖も、なほ且つ諷刺し嘲笑する處、倫理を脱せりといふべからず、エリオットに至りては、始めて倫理的を脱して心理的に入れりとなすものありと雖も、余を以て見れば、かれも亦純然たる倫理家なり。余は今一々これを詳説する能はず、然れども現存の諸家に就て見るもワード夫人は素より、その他凡て此の色彩を有す。蓋し倫理道德は英國思想の一大特徴なりとす。

## 十二

最後に吾人の注意すべき英吉利思想の特徴は、其家庭的なるにあり。英語にホームなる一語のあるは、英國の特色にして、英吉利人の他國に對し誇負する所なりとは、疾くに世の熟知せる處なり。實際此の一語の英語にありて、他國語に求むべからず、



且つ譯すべからざるは頗る注意に値すべきものなりとす。佛人の社交的なるに反して、英人は家庭的なり、蓋しホームは吾が日本語にも譯しがたし、そは正しく家庭の義なりと雖も、單に一家族の謂にあらずして、安定平和の意を有し、さらに雞犬牛馬の家畜と、前庭後園の花卉をも添えたるものなるべし。

吾人は爰に於て英國思想の家族主義を見る。只そは今日忠君愛國者流の所謂家族主義と大にその趣を異にするのみ。これを文學に見るに、ゴールトスミス、グレイカーに見るが如き趣味と思想とは則ちこれなり。ジエーン、オーステンのブライド、エンド、ブレジエデスの如きまた然り。エリオットのアダム、ビード亦一而此の種に屬すといふべし。余は未だかくの如き所謂家庭小説の大陸に多くあるを知らず。少くとも吾が文壇に紹介せられたる大陸文學に於ては未だ嘗て見ざる處なりとす。

所謂家庭的なると共に、犬馬牛羊と花卉とを樂しみ、若しくは市井の僑居に安んじ、極めて超然樂世的の趣を有するものまたこれ英人思想の特徴なり。余はラムの小品

リ、ハントの雜文、若しくはジエフリーズの作物を以て、これが例證となさんと欲す。恐らくは此種の文字また他國にその類を見るに難かるべし。

### 十三

余は以上の如く、英吉利思想の二三を略説したり。余は今この孰れが吾が日本の思想に適應するや、否やを言はざるべし。然れども此等の特徴はまた吾人の有する所と全く相容れざるものにあらざるは明らかなり。よしやそは吾れに皆無の思想なりとするも、吾人はなほ且つとりて此れを吾人が修養の料とするに適せんか。余は吾が社會の秩序の定まる日英吉利思想が吾人を卑益する事少なからざるを信ず。かくの如くにして日英同盟は頗る意義あるものたらんか。

### ●新思想としての自然主義

自然主義の問題は明治四十年の文壇に於ける一大論議なりき。蓋し今年に於ても

また今年以後と雖もなほ盛んに論せらるゝ事なるべし。併しながらこの主義の説く處を以て明治四十年、若くはその前後に於て始めて文壇に提出せられ、唱導せられたりとするものあらば、それは甚しき誤解なりとす。その名稱に於て大に異なる處あり、その所説に於て著く變化したる處ありと雖も、今日の所謂自然主義が唱導する處のものはすでに疾くに我が文壇に鼓吹せられたるものなりとす。

や、自己の吹聴に陥るの恐れありと雖も、硯筆者等同人が嘗て主張する處ありし思想や傾向は、また自然主義の主張する處のものと等しかりと言ふを得べきか。少くとも後者が主張の大半はすでに前者に含まれたりと言ふを得べし、硯筆者等が十數年前に一種の思想を懷抱してこれを江湖に發表せしに當りてや、或はこれを以て厭世的なりとし、或は沒道德なりとし、不健全の思想なりとして、甚しく世の非難する處となれりき。當時同人等には自己の位置に關して何等の自覺あらざりき。何等これを主義として標榜する處あらざりき。後に至りて世評はこの同人の結社を以てロオマンチ

ツクの傾向を帯びたるものなりと推斷せり。同人等は果してその思想がロオマンチツクなりしや、否や、今日に至りてさへ未だ自から斷定し能はざるなり。然れどもルンク等の思想に依り非常なる感化を受けたりしは事實なり。ウエルテルの一卷が最も有力なる教科書なりしも事實なり。自からが懷抱せし思想を言へば、凡ての道義は偽善なり、凡て宗教は虚偽なりと云ひ、善惡無差別論を以て天來の福音となし、金科玉條となしたりき。斯くの如きは則ち世の非難を買ひ排斥に遇ひし所以なりしが、今にして思へば甚だ淺薄なりし譏はあれど、むしろ健氣の態度なりしを自負し、且つ今の吾れの昔日の我れに非るを耻ぢざるを得ず。殊に斯くの如き思想はこれまた實に今日自然主義の主張者が聲を大にして疾呼する處なるを見れば、自からが株を奪はれたるの感なきにしもあらず。蓋しかくの如き主張はまた今日の所謂自然主義が唱導する意見の一なればなり。只余は記憶す、當時の同人等は目さるゝにロオマンチツクを以てせられし事を。

さらに過去の吾が文壇を顧みれば、七八年前に於て美的生活論の主張ありき。高山

林次郎氏や、登張竹風氏や、此れが先陣に立ちて、ニーチエを奉じ、本能主義を説き、鋭鋒一時文壇を風靡するの概ありしはなほ江湖の記憶に新なる處なり。本能主義の説く處また宗教を排し、舊思想、舊道徳を打破したる事、硯筆者同人等が曩日の運動に等しく、その主義とし主張する處を以て、これを文藝上の意見とするに止まらず、直ちに以て、實際の生活に適用せんとせり。これやがて美的生活論の名の由來せる所なるべし。則ち吾人の生活そのものを以て美となし詩となすの一事は、さらに今日の自然主義がその思索する處と生活とを一致せしめんとするに等し。今日の自然主義は全然美なる語を排斥するが如し。若し美なる文字を好まずと言ふか、文字の如何は敢て問ふ處にあらず。吾人の生活を以て詩となし、小説となし、はたこれを文藝となす所は、則ち等し。而してこのニーチエ主義の美的生活論若くは本能主義は、新ローマンチズムと呼ばれたり。その説く處言ふ處、また今日の自然主義と等しくして、なほロオマンチックの名は免れざる所なりき。

何が故に此兩個の運動は、今の自然主義に酷似する所あるに拘はらず、なほ且つロオマンチックの名を被らしめられしか。曰く、兩者共に情操を重んじたればなり、主觀を主としたればなり。硯筆者等の運動の如きは、全然センチメンタリズムと言はるべく、本能主義またその根本義を情操に置きたればなり。然れども余は今日自然主義を稱へながら、なほ且つ客觀の態度を執らずして、全然主觀的の立脚地にあるもの少なからざるを見て、些か異様の感なき能はざるなり。

美的生活の緘黙と共に、文壇は暫らく靜穩に歸せしが、過る一二年に於て新らたに自然主義論提供せられ、明治四十年の文壇はその論叢となり、なほ今後に亘り論評は繼續せらるゝ如き觀あり。余は今こゝに自然主義の何者なるかを詳論する能はず。併しながらその注意すべき一二の要點、殊に前兩個の運動と酷似せる諸點を列舉し、今日の自然主義なるものが、曩日のロオマンチズムと連絡する處あるのみならず。同一物の進歩し若くは變態したるものなる事を言はんと欲す。

第一に自然主義は盡く舊思想を打破し去らんとす。その説く處に従へば凡ての宗教凡ての道德若くは理想はこれを排し去るべしといふ。則ち虚無的思想なり。蓋し吾人の思考は幾百千年の舊習に依りて制縛せられたるものにして、その自然を失へるや久し。自然主義は則ちこの制縛より人心を自由にし、自然のまゝに思考し考慮するを得せしめんとするものなり。ルソーの革新的思想は則ちこれなり。而してかくの如きは過去十數年前に唱へられ、ついで今日に及びしものなり。

第二自然主義は人間の獸性を説く。凡そ人間を以て神靈と等しく思惟したりしは舊思想なり。人間が上帝の子にあらずして、猿猴の一族たる事明白なるに及びてや。その獸性は自然の結果として、その性質の上に計上せられざるべからず。則ち人間の獸性を重要視するは、人間を以て自然界に於ける一生物と見たる自然の結果ならざるべからず。余はまたこの一事の本能主義と酷似する處あるを想はざるを得ず。蓋し本能主義は主觀的に考察したる結果なるべけれども、獸性の尊重は主として客觀的考察より來れるものなるべし。

第三に自然主義は事實を尊重す。その創作に於けるや必らず自己の經驗以外に出づる能はずとなす。その意は則ち眞實を重んずるにあるべし。併しながらこゝに眞實といふは客觀の事相を重んずると解すべきか、主觀の判断を重んずるとすべきか、はた兩者を等しく尊重するの謂か。眞實といふ一語は極めて重大にして且つ複雑なる難問なり。余を以てすれば兩者の合一を以て眞實とすべく、これを以て自然主義の主要なる態度となすべきものと信ず。何となればかくの如くにして始めて世相の萬狀を寫し得べければなり。

余は今深く此問題に入る能はず、はた主觀客觀の關係を明らかに説明し能はざるを憾となす。只今日の自然主義のあるものが言ふ如く吾人は全く自己の耳目に觸れたるもの、外眞實と認むべからず、これを作物に用ふべからずとなすは、自己を制限するの甚しきものにして、却つて眞の自己を滅却し自己の能力を滅殺するものに外ならず

と信ず。若しそれ推理力想像力を具備したる自己の廣き經驗を尊重すると言はんか、事もとより然るべきにして何等の異議を容るべきにあらず。併しながら兎まれ自己の經驗と創作とを同一視するは、やがて美的生活論の主張と揆を一にせる處なり。たゞこれは情操よりし、かれは客觀的に理智よりするの差あるのみ。左はれ自然主義の唱導者にして、固く自己の狭き經驗にのみ退隱し、若くは主觀主義を主張するもの少なからざるが如し。かくの如きは則ち自然主義者にあらずして、むしろ昔日の情操主義者若くはロオマンチストに近似したる者といふべし。今日自然主義者に自然主義にかなひたる態度を執れるもの少く、却つてその反對者に自然主義の實行者多しとの評をきくも、また自然主義の主張が、かく情操主義に傾きて、昔日の情操主義者が自からは自覺せずして自然主義の主張を實行せる、その間の消息を傳ふるものにあらざるか。

自然主義の要點かくの如くにして、その曩日の思潮の類似せる處また上記の如しと雖も、その相違する要點は、則ち此の新運動に於て客觀の事相を重んずるに至れる一事にありといふを得べし。此れやがてこの新運動がロオマンチックの名を脱して、自然主義なる名を得たる所以なりとす。余はまた上段主觀客觀の合一を言ひ、これを以て自然主義の要點なりとなせり。今余一個に於ける思想の變遷をたどるも、過ぎし主觀的情操主義は、やうやく客觀的世相を重んずる態度となり、こゝに主觀と客觀との調和を得んとするに至れり。思ふに自然主義の所謂ゾラ一流の純客觀主義と異りて、新面目を開きたるは、斯くの如き處にありといふべし。かく考へ來りて余は重ねて言ふ、今の自然主義を唱ふるもの、内に、主觀に過大の重きを置きて、その結果昔日のロオマンチックに反らんとするものあるは甚だ遺憾の事にして、これ實に自からその主義を殺しつゝあるものなる事を。

吾が思想界に於ける情操主義、本能主義、自然主義の特色かくの如くにして、畢竟みなその由來を等うす。果して然らば、その由來とは何んぞや。曰く明治の新人が新時代の生活に新意義を加へんと欲したる努力煩悶の跡のみ。

余はなほ如上各種の主義を以て同一物の變形なりとする證左の一として、西歐に於ける此等各種の主義の發展を一瞥せんと欲す。由來舊思想を打破し、舊理想を破壊せんと試みしは、十八世紀のルソーに始まる。ルソーの思想は主として古來宗教道徳に囚はれたる不自然の人心をその自然のまゝに發展せしめんとせしものなり。即ち文明史上に於ける一大警聲なりき。これより一轉してロオマンチズムの勃興を見たりしが、これまた必らずしも人心の自然を防遏したるものにあらずして、その自然の憧憬を縱まゝにせしめしに過ぎず。こゝに於てかロオマンチズムに反動して科學的思想の興起ありき。科學的思想の興起は端なく人間の本性を闡明し、轉じてその獸性に意義を附與するに至れり。これ即ちルソーの主觀的人心の自然を説きたるに反して、客觀的に人間の自然を明白に示したるものなり。然るに科學高能主義に反抗してニーチエ一流の破壊主義出でたり。これ即ち新ロオマンチズムと呼ばれたるもの、而してこのロオマンチズムは、一轉して吾人が今日見るが如き新らしき自然主義となれり。此

の自然主義のうちには主觀的の自然主義あり客觀的の自然主義あり。新ロオマンチズムあり、情操主義あり、そは新時代の要求に應じて凡てを綜合して顯はれたるものなり。説者あり、科學的思想もまたルソーの思想に胚胎したるもの、人心の自然に關し主觀客觀の別あるべからず、ゾラ一流の人間觀則ち客觀的の自然主義またその源をルソーに發すと云ふ。凡そ人世の事凡て連關す。これを綜合的に考ふれば何物かその揆を一にせざらん、この意義に於て、凡ての新思想をルソーに歸するはまた理なきにあらず。若しかくの如く觀するを待んか、余が上記各種の主義の統一を説明するに於ては極めて便宜多し。即ち諸の思想各種の主義は、互に反動し、反撥して起れるものにあらずして、時と共に變じ且つ進み、自から甲より乙を生じたりと見るを得べきなり。かくの如くなればロオマンチズムも亦新思想の運動として、またルソーの刺激に依りたるものと見るを得べく、素より新ロオマンチズムの如きは新自然主義を生みたりとなすを得べく。かくの如くにして十九世紀より二十世紀に亘れる各種の思潮は、凡て十

八世紀より來れりと爲すを得べく、同時に吾が今日の自然主義が、また昔日の情操主義、ロオマンチズムより流出したりと見るを得べし。此れ或は至當の見解ならんか、而して更らに考ふれば、中世紀の壓迫を被りて流露せし人心の活動は文藝復興となり、宗教改革となり、さらに宗教打破となり進みく／＼て底止する處を知らず。今日の勢を爲したるものとも見らるべし。然しながら時代を限りてこれを見るに十九世紀より二十世紀に亘れる此れ等各種の思潮と主義とはこれを概括して宇宙に對する人心の驚嘆とも見るべし。この驚きの印象は則ちこれ等の主義となりて顯はれたり則ち。ワツダントンの所謂レナツセンス、オブ、ワンダアこれのみ。

### ◎青年大會及び救世軍大會所感

余等の始て小學校に入りしや、時の教科書は米國に於て用ひられしウイルソン讀本の翻譯なりき。後ち英語の學習を始めしや、其教授せられしものは同じくウイルソン讀

本の直譯なりし。爾來年を経る事二十餘、今や外國文物の輸入は益々滋からんとすれども、最早直譯の時代は過ぎて、凡ての事物は全く吾れに翻譯されつゝあるなり。そは獨り文教の上に於て然るのみならず、吾が社會の事物大抵翻譯にして、現代は則ち命じて翻譯の時代といふを得べし。凡そ形而下の事物の輸入は直譯も亦可なり。或はそれ直譯ならざるを得ざるべし、然れども思想界の事に至りては、素よりその獨創ならん事尤も願はしき事なりと雖も、已むなくんば翻譯ならざるべからず。翻譯は一面に於て外國の事物なると共に一面に於ては必らず獨創の跡の刻せらるゝを免るゝ能はざればなり。

基督教はすでに日に翻譯されんとせり。只翻譯と共に其本來保持し來りし教義が果して繼續されつゝありやは頗る疑問なり。一面に於てはすでに全然本來の宗教と異りたるものとなり了せる所なきか。碩學の聞え高きホール博士は近者公堂に演説して基督教の内觀的側面はこれを東洋思想に待たざるべからずと説破せりとか。而して吾

が基督教は博士の此の所説を以て卓見高論として迎へたるもの、如し。余は所謂基督教の主張を有するものにあらずしはた碩學博士の言説を評論するの資格あるものにあらず。然れども余の感ずる所を率直に言はしむれば、余は博士の此の意見を以て自己が保持する基督教の大本義を滅却し、甚しく基督教を侮蔑せるものなりと信ず。余は一人の教徒の立つて此れを論駁するものなきを怪む。一神教的基督教と東洋の凡神的傾向とは、其教義に於て到底一致するものにあらざるなり。余の聞く處にして誤りなしとせば博士は其新説のため、々々教界の正統派より指彈せらるゝ事ありとか、これ素より然かあるべき事なるべし。余にして博士の説なるものを正當に了したりとせば、余は博士を以て基督教正統派の人と爲さざるは勿論、一神論者としてだに見る能はざるなり。然りと雖も日本に於て博士が斯くの如き意見を公言し、而も一人の異論者を見ざりし所以のものは何ぞや、曰く基督教が日本に翻譯されたるを以てなり。基督教の日本に翻譯されたるは、則ち一面に於て宗教の上に獨創の立脚地を得たるの證左とな

すを得べし。基督教徒の屢々用ふる日本的基督教なる語は頗る怪しき意味を有すと雖も、兩部合一の如き新現象となるべき前提たるやも知るべからざるなり。

時代の翻譯的趨勢と共に、基督教界も斯くの如く翻譯の時代に入れる際にして、尙ほ獨り直譯を以て頑然として孤立するものあり。余は其忠實と至誠と其勇氣とに敬服す。孤立するものとは救世軍なり。救世軍は青年大會に何等の關係を爲さざりしが如し。其行動は常に他の教派のそれと別途に出で、而も其元氣常に他を凌ぐものあり。それ救世軍は多く教義と教理とを説かず。むしろ實際の事業に専心するが如し。此の一事は恐らく世の同情を惹く所にして、余と雖も亦其の事業に對して敬意を拂ふを惜まざるなり。然れども其方法手段に至つては頗る同意し難きもの多し。余はかれの方法手段を指して、これを西洋の直譯と呼ぶ。而して余は今の時に當りて西洋の直譯が吾が社會を害する所多くして益する所極めて少きを信するものなり。救世軍の本原たる英京倫敦若くは米國の大都府に至りては、或はそれかれが如き手段の必要もあり、



はた功を奏する場合もあるべし。街路の雑沓は博覽會開場の日に於ける上野公園のそれにも増して甚しく、常時の人心まだ靜穩なる能はず、常に猛火に追はれるが如き状態にあるものに對しては、異様の服装をなし軍隊的に旗鼓喧噪して道を説くの要もあるべく、また自から然らざるを得ざるべし。然れども吾が日本の如きは東京市が如何に雜鬧すると雖も、要するに靜肅なり平穩なり、英米に於ける田舎なり。此の田舎に住むもの、自から靜思するの餘裕あり熟慮するの餘地を有す。前記ホール博士の内觀なるものは斯くの如き所に於て能く荒む事を得べきなり。由來吾が國民は靜肅なり穩健なり、而して斯くの如きは吾が美德なり。然るに救世軍の手段に至りて全然吾が此の風習に反して、この美風を壊滅せんとするものならずや。かくの如き運動に對して、吾が靜肅なる人心は果してこれに耳を傾くべきか。若しこれに耳を傾くる事ありとせば、余はこれを以て吾が長所美風を毀損するものとして、極力これを排斥せざるを得ず。太鼓喇叭は縁日若くは出火場裡に於てこそ調和すべけれ、吾が靜穩なる市府

に於ては不體裁沒趣味の甚しきものにして、これに依りて吾が人心の荒蕪せらるゝもの幾何なるや知るべからず。由來宗教道德の考察に於て歐米の人が吾れに勝りて高遠深大なりとするは甚しき誤想にして、吾れこそ此れ等の點に於てかれに對して教ふべき地位にあるものなり。殊にかの最大多数の人士が有する思想は極めて單純なるものにして、高尚にはた趣味あるものにあらず。かれを以て宗教の本源の如く考ふるは今や昔日の誤解なりとす。余は只滿心濫りに自から尊大を示して喜ばんとするものにあらず。心あるものは彼れ歐米に於てもかくの如く思考するや必せり。

さらに願るに、抑も吾が人心は西教直譯者の口にするが如く、しかく墜落せるものなるか、果して吾が社會はかれ歐米の社會に増して腐敗せるものなりや。余は斷じて吾れの彼れに勝れる物あるを言はんとす、吾が國民はしかく急速に救濟せずむば滅びんとするが如き状態にあるものに非ず。素より余と雖も西歐の長所はこれを認むるに吝ならず、西歐崇拜に於て敢て人後に落ちず。然れども是は宗教若くは道德に於けるに非

ずして、かれをして特色あらしむるものは全く他の方面に於て存在す。こは他日別に論ずる處あるべしと雖も、少くもその今日の先覺者なるものが謂て以て道德となし宗教となす所のものにあらざる事を斷言せんと欲す。従つて余は西教直譯者の吾が徳風を難ずるの甚だ其當を得ざるを信ず。況や太鼓喇叭の救世軍に至りては、吾が國民の品性を壞る事あるも、これをして昂上せしむるの道に非ざる事を斷言して憚からざるなり。若しそれかの慈善事業の如きに至りては、必らずしも救世軍の態度に依らざるも遂げ得べき事にして、むしろ靜肅穩密に行はるべきものにあらざるか。なほ聞くが如くんば移民政策の上に救世軍の力めし處多大なるものありといふ。斯の如きは其事業として頗る多謝すべく、其生命また此邊に存すべしと雖も、そは一個の社會的事業に屬し救世軍特有の本質とすべきにあらざるなり。

さらに翻つて見れば余は吾が爲政者若くは上流縉紳の無定見に驚く。平素は宗教の何たるをも考へず、はた顧みだもせざるものが、青年大會の開かるゝに際してや、遂

々然として巧言玲色、歡待これ足らざるを恐るゝが如くなりき。而して今や救世軍のブース氏來ると聞きては、また東京横濱の市極力歡迎に奔走す。余は青年の煩悶なるものを恐れ、社會主義を恐るゝ蛇蝎の如くなる政府と縉紳とが、何が故に斯くの如き國民の性情を改めんとする運動を拒絶排斥せざるやを怪む。

青年の煩悶は政府の心痛を起せし一事實なりき。而して基督教は少くともかの煩悶を呼び起せし原因の一なりとす。社會主義は吾が警察の厭ひて殆んど國賊視する所、而して救世軍の主張と行動とは、これを論究すれば蓋し社會主義の傾向あるを免れず。然るに今や爲政者と縉紳とは相率ひてこれを歡迎す。その闇愚無定見むしろ笑ふべからずや。吾が基督教青年會と救世軍とは先づこれ等歡迎者の救済を第一の急務とするの要あるべし。

道塗説を爲すものあり、青年大會の開會も救世軍大會もみな政府の企劃に出でしものにして、外交上基督教列國の歡心を買はんがための一策に過ぎずと。日露の戰爭に

際して基督教界の宿老某々氏の外遊ありしも亦政府の劃策に出で、今の大會も當時より豫期せられしものなりとか。蓋しこれ真に途上の憶説ならん、基督教界内外の士のかくの如き兒戯に類する企圖に乗せらるゝものならんや。然れども現時政府上下の行動より見んか、則ちその相率ひてむしろ敵視すべきものを歓迎して至らざるなきを見れば、人をして或は斯くの如き企圖ありしかの疑念を此の間に挿ましむるも、何の言辭がこれを辯じ得ん。果して斯くの如き事あらんか余は爲政者に告げんと欲す。曰く救世軍の如きを歓迎するは、基督教の歡心を得るの道にあらず、何となればかの團體は現時に於てこそや、重きを爲すに至りしとは言へ、なほ其本國に於ては識者の間に侮蔑を免れざるものにして、これを歓迎するのはたまく、吾の無識を暴露するに過ぎざればなり。

同時に余は救世軍のかく歓迎を受けたるを見て、頗るその發達のためにこれを惜む。何となれば救世軍は迫害追窮の間に立ちてこそ其本領を發揮し、軍隊として世と奮闘し得るなれ。しかく歡待に接しては恐らくは其力を用ふるに處なく、はた他日若し其真相を發露するの日に至らば今日の歡迎者は全く路傍の人となり了して、失望は迎ふるもの迎へらるゝもの兩者の上に起らん。吾が救世軍の士此れしきの事相を了せざるの理なし、蓋し自然の勢如何ともなすべからざるものあるか。滑稽なる世や、好個の喜劇かな、經世家のなき久矣。

### ● 必要なる性慾文學

我が文壇に肉情文學の是非の切りに論せられる今日、不思議な事には英吉利にも同じ議論が行なはれて居るらしい。雜誌ブックマンは書を寄せて肉情文學に對する諸大家の意見なるものを尋ねて居る。其答書を見るとさすがに英吉利の事であるから異口同音に之を排斥し攻撃して居る。余は今の英吉利に於ける第一流の文士で如何なる人が此種の文學の代表となつて居るかしらぬ。故人で云へばオズカー、ワイルドの如きは

それであるかも知れぬとは聞いて居るが、今日の處で何人がそれであるかは余の知らぬ處である。實は余の淺學寡聞かは知らぬが、現英第一流の作者には左様なものはないかと思ふ。若しそれ第二流第三流以下の作物に其傾向が著しいとすれば、それは何處にも往々ある事で、際立て、肉情文學など、云ふべき價值のない物であらうと思ふ。

所謂俗惡の文學に性慾肉情の文字のあるのは、之れは全く道德上から見て論すべきであつて、文藝の上からは一顧の價のない事であるから異口同音に之を排斥し攻撃するのは至極その當を得た物であらう。然るに第一流の文學若しくは性慾的の主張を以て書かれて居る作物に於ける肉情的文學に付ては大に考へなければならぬ處がある。それでは現在の我が肉情文學は果して如何なる物であるか、發賣禁止になつた生田氏の作品などは、果して禁止すべき物であるか。又禁止すべきものとした處で、それが文學上の價のないものであらうか、その邊は深く考へなければなるまいと思ふ。余は

今此處に禁止の可否又は肉情文學の如何を論んせんと欲するものではない。かゝる文學の代表者とも云はれるモーパッサンの作の一篇に付いて感じた事を一寸述べて見やうと思ふのである。

凡そ肉慾の事を書いたものの中で、余は又モーパッサンのもの程烈しいのを見た事はない。又その烈しいモーパッサンの作の中で「女の一生」程思切つてそれを寫したものはないと思ふ。單に抽象的に肉情を寫したものは怪しからぬ、それは不都合である、不道德であると思ふ考へからいへば、「女の一生」は即ち不都合極るものである。然るに之を道德宗教の本尊であるトルストイが口を極はめて賞めて居る。之にはなにか仔細がなくてはならぬと考へられる。トルストイ翁は著者の同情が全く善良なる女主人公の身に向けられてあるからこの作が良いのであるといつて居る。それは如何にもそうであらう。併しながらその内に寫されてある春畫も及びかねる一條の光景は之を何と辯解するのであらうか、ト翁の言は此大事な處に多く説き及んでないやうであ

る。

「女の一生」を讀だ人は承知して居るであらう、此書の主人公なる婦人が結婚したその夜の有様及び結婚後の旅行中に於けるある一場の光景の如きは道德主義からいへば實に醜文字と云はなければならぬ。立派な春畫と言いたいが或は春畫よりも甚だしいかも知れぬ。併しなから此一場の醜文字は必要があつて其處にあるのである。此著者のある作に至つては婦人の醜態を書くに態々筆を弄したかと思はれる程の處もあるが、余の考によれば此書に寫つされたるその醜文字は實にその必要があつて出されたるものである。全體女主人公の人物が全然精神的であるに對して、その配者たる男の性格が凡ての點に於て物質的肉體的である。此對照が全篇によく現はされ、此對照が結局女主人公の一生を覆す因縁となり悲劇の原となるのである。即ちこれから男はだん／＼に女主人公の家政の全權を掌握し、財産を横奪する迄に至る。併し此物質的傾向を最も明らかに現はす處は其夫婦間の關係にある。即ち女主人公の愛情が全然精神的である。

るに反して男の愛情は肉慾的である。女主人公が人世に棹し出でた其第一日即ち結婚の夜に於て此對照が現はれたのである。女と男との考へ若しくは性格が著るしく相違して居る事を云ふには是非共此結婚の夜の一場がなければならぬ。その日迄精神的に愛情を考へて居た女は男の態度の全く肉慾的なのに驚いて呆れてしまった。之が女の一生の悲劇の始めである。此醜文字がなければ決して男の心と女の心との相違が示されない。随がつて之が全篇の大局に關係する大事な事になるのである。若し之を單に抽象的に書いてその醜態を明らかに書かなかつたとすれば、話は理に落ちてしまつて小説にはならぬ。即ち此醜文字は一篇の大事な銷輪になるので、著者は決して單に醜文字を弄して居るのとは云へぬのである。醜文字が人生の一側面を現はすに緊要なものであるとすれば之は是非なくてはならぬものである。モーパッサンの思ふ通りに女の一生を現はすには是非此一條はなくてはならぬ處である。此意味に於て萬一それが道德に差聞かへを起しても致方がないであらう、之は忍ばなければならぬ處である。實際此小

説はかの一條があつてもそれ程醜惡の感を讀者に起させぬ。これは泥中から出た蓮の花の例のやうに、此の醜惡の光景が何かのために美化するからであらう。單に一篇の大體に於て醜惡の感は起らぬのみか、かの條下をのみ取り離して考へてもそれほど悪い感は起らぬのである。此は大に注意すべき處ではあるまいか。余は前に此醜惡の一條を以て必要な個處となし、必要故に惡感が起らぬと言つた。それは素よりさうであるが、さらに精しく言へば、必要といふ事が實は醜惡そのものを寫すといふのでなく、著者がさらに大事なものを寫さう顯はさうといふ事を示して居るのである。かう考へて見ると、醜惡も醜惡として夫を出すのでなく、他に何物かを顯はす場合には立派な文字になるのと言ひ得るであらう。かく言ふと、極端なる一方の説者からは軟弱な議論、道徳論として嘲られ、また他の固牢な道徳論者からは、怪しからぬ意見として攻撃されるかも知れぬ。併しながら單に醜惡そのものを書いたのであれば、それは挑發的である處が春晝と異なるのみで、結局大した違ひはないのである。余の考へる處

に依れば、如何しても醜惡を書くには何かこれを書く所以がなくてはならぬと思ふ。その理由を説明するものは則ち實にこのモオパッサンの「女の一生」が極めて適例であると思ふ。さらに言へば醜ばかりではない、何を書くにした處で、その表面の事實よりさらに深いか高いか、兎に角何者か大きなものを見せるといふ考がなくはならぬものであらう。余はかゝる考を以て現代の肉情文學を見たいと思ふ。また世間がこれを以てその可否の標準とする事を願ふのである。

### ●寧ろ不良教員を撰まん哉

故黒川真頼先生の大學に教授せられしや、洒脱にして寛容、深く學生の悦服する處なりき。先生の課せらるゝ試験には必らず一定の問題ありき、學生にして追試業を求むるものあれば、先生必らず課するに本試験と同一の問題を以てす、その故を先生に問へば先生答へて曰く、問題同一ならざれば不公平なるを免れずと。先生は同一問題

の再び課せらるゝや、追試業に應ずる學生の、すでにその答案に熟通せるを知り給はざるが如し。先生果してこれを知りてなほ斯くの如く途に出で給ひしか否か、吾れ等知る能はずと雖も、その孰れにあるに拘はらず、此の一事以て先生に大人の風ありしを想ふべし。先生の試験の奇抜なるはたゞにこれに止まらず、なほ毎年その試問の課題を同ふせり。故に學生は預め先生の試問の如何を知るを得たりしなり。黒川先生と共に試験の寛大なりしはケーベル先生なりき。先生は二三の試問を黒板に記して此れが答案を求められ、附加して曰く、此は一二の例を示したるのみ、卿等宜しく卿等が好む問題に就て書すべしと。事態かくの如くなれば、多數の學生のうちには、自宅に於て或る問題の答案を筆記し來り、教室に於ては只これを摸寫して僅かに時を費し、これを呈して試験を通過せしものありき。かくの如き試験の方法は果してその當を得たるものなるか。黒川先生の如きケーベル先生の如きは、果して良教員と稱すべきか。文部の大官教育の當局者には自からその意見あるべし。余は暫らく此れに答ふる事を

爲さるべし。

大學の教授は黒川先生ケーベル先生の寛容を以てするも可なり、若しそれ中學程度の教育に至りては斯くの如き寛容を以て斷じて不可なりとなすものあり。今余をしてその可否を言ふに先き立ちて實驗せる一例を擧げしめよ。余が某中學程度の學校に在りしや、教師は殆んど凡て外國人なりき生徒等は屢猾策を行へり、教師の試問に對し密かに教科書を翻てこれに應じたる事ありき。教師はこれを知りてかはた知らずしてか敢てこれを指摘せんとはせざりき。赤心を他の腹中に推すといふべきか、生徒のかくの如き非行は初めより教師の念頭にあらざりしが如し。試験の答案の如きに至りては教師はこれを一束として、講壇上の卓中に收めてまた顧みず。相當の點を附してその成績を發表せり。中學程度の學校に於てかくの如き教員は、果して良好なる先生といふを得べきか。文部の大官、教育の當局者には自からその意見あるべし、余は亦暫らくその可否を言はざるべし。然れども余に斷言し得べき事あり。黒川先生もケーベル

先生も余が中學程度の外國教師も、當時少なからず學生の尊敬を受け、今日なほ受けつゝある一事なり。さらに言はんか、黒川先生の薰陶を受けたる學生は、國文に暗しとの難を未だ聞きし事なく、黒川先生に教を受けたるがために、人格を傷けたるを聞かず。ケール先生を慕へる學生が學識淺薄、品行不良なりしを聞かず。却つて兩先生の門下に識徳共に高き學者を出したるの事實はあるべし。若しそれ余が中學程度の先生に至りては、多大の影響を余等の上に與へたり。此れ等の諸先生は實に余が景慕して永く忘るゝ能はざる處なりとす。

頃者中學校長會議に於ける文部大臣の演説は堂々たり、徳育を奨勵し、良教員を得るを以て第一義とすべしと爲す、また一點の非議すべき處なし。新聞記者諸君則ち此の演説に敬服して賛辭を呈せり。余も亦これに敬服したる一人なり。若し雨の降る日は雨天なりといふ自明の理に對して敬服し得べくんば、余もその餘りに明確なるに敬服せり。それ文部大臣の演説の如きは古往今來幾千年を貫きて渝る事なき眞理也と

す。たれか此の眞理に向つて反對を表すべき。只惜むべきは、その主旨を實現すべき方法に關して、大臣は何等の方法何等の抱負をも述べざりしに在り。然れども今日の道徳今日の教育は只これを標榜すべきもの、是れを口にすべきものにして、實行すべきにあらずとせば大臣の演説はまことに見事なりしと云ふを得べし。然り何等その主旨を實現する方法に説き及ばざる點に於て殊に見事なりといふを得べし。然れども今日世人と共に教育者の困難を感じる處は、實際の問題なり。眞理は萬古不易なり。實際の方法手段は常に變化す。如何にして徳育を完からしめんか、如何にして良教員を得んか。世人と共に余等の知らんと欲する處は、此の問題に對する當局者の意見なりとす。さらに余は此れと共に教育當局者の黒川先生ケール先生以下に對する意見を知らんと希ふものなり。素より大綱を提ぐべき大臣に對し、かゝる細末の方法を問はんとするは頗るその當を得たるものにあらざるが如しと雖も、その大綱と文部に於て實際に考慮せらるゝ方法と自から相反せるが如き觀を呈する事屢々なれば、余は敢てこ



に此の疑問を提出せんと欲するものなり。

余をして直言せしむれば、文部の當局は常に口に正大公明の事を云ひ、事實に於てこれを打破するものなり。これ或は余の誤解なるやも知るべからずと雖も、文部當局は勉めて人材を教育界より排除し、優柔卑屈の風をこゝに紹介するに力を致せるにあらざるかを疑はしむ。則ち教育家一度ミアヘッドの倫理を講ずれば、文部は直ちに干渉して講師を私學校より追へるにあらずや。教官一度たび演壇に立ちて公衆に向ひ人道の眞義を説けば、忽ちこれが教職を免せしにあらずや。かくの如き態度方針を以てして、如何ぞ有爲の人材を教育界に繋ぐを得んや。此れこそ口に良教師をすゝめて事實にこれを排斥するものにあらずや。現に余の知れる人にして、その長所と主張とのために高等の學校を去りたるものあり。かくの如くにして文部自から巧言美辭を口にして偽善を行ふ教育界の滔々として偽善に趨くもまた故なきにあらず。蓋し文部當局は如上の諸教師を以て良教師と認めざるなからんか、果して然らば余は重ねて問

はんと欲す、黒川先生とケーベル先生とは良教師にあらざるかを。

凡そ世に中學校長中學校教員に勝りて氣の毒なるものなし。極めて些少の俸祿を享けて左に地方の有志并びに縣會に制御せられ、右に上長地方官の干渉を受け、さらに中央文部の監視する處となり、その間に介立して子弟の教育に任ずるもの則ち中學校長中學校教員なり。有爲の人のこゝに身を委するもの果してこれあるべきか、よし有りとするも永く此社會にその腰を握ゆるものあるべきか。他に身を處するの道を知らず、やむを得ず地方の中學に一時の糊口を得んとするもの、則ち中等教員なりとの誣言の出づるも亦故なきにあるざるべし。然りと雖も上記の中學校長及び中學校教員の遭遇すべき難境はむしろ形而下に屬すべきものなり。而も教育に従事せんと欲するものなほ別に形而上の天地を有すべし。この超脱の境地ありて中學校長も中學校教員も、喜んでその職に遊ぶ事を得べし。教育家諸氏は此の天地にありて優遊すべきなり。然れども形而上の天地を有するものは、則ち自由の天地を有するものなり。自由の天地に遊

ぶものは自由の心を有す。中學校長中學教員の堅忍なるは、薄給に甘んずべし。形而以下に於ける苦境に堪ゆべし。幾多の不快を忍ぶべし。而もかくの如く堪え忍び、その薄給に甘んずるは、この凡てを贖ふに足るべき天地の胸中に存在するあればなるべし。若しこの自由の天地にして奪はれんか、中學校長中學教員の有する處は空なり無なり。然るに文部の方針は口に良教師を説くと共に、一面に於ては校長教員の此の自由を奪はん事に汲々たるが如し。則ちミアヘッドの厄あり、人道演説者の災あり、これ等の諸教師の有爲なるや、よし免職の災なくとも、よし貶斥の厄なしとするも、かくの如き凡てを奪ひ去る社會には、永く在職せざりしならん。また在職し得ざるべきなり。則ち文部は實際に於て平凡庸劣の中學校長中學教員を得んと欲し、これに焦心せるものと見做さるゝも何の辭を以てかこれを解くを得ん。

文部大臣の説く良教師なるものは如何なる人物なるか、普通にこれを解すれば學識深く徳望ありて人の師表たるに足る人物なるに相違せず。然れども斯くの如き人物は

國務大臣に於てすら得られざるに、焉ぞ況んや月俸七十金八十金の中學教員に求め得らるべき。更に良教師なるものを以て完全無缺の人なりと解せんか、これはた望むべくして得るに難し、然れども余をして謂はしむれば、今の世に完全の人物と稱するものは平凡の庸才たり。良教師なる語、語は甚だ美なれども、その結局する處は凡庸を意味す。何となれば今日の世にありて、善良ならんとすれば無爲ならざるべからず、無爲なれば則ち庸才なればなり。現今の時世に於て、求むるに缺點なき人物を以てするは畢竟愚劣の業なり、蓋しその愚劣なるや今の時代に限れるにあらずと雖も、殊に今日の如き秩序なき時代にありて然りといふべし。現代に於ては大なる缺點あるもの、大なる疵あるもの則ち人材なり。秩序ある社會に於てこそ完全無疵にして有爲なる教育者も、それ或は求むるを得ん。現代に於ては望むべくして得らるべきものにあらず。帝國大學を追はれたるものが、却つて現代樞要の位置に立てりといふも、好個の適例にあらずや。余は一個二錢三錢の完全なる瀬戸の焼物よりも、破損しあらざる限り、多

少の疵ある唐津伊萬里を取らんと欲するものなり。大臣の良教師なるものは疵なき青磁の意なるか、そは現代に求むべからず、よし求め得たりとするも中學教員たらしむるは不可能の事なり。若しはた良教師なるものか一個二錢三錢の瀬戸焼ならんか、余はこれを以て庸才となし、むしろ疵ある青磁を撰ばんと欲するなり、而も余は從來の文部が此の疵なき二錢三錢の駄物を撰んで教育者ならしめしにあらざりしかを疑ふ。大臣の所謂良教師なるもの余が言ふ疵ある青磁にあらば幸なり。即ち余は敢て言ふ良中學校長良中學校教員を求めんよりは、むしろ不良中學校長不良中學校教員を撰むに加かすと。余は黒川先ヶーベル先生を慕ふものかくの如き先生を師として敬し且つ慕はんと欲するなり。

今の學校生徒は囚徒の如く先生は典獄の如し互に相反目して屢々椿事を惹起す、これ或は先生のあまりに良教員なるが故にあらざるか。

### ○誤用せられたる高遠の眞理

相對する二個の直線にしてこれを如何に延長するも、遂に相會する事なきものを稱して並行線といふ。此の並行線の理より演釋して、三角形の内角の和は二直角に等しき事を證明し得べし。かくの如きは幾何學最初の定理にして殆んど自明の理なり。かくの如き最初の定理にして不確實ならんか、吾人は一本の柱をも建立する事能はず、一條の椽も安置する能はざるべし。蓋し幾何學の定理は凡て演釋の法に依りて得らるべしと雖も、その根本たるべき當初の公理は自からかくの如き事實より歸納せられたるものに外ならざるべし。吾人は實に並行線の相會すべきを想ふ能はず、三角形の内角の和の二直角に等しからざるを考ふる能はず。然るに意外にもこゝに斯くの如き明白なる定理を否定するものあり。高等數學なるものは即ちこれなり。其言ふ處に従へば並行線は終に相會すべしと。但しその相會するや永遠に於てなりといふ。並行線にして既に然り、三角形の内角の和の二直角なるも必ずしも自明の理にあらざるなり。

高等數學の言ふ處眞の斯くの如しとすれば吾人や、惑なき能はず。若し並行線を相會するものとして計上せんか、恐らく一軒の家も建築する能はず、一條の軌道も布設する能はざるに至らん。それ高等數學は數理の原則を論ずるものなり。その教ふる處は算數學代數學幾何學の基礎たるべき原理なり。此の原理に依りて數に關する凡ての眞理は演釋せらるゝものなり。而るに今その原理を示すべきこの高等數學にしてかくの如き一見常識と相反するが如き眞理を教ふ。抑も何の故ぞや。高等數學の教ふる處非なるか。何ぞ必らずしも然らん、吾人は此の間に於て多大の眞理を認めずんばあらざるなり。

高等數學の並行線を以て相會すとなすには一大條件あり。曰く永遠に於てといふ事これなり。余はこの永遠に於てといふ事の、如何なる意味に於て用ゐられ將た數理の上に如何なる結果を生ずるやを知らず。然れども永遠の一語は非常なる條件なり。吾人若し永遠の一條線を獲取し得んか、また何事か爲し得ざらん。「若し」と「然しなが

ら」の兩食料を供されたる馬は何千萬里をも走ると等しく、永遠の條件だにあらば、吾人は凡ての契約を履行するの要なきなり、凡ての責任を負ふの要なきなり。何となれば永遠には時日の制限なくして、永遠は終に來る事なければなり。余は實に高等數學に於て此の永遠が如何なる働きを爲すやを知らずと雖も、此れと等しき事情は哲學の考察の上にも亦認めらるゝを知る。哲學に於て絶對と稱するものは、則ちこの永遠にして、その眞理の尋常普通の道理に於ける働きは、高等數學の教ふる處の普通數學に於けると等しきものあるなり。則ち絶對の眞理なる語は吾人の屢聞く處にして、その眞理は相對の眞理の基礎となるものなり。人間の行爲を研究の對象せる倫理學も、世間を對象とせる社會學も、凡ての學問はその原理を此の純理の哲學に求む。諸般の學藝に對する哲學の地位は、則ち普通數學に對する高等數學にして、その教ふる處は往々並行線の永遠に於ける會合となり、三角形の内角の和の二直角にあらざる事となる。現代の哲學界は往々科學の侵略する處となりて、かくの如き絶對的の眞理を説く事稀

れなりと雖も、なほ事實に於てはその威力依然として、學藝の全局を壓す。人間の心意は自から斯くの如きの如き眞理を渴望するが故なるべきか。吾人は善惡無差別論を哲學にきけり。人間の權利平等の論を哲學にきけり。超人論を哲學にきけり。これ等はみな並行線の會合を説くものと見做すべきものならずや。

併しながら實世間に向つて善惡無差別論を實用せんか、その結果は知るべきのみ。若し他人の財産を盗用して可なりとすれば如何、その秩序を破り社會を亂すの害、豈に一軒の家を建立する能はず、一條の軌道を布設する能はざるの比ならんや。善惡無差別論のかくの如くに用ふべからざるは、何人の眼にも明らかなるべく、またかくの如き理論の適用せらるゝ處は自から別に存する事、具眼の人のよく了知する處なるべし。然れどもかくの如き絶對的の眞理は、往々その形をかへその姿を變じて出沒し、人をして計らず誤謬に陥らしむ事あるは吾人の屢々見聞する處なり。たとへば社會主義の如きは、その主旨と條理とに於て如何にも道理らしきものあり。然れども此れを

直ちに現代に實行せんと欲するが如きは、恰も平行線の會合を期して家屋の建築をなすに等しく、到底行はるべきものにあらざるのみならず、此れを現實にせんと欲するに於ては、また多大の害毒を流布する事なしとせず。今日の社會主義は幾多の變遷を経て、余が今こゝに言ふが如き單純簡明の主張思想とを有するものは少なかるべしと雖も、なほ往々到底現存すべからざる理想郷を夢想して、人を謬らんとするものなきにあらず。余はたゞかゝる論者の場合を想像してこれを一例となしたるのみ。

顧みて吾が學問の歴史を一瞥するに、吾れに於ては嘗て高等數學なるものあらざりき。所謂哲學なるものあらざりき。哲學らしきものはありし、哲學的傾向はありしと雖も、所謂純理を説く哲學なるものは存在せざりしなり。恐らくは支那に於ても然りし老莊の學は哲學らしき所ありと雖も、これ亦要するに支那一流の思想に外ならざるべきか。少くとも支那思想の大部分は孔孟の儒教なり。儒教は政治の教なり若くは修身の教なり。吾が國に若し哲學らしきものありとすれば、そは吾が人心の自然より出でた

る渴望にあるべし。佛教は支那に於ても吾が邦に於ても、人心をして形而上の考慮に嚮はしめしと雖も、それは宗教としてなり。宗教は結局宗教なり。哲學上の思想は自からその趣を異にするものにして、これ實に吾が國に缺乏せる一事實なり。一言にしてこれを蔽へば、吾が國民は並行線の會合すると云へる高等數學を知らざりしなり。故に其思想は決して現實を離れず。その倫理は父子君臣の倫理なり。男女は必らず別あるべき倫理なり。並行線の會合、人間權利の平等の如きは思ひも依らざりし學說なりき。然るに西歐の文物輸入せられて、こゝに高等數學も共に照介せられたり。所謂哲學的思想は新に渡來せり。余がこゝに哲學といふは心理學を指すにあらず、認識論を言ふにあらず。哲學的考察の生命あるものなり。自由平等説の如きはこれなり。天賦人權説の如きも亦その一なるべし。

臣下は必らず君主に忠實なるべしと教へられたるものが、一朝君王も人民も平等の權利を有すと告げられたるもの豈に驚かざらんや。往々主君の壓抑を被り來りたるも

の、驚きて且つ喜ばざらんや。人間各個のその自由を享有せる由を聞きたる時、かれ等實に意外の感ありしなるべし。こゝに於てかかれ等は斯くの如き所説の起因と意義とを問ふの暇なく、自由民權説に隨喜せり。一も二もなく壓制政府はこれを顛覆すべしと主張して狂奔せり。自由黨はかくの如くにして生れたり。かれ等は實に未だ夢想たもせざりし、並行線の會合を聞きたるなり。且つその自由平等説の如きは並行線のそれの如く、難解のものにあらずして、頗る俚耳に入り易きものなりき。かれ等の歡喜は察すべく、此れを以て主義となし、これを以て一生の金科玉條となし、も怪むに足らず。即ち自由説に狂奔したりし人々は、その産を傾け、其の業をすて、この眞理のために使役せられたり。然れともかれ等は此の眞理に魅せらるゝの餘り、初等數學の事を忘れたり。かれ等は人間の自由を獲取する前に、自身の獨立を強固にすべき事を忘れたり。自身の生活を安全にする事を忘れたり。故にかくの如くその熱中せるものを獲取せんと狂奔するもの途の半に達するや達せざるやに於て、すでに顧みて自身の生活難

際せるを悟れり。余は今こゝに自由黨の歴史を繰りかへすを欲せず。只かの狂奔の結果は士人の窮乏となり困苦となり終に墮落となり、政黨としてはその嘗て打破せんと欲せしもの、爪牙となり少くとも妥協して安逸を貪るものとなり了せり。これ實に絶對的眞理に傾聴して、却りてその終りを善くせざりし明白なる一例にあらずや。

自由黨の事は過去に屬す。吾人はなほ現在に於て同様なる眞理の誤用若くは濫用の行はるゝを見る。そは青年男女の行爲なりとす。古の教に従へば男女は七歳にして席を分つべきものなりしといふ。當時は人も社會もこれを以て當然の事となせり。戀は御家の御法度なるは、各家を通して然りき。然るに新らしき哲學は——余は敢て哲學といふ。所謂新思想にしてその淵源は哲學にあり——男女相愛するの自然なるべきを教ふ、男女の相愛は則ち結婚の因なりと説く。此れ豈に意外なる福音にあらずや。古にありては子女は常に父兄に従順なるべきを諭されき。然るに新らしき教は精神の自由なるべきを告げ、苟も自個が向上のためには、家事も放擲すべく、責任をさへ放棄す

るも妨げずと説く。(かくの如く明白に具體的に教へたるものありしや否や知らずと雖も、その意義は瞬々のうちに傳へられたる處にして、今もなほ然か教へられつゝあるなり) これまた極めて好都合の教訓ならずや。決して相會すべからざる並行線の會合すといふよりも都合よき教理ならずや。かくの如き福音かくの如き教義を説かれたる青年男女は如何ぞ雀躍せざらんや。己が好み合ふ男女が、父兄の言に反き先輩の教に聽かず相ひ携へて逐轉するは自然の徑路にあらずや。煩悶と稱し、宇宙の大原理を探ると稱して、務むべき家業をすて、學生は當然勵むべき學業を放棄し、悠々自適し、その極自身を自由にするは自身の權利なりとして、淺間に至りはた華巖にゆく。これまた自然の數にあらずや。余は上來記述せる理に依り青年男女のかくの如き行動を以て、誤用せられたる高等數學に出づると爲す、則ち絶對の眞理を濫用したるものとなすものなり。蓋し男女の相愛は自然の事にして素より當然の事なり。個人精神はその尤も貴重すべきものにして、これがためには形而下の事すべてこれを放擲するも或は可な

るべし。然しながら青年男女のかの如く舉動は、算數學代數學幾何學等を學ばずして直ちに高等數學の一部を生嚼りにしたるものならずや。三角形の内角の和が二直角なるや否やをさへ知らざるに早く並行線の會合を主張するは愚にあらざれば狂なり。愚も狂も亦可なり。然れどもかくの如く只高等の事にのみ狂奔するもの、それ遂にその青年自身に禍するなからんや。殷鑑は遠からず、自由黨は則ちこれなりき。戀にあこがれ、煩悶に狂ひたるもの、その結果果して如何なるべきか。並行線を以て會合すべしとなして柱を立て椽を置くもの、愚と等しからずや。此れがために學校は卒業するを得ず。父兄の信用は消盡し、その結果嘗て自からが輕侮し擯斥したる徒輩の前に膝を屈するに終らざるは稀なるべし。余は青年諸君のこゝに注意せられん事を望む。殊に切に留意せられん事を望む。高等の數學絶對の哲理は可なり。吾人はこれに依りて始めて日常の行爲行動に意義あらしむるを得るものなり。然れどもそれは尋常普通の事を完ふしての後に於て攻ふべき事なりとす。青年諸君は言はん。すでに絶對の眞理が

日常行爲の基礎たらば、日常の行爲に先き立ちてこれを知るの要あらんと。否、甚だ然らず。代數學幾何學を知らざれば解拆幾何學は學ぶべからず。數の理は深し。豈に單に解拆幾何學の片言隻語を聞きて直ちに此れを了知し得べけんや。余は青年諸君が此意を體し奮勵その任務を盡されん事を重ねて切望す。願くは余を以て緩漫迂遠の説をなす學究となす勿れ。事例は自由黨の事を擧ぐるまでもなし、青年の失敗は今日比々目睹する處ならずや。

併しながら余は獨り青年諸君に向つてのみ注意を望むにあらず。父兄先輩諸氏の狂省をも乞はざるべからず。余が地方の學校に教鞭をとりし、生徒の事を歎願するもの大抵父兄が頑固なればといふを常とす。蓋し口實なるや知るべからずと雖も、これを口實となすはそのなし得る程の事實が世に存在するが故のみ。余は則ちかくの如き場合必らずまた答へて言へり。爺の藥罐と頑固とは古來の定則なり。斯くの如きを憂慮するは意氣地の乏しきものなり。君志あらば宜しく自から荆棘を排して猛進すべしと。



余は今もなほかく言はんと欲するものなり。然れども世の父兄先輩の頑固なる往々青年の志を知らず、却りて青年を謬らしむる事なきを保せず。青年が所謂高等數學に狂奔するに拘はらず、父兄先輩のうちには高等數學の存在すら知らず、二二は四なるべく二二三を加ふれば五なりとの至極尤もなる加減乗除の外を知らず、並行線の會合に至りては夢想だもせず、ハムレットの所謂覆載の間、所謂哲學を以て考察するもの以外の事物ありとする高遠の眞理あるを知らざるものあり。かくの如き父兄先輩はその子弟の行動の意外なるに驚き且怪みまた憤激して、こゝに彼此の間に巨大なる渠溝を作成する事少なからず。焉んぞ知らん青年のその動作は、現代の教育が徐々に教へんとするものを一舉にして味はんとしたる結果なるを、その結果は悲むべし然れども青年をして茲處に至らしめし原因に關しては吾人の深く同情し、はた識者の大に注意すべきものなくばあらず。青年の過失は叱責するを得べし。父兄先輩の無智に至りては、これを矯正するに難し。先輩諸氏自からの注意を乞ふの外道なからんか。

### ○電車とイブセン

日本の進歩は驚くべきものである。實に突飛である。少し油断をして居ると忽ち時世に後れる。露西亞とは戰つて勝つた。世界一の軍艦が建造された。自動車會社が出来た。萬國基督教青年會の大會が開れた。變轉は頗る急激である。併しながら斯くの如き進歩かくの如き發達は重に外形を主として居るやうに思はれる。多くは虚榮に流れて居るやうに考へられる。余一個の考から言へば、日露戰爭がすでに一種の虚榮で、また此れに依つて多くの虚榮的思想や虚榮的事業を養成し誘引したと思ふ。基督教青年大會の如きに至つては虚榮中の虚榮で、事が精神界に亘るものであるだけいよく其弊害も多い事と察しられる。尤もこれは政府の使喚に出でたるものであると言へばそれまで、只利用された宗教側の憐むべきに止まるのであるが、余は斯くの如き事を以てあまり世の中の慶事とは考へないのである。

此種の新事業新傾向のなかに、尤も長大の進歩をなし尤も多大な効果を收めて居るものは電車であらう。これは決して虚榮から出た事でない。其の事業は世に實益を與へて居る。従つて其發達は實に偉大である。現時東京市内にそれが何哩延長して居るか知らぬが、倫敦や巴里や伯林のその如きは、到底比べものにはなるまい、米國の大都會と雖も恐らくは此れほど便利にそれが四通八達しては居まいと察しられる。余は今言つた如く此の電車を以て決して虚榮の裝飾とは思はぬ。其實際世間に與へる利益は莫大なるものであると信ずる。併しながらそれにも拘はらず、これも時勢のやむを得ぬ處か、形が先きになつたのではないかと思ふ。少し早く出来過ぎたのではなからうかと思ふ。否な早過ぎたのではないが、世間は未だこれを正當に用ゆるまでに進んで居ないと思ふ。其證據には電車に付ては苦情が百出であつた。電車が人を轢き殺した、停電した、車掌が不親切であるといふ、電車側に對する非難は盛んであつた。併しながら更らに世間の方を考へて見れば、非難すべき點は一層甚だしいのである。乗客の

この機關を利用するまでに進んで居らぬ處から種々の不便を起して居る事は一々述べられぬほど多くある。そして此の電車の通ふて居る處の左右は泥濘である。さて電車は形而下の事であるが、これと同様な事が形而上にもあるかと思はれる。則ち歐州の新思想新文學を盛んに輸入紹介する事がそれである。余は題して電車とイブセンと記した、併しそれは必らずしもイブセンには限らぬ。只現下尤も流行して居る此詩人を新思想の代表として擧げたのである。

イブセンの戯曲は新らしい者である。其思想は現代の活動と傾向とを示して居る。余はこゝにイブセンの價值其文藝史上の位置を論ずる事は出来ぬ。併し其現代の大文學である事は最早確定して動かぬ處であらう。今吾が文壇は——少くとも其進歩したる一部は此のイブセンを紹介して研究して居る。中には或はイブセン以上の高い考を持ち、イブセン以上の立派な思想を鼓吹して居る人があるかも知れぬ。これは頗る結構な事で又立派な事である。これ等の人々の吾が文壇に寄與する利益は莫大であらう。

恐らく後來に發育すべき種子の播下として、交通の上に電車が興へる利益にも勝つて居るものがあるかも知れぬ。併しながら此の非常に進歩したる思想、文學は一斑の公衆には充分に了解せられない。従つてこれに對して苦情が百出するかも知れぬ。或はすでに百出して居るかも知れぬ。或は人を轢殺す事がないとも限らぬ。電機の不慣れた技師に依つて取り扱はれるやうに、眞實にイブセンを了解する人の出来ぬ場合もあらう。今の讀書社會のイブセンを讀むのは多く英譯に依るのである。果して英譯がノルウェー眞正の風趣を傳へるか、また傳へたにした處でそれを了解し得るであらうか。さらさら失禮なことを言へば、始めから能く讀まずしてこれを口にする人はないとしても、英譯さへ眞實に讀みこなし得ぬ様な人がないとも限らぬ。萬一斯くの如き怪しい技手に依つて動かされた日には、イブセンなる電車は停電する事もあらう。或は線路外に逸する事もあらう。煩悶と稱して青年が屢々自殺を企て若くは果した事もあつたが、此れ等も新思想の下に轢かれたものであるかも知れぬ。此れも素より電車の場合

と同様で罪は多く轢かれる側にあるので、これほどの事は、新思想なり新機關を輸入する場合には是非免れ難い事で、則ち已むを得ぬ事である。

人の轢かれるのは已を得ぬ事とするも、併し電車の停電は困る。間違つたイブセンが紹介されては困る。なほ又乗客が舊式で折角の此機關の利益を滅殺して他の乗客に迷惑を懸けては猶更ら困る。世間がこれを了解する事の出来ぬために、其の舊式の思想を以て、此の新思想を打ら壞しては甚だ困る。余一個の考を以て言へば、東京には電車を布設する前に是非一つやらなければならぬ事があつたと信ずる。それは道路である電車の疾走する前に人間の歩行する道がなければならぬ。世間知つて居る如く、此の大都府には雨が降ると道路はなくなるのである。則ち此の泥濘を何とか取り除ける必要があつたのである。併しすでに此電車が布設せられ而も非常な發展をなした事であれば、今は只これを充分に活用しその圓滿な發達を遂げしめねばなるまい。同様にイブセンに就ても余は其前に大に爲すべき事があつたと信ずる。其道を備へる必要が

あつたと思ふ。則ちイブセンに来るまでの歐洲思想の順序を追つて、これを公衆なり文壇なりに示して其道行を了解すべきではなかつたらうか。たとへば佛蘭西に就て言ふも、そのコンクルの小説でもゾラのもマウバッサンのでも——翻譯に都合のよい短篇は別として——殆んど其作者を代表し得るものは一つだに翻譯されて居ない露西亞に就て言へば、ツルグニエフでもトルストイでもあれ程喋々持て囃されて居ながら、確としたものは矢張譯されては居らぬ。こんな風に上滑りをして行つたのはイブセンを言つても世間には分るまい。分からないのが當り前である。併しそれも仕方がない、今はイブセンが紹介されたのであるから——實は疾くから一部の人には讀まれて居たのではあるが——最早後ろを向く事は出来ぬ。事ここへ及んでは已を得ぬ、技師たるもの大に奮勵して、良くこれを研究し了解し、イブセンの停電、線路外への奔逸等のない事を望むのみである。

さて凡そ現代に於て此れ等の新らしい思想傾向を紹介し鼓吹して居るものは青年である。廣い意味の青年である。余は深く其活氣ある盡力に敬服する。然るに青年諸氏の先進老輩には所謂解らずやが澤山に居る。かれ等には煩悶といふ事が分からなかつた、青年の心が了解されなかつた。そして青年の意氣が銷沈して居ると言つた。馬鹿な話で。彼等は自分等の意氣が鎖沈して居る事には氣が付かなかつたのである。恐らく今でも氣が付かぬのであらう。此れは已を得ない事で、此の急轉直下の吾が社會には、こんな老輩先進者は伍して行く事が出来ないのである。かれ等は古い小學讀本にあつた鶯の玉子を孵へした牝雞のやうなものである。車に乗つて居て電車の疾走するのを呼びとめ、それに轢かれたものを見て、電車の害を叫んで居る類である。併し先進老輩を追窮する必要はない。かれ等はすでに打ち破られて青年は凱歌を奏して居るのであるから、今改めてかれ等の事を兎や角言ふ必要はあるまい。

それで此青年を指導し統率すべき先輩老輩がこんな風である事は、一面甚だ悲むべき事であるが、青年に取つては頗る愉快な極めて面白い事實である。これが外國であ

つて見ると逆かさまである、たとへば固牢な英國の如き國に於て早くイブセンを紹介したものは誰れであるか。評壇の老将ゴツス氏ではなかつたか。其翻譯者はアーチャ―氏ではないか。何れも年寄株で、則ちその年寄株が新思想の鍵を持つて居るのである。然るに吾れに於ては無名の青年が多く此の新思想家を味つてこれを紹介して居る。余も亦青年の一人であれば此の特權を偉大なる賜として、時代に感謝するものである。

併しながら此新思想を動かすには、充分の用意と充分の熟慮熟練とを要する。これが只半分の了解に終つては先進老輩に對しても恥かしい事である。これをして只突飛な新奇に走る一時の出來事に終らしめては、一種の虚榮に終らしめては、只老輩に對して恥かしいのみではすまない、吾が思想界のために甚だ悲しむべき事となるのである。願くはこれを完全に了解し紹介し且つ消化したいものである。

イブセンの名をかりて、これを電車に比し、以上の事を論じたのは、此詩人の崇拜者に對して甚だ失禮な事であつたかも知れぬが、悪意からでない故許して貰はなければならぬ。

### ◎非武士道論

北齋の畫は外國人の眼に觸れて以來特に其聲價を上げたるが如し、吾が美術の敬重すべきはまた西人に依りて教へられしが如き觀あり。然りと雖かれ歐米の人吾が美術を尊重すと雖も必ずしも、これを以て自國の美術に勝れりとなしたるにはあらず。一にはかれ等が銳意隱微の闡明に力むると、一にはその骨董的趣味を以て珍奇を愛玩するより風尙をしてこゝに至らしめしものなり。吾國初めは形而下の事に關して西人の指導を仰ぎ、やがて形而上の事に及び、美術の鑑識に於て其啓發を受け。依りて以て邦人自から母國の長所に心附くを得たり。近時世人が囁きに喋々する武士道の如きも、亦これに類するものなきか。日清戦争より北清事件に及び終に日露戦争に至りて、邦人

の武力の實に侮るべからざるに意外の感をなしたる西人は、吾邦に武士道なるものありと聞て始めて、其強勇の所因を探り得たるが如く、にはかに此れが研究に従事せり。邦人が今日に追びて急に武士道を稱道するは、一つはまた戦勝の結果なりと雖も、それ或はかれ西人の稱讚の聲に惑はされしものあるにあらざるか。さりとは思慮なき限りならずや。余は武士道を以て骨董的道德といふ、これが稱道は骨董の流行なり。西人豈に武士道の眞價を觀取し得ざらんや、邦人の正直なるかれの山師に欺かれずんば幸なり。

何を以てか武士道を以て骨董といふ。曰く今日に於ては無意義なる道德なればなり。何を以てか無意義といひ不用といふ。余は曩きに本紙「机上小觀」に於て「小説中の生活問題」を論ずるに當り、武士道の今日に價値なき所以を述べたり。乞ふ今こゝに此れを再説せんか。向氏は武士道を以て奴隷道德と罵れりとか、然り武士道は奴隷道德なるべし。或人はこれを以て戰國時代の道德にして今日に適用すべからずといふ。

然り今日に用ふべからざる道德なるべし。然りと雖も余が力を極めて言はんを欲する處は、武士道の今日の世にありて無意義なりといふの一事にあり。則ち根本的に用ひ難きの一事にあり。

第一に武士道は生活と没交渉なり、生活と没交渉なるもの、たとへ其説く處、其教ふる處、美盡し理至れりと雖も、何等の意義を有する能はざるにあらずや。試に思へ武士は一定の祿を食みて生活の顧慮なく、平時何等の力むる處なくして、凡ての特權を享有せるものなり。則ち武士道はかくの如き特權ある階級の道德なり。其道德はこの特權といふ條件を附帶しなる上の道德なり。それ武士は生活に顧慮する處なし、故におのづから其道德も生活と没交渉たるは免れがたし、其生活に没交渉なる此れを無意義といふ。かくの如きは丘博士の所謂懷手式なる道德といふべし、然るを其享有せし凡ての特權の事實消滅したる今日に於て此れを再興せしめんとするは、到底不可能の事にして結局無意義といふべし。蓋し個人の自由若くは權利といへるが如き哲學上の考察

よりも亦將に斯くの如くなるべしと雖も、諸はかくの如き高遠なる理義を提唱せんと欲するにあらず、單に現代の生活上よりして其不可能と無意義とを言はんと欲するのみ。抑も自個一身を如何にすべきか、これ萬事の根本たるべき緊要の問題にして、この一事定まりて後、始めて義理も生ずべく、忠孝も行はるべく、名譽も重んずべし。未だ一身の處理定まらずして早くかくの如き徳義に及ばんとす、必らず圓滑を缺き衝突を惹起す、何となれば斯くの如き徳義は不自然なるのみならず、また贅澤なればなり。余が今日の武士道を以て骨董的徳徳といふはこれがためなり。こは決して一場の戲言を以て目すべからず。明治年代に於て見る一家の不調和、若くは近時に至りてや、雷同的流行の觀を爲したる思想の懊惱、みな此の不自然の徳徳より胚胎し來れるものなればなり。坐して祿を食むもの、義務と、額に汗して働くもの、それと如何ぞ一致するを得んや、武士道を今日に用ひんとするは富者の交際を貧者に強るが如きのみ。さらに翻りてこれを考ふるに、封建制度確定の後に於てや、武士は其一身に緊切な

る何等の用務なく責任なく、これを極言すれば只優遊坐食するを以て足れりとせり。若し其任務ありとせば平々凡々の事たり。其食む處の祿は極めて多く、其享る處の特權は殆んど無限なり。こゝに於てか自然の理法はかれ等に一種の責任を與ふ、此の責任は則ち武士道の條規なり、則ち時に政岡は千松を殺さざるを得ず、時に松王は親から其子の首を實檢せざるを得ず。武士が此の多大の犠牲悲壯の行爲を敢てするは、たゞまゝ其積年の特權が偉大なりしを示すものなり。父祖相次で幾十百年の恩典に浴せるもの、一朝其君家の滅亡に及びてや、一死以てこれに報ゆるはまた當然といふべし。大石良雄等の復讐は頭る戯曲的なり、然れども亦將さに當然の事なり。余を以てすれば此れ尋常の事のみ、將に爲すべき道たるのみ。福澤先生が藝の内に數へざりし所謂逆鋒立ちのみ。福澤先生の説を誤解したる世俗は、先生を以て楠公權助同等論を主張せりとなせり。先生の論據は知らず、余は又四十七士凡俗論を爲さんと欲す、只余は四十七士を以て無用の死をなしたりとは信せず。むしろ平凡行くべき道を踏

みたりとなすのみ。素より舉世爲すべき道を爲さざるもの、滔々みな然るを觀れば四十七士の行爲は當に賞嘆に値すと言はゞ余また何をか言はん。

畢竟武士道の道德は贅澤道德なり。太平の世武士の職務閑散にして爲すべき事なし、而も食祿特權偉大なり、こゝに於てか此れが交換として武士道の條規あるなり。武士道の起因何處にありとするも、其結果せし處は則ち斯くの如きのみ。所詮は太平なる封建時代の制裁なり。

然るに時世は一轉せり、かの特權は全然撤去せられたり。吾人は舊日の如くしかく閑散なる能はず。今や各個其の爲すべき處を爲し、盡すべきを盡す、また寸暇あるべからず。斯くの如き時勢に於て、先づ君家の事を第一とする武士道の實際に施すべからざるは言を俟たず。今日の時代に於ては個人を單位とすべく労働を第一義とすべし蓋し義理も第二位たるべく名譽も然り。恐らくは武士道の説くが如き忠孝も亦然るべし。余は實に今日の所謂新武士道若くはこれが改造なるものを知らず、然れど

も余は權利自由の問題よりするもむしろ生活の問題よりして今日の道德は個人を單位となすべきを信す。何となれば吾人の生活は君家に依りて支へられず、父祖の餘祿に依りて成るものにあらず自己の努力に依りて遂げらるゝものなればなり。武士道の如き根柢を異にする教義は、如何にこれを改造し新築するも、其基礎を異にすべき今日の道德と一致せしむる能はざるや明けし。聞くが如くば耶蘇教の先覺者にしてまた武士道を説くものありとか、あまりに見識の擧にあらざるか。武士道の生活問題との關係のごときは些事たり特に識者の考慮を待たじ、若しそれ其の宗教上哲學上の見地よりして、耶蘇教と比肩すべきものにあらざるは疾くして了知せられたる筈にあらずや。今日に及び何を苦んでか其服從的德義を重しとする武士道を迎へんとはする。耶蘇教徒も亦阿世となり了せしか。

若し論者あり、武士道の起源を説き、これを以て單に封建時代の産物にあらずとなし日本固有の美風高德に依るとなすものあらんか。余はたとへ其起因の國民の性情にあ



りとするも、なほかの特権ある階級に依りて發達しこれに適合し、其名稱をさへこれに取りて、其制度に深く侵染せる以上、これを解して上記の如くに思惟せざるを得ず。其起因は兎まれ、武士道の教ふる處若くは實際に發顯する處、必らずかの階級の色彩を示すを如何せん。若しはた其弊を除き、根本的にこれを改め、國民の性情の發露とも見るべき當初の自然に返さんとするものあらんか、斯くの如きは極めて可なり。然れども斯くの如くにして新たに成れるものはすでに武士道にあらざる事を記憶せざるべからず。近時西歐に響き渡れる其美名に狼狽して、猥りに武士道を稱道し、其今日に意義なきを思はず、若くは全然其根本思想を異にせる別途の思想を捉へて武士道となし、以て得々たるが如き他の嘲笑を招くの虞なからずや。西人の跡を追ひ、徒に他の煽動に乗ずるが如きは識者のとらざる處なり。

さらに思ふに生活に關係なき武士道は計算の事を度外に置けり、全然經濟を無視せり。武士の子弟は金錢を計算し能はざるを以て誇とせり。かくの如き教を以て近世の社

會に適用せんとす、果して行はるべきか。凡そ數の理に通ずると否とは、以て野蠻の人と文化の民とを區別する標準なりとす。然るに武士道は數の考量なきを貴とす。其教ふる處はもと金錢を賤むにあしりならんも、やうやく數理經濟の考慮を失ふに至れり。此點に於ても武士道は現代の思想と矛盾せりといふべし。武士道の説く處の今日に行ふべからざりしは實にかくの如き抽象的の點にととまらず、さらに實際に於て其不條理を認むべし。たとへばこれを戰爭の上に見んか、戰爭は武人の本務たり、然るに今日の戰爭が凡て數理計算に依るは事實なり、見るべし其本務たるべき戰爭に於てさへ、武士道は用ひがたくなりしを。

これ等の難に關し人若しこれを以て武士道の皮相を見て、其精神を知らざるものとすものあらんか。余は言はんと欲す、其精神を言はば必らずしも此れ武士が專有せる道にあらずして、萬民等しく有する道義心なるを。かくの如きはこれを武士道と言はんよりは人道と稱するを至當とす。左れば武士道の特に數理を輕侮するを辯じて其

精神の如何を云々するは素より誤れり、蓋し特権を有する武士ならずともかれ等が有せしほどの精神は容易に涵養せらるべし。而もかの數理經濟を賤むは實に此の特権より來りしものとせば、吾等は力めて其教を撲滅し、新に人民道を建立すべき要あらざるや。

武士には一種の自負の念あり、自重の氣あり。此自負の念自重の氣は由來かれ等の生命なりしと雖も、其念慮は凡て階級より出でし者にして今日また其用なし。たとへば、吾は武士なれば、吾は武家の出なれば、との言は武士が道德を守り體面を保つがために用ふる語にして、吾等の屢々耳にし又往々自から用ひし語なり。こは則ち吾れは上級の特権ある階級の輩なればと言ふの意なり。かくの如き偏頗の教が今日に行はるべしと思ふか。吾は一市民なり、一國民なり、人間なりとの念こそ、今日の輩が有すべき觀念なれ。此一事亦武士道の近世思想と矛盾し、其今日に用ふべからざるの一例とすべからずや。それ武士道に養はれたるものには、多く市民國民等の觀念なし、故に

自から治むる事を知らず、市民たり國民たりはた人間たるの義務を等閑に附するの弊頗る多し。若しそれ吾れは武士なればとの念は、今日に於て士人の道德を維持せんよりはむしろ僅かにかれ等の虚榮心を慰むるの料たるに過ぎず、明治の十數年に至る間の巡查が、武士より出で、其職に盡くすを得たるは此心ありしがためにして、斯くの如きは武士道の隋力の良好なる方面に顯はれしものなり。然れども其結果は最近にまで及ぼせる官權の威力となれり、巡查の時に却つて人民を苦むる官職なりと誣らるゝ事あるも之れがためのみ。今や幸にして巡查の増給尙頭起れり、此れ一面にはかの吾は武士なり、吾は官吏なりとの虚榮心の消滅し來れるを證する一顯象たりとす。何となれば從來巡查の薄給に甘んじて其職に盡したりしは、この自負の念虚榮の心ありしがためなりしも、今や此の念やうやく去りて、これに代はるに實質たるべき俸給の多額を要するに至りしものなればなり。これ素より巡查社會の自覺に出でしにはあらずと雖も、大勢は自からこゝに出でしめしのみ。然り武士道はしかく時勢に後れたるも

のなり、故に余はこれを骨董とし贅澤として、これを再興せしめんと欲するの輩を笑ふものなり。

さらに一事を言はんか、武士道は死の教なり。如何にして死すべきか、如何にして殺すべきかを教ふる事盡せりと雖も、如何にして生くべきか、如何にして生かすべきかに關しては何等教ふる處なし。すでに根本の生活生存の問題に没交渉なり、焉んぞ如何にして生くべきかの道を攻ふるを得ん。則ち生命を保存せんよりは、むしろ生命を棄つるの道に考へ及ぶは自然なり。君家に養はるゝものゝ考慮自から斯くの如くなるべし。而して其結果や制欲主義となり、保守的となり、活動の停止となる明治維新の大業の所謂真正の意義に於ける武士に依りて遂げられざりしは亦其一例ならずや。かくの如きは新進活動の世に於て頗る不道理の教なり、由來武士道の活躍して其光耀を發揮するは生命の委棄を主とする消極的の戦争に於てのみ。然るに今後の世界にこれを見るに戦争の絶滅は素より期し難きも、其威力の日に減退し去るは明なり。加之上記の如く戦

また昔日の戦争にあらずして、形而下に於ては器械力に依る事多く、形而上に於ては智謀に依るもの多し。殊に近時に至りては戦争に於てすら、生命失はんよりはこれを保持するを以て本義とするの傾あるをや。武士道が唯一の活動の天地また日を追ふて其範圍を狭縮せらるゝの概あり。

凡そ世には生を棄てこれを失ひて、却て眞の生命を獲る事あり。徒らに生を貪るはまことの道にあらざる事論なし。余は猥りに生に戀々し死を恐れん事を獎勵するものにあらず。然れども根蒂的に生を顧みず、始めより死の上に教を建つるの可なるを見ず。生を重んぜず生存と没交渉なる教義道徳、それ世をあやまるなきか。今日自殺者の頻繁なる、これを漫然人の薄志弱行に歸せんよりは、また武士道の如き消極主義の獎勵が關與する處多大なるにあるるか。世の所謂教育家なるもの、自殺に戦慄し、薄志弱行を罵りながら、なほ武士道の如きを稱揚す。矛盾にあらずや。かれ等の意終に那邊にあるかを解しがたし。

余はかく武士道の非を説くと雖も、必らずしも亦其美所を思はざるにあらず。エドマンド、パークが佛蘭西の革命に對し、ア、騎士の時代去れりと、慨嘆せしものなほ余が胸裡に異常の響あり。然れども今日の吾社會に於ける武士道の稱揚は大にかれと趣を異にし、事情を異にし、境遇を異にす。徒らに古物を珍重して其眞價を知らざるが如きは、余の甚だとらざる處なり。

願れば余自からも武士の子なり、武士道に養成せられしものなり。其道德其教育なほ胸裡にありて快感を興ふる處少なかずと雖も、如何せんそは一種の快感に過ぎず。人生に根蒂を置かざる所謂砂上の建築にして、今日の生存に對し殆んど何等の意義なし。其教訓其道德はむしろ一々障害を成して内界には思想を閉息せしめ、外界に對しては此の開明の世に於ける大都の一市民たるに煩をなす。然るに余は重ねて言ふ世の所謂先覺者若くは教育家なるもの、今に至りてこの骨董品を掘り出し今日の道德となさんとするといふ。惑はざらんと欲するも得んや。或はこれかの商家の西人が北齋を珍

重するを迎へて北齋を喋々するが如き類にあらざるか、私見を述べて江湖の批評をま

### ○新興の文學は宗教の牙營に切り込み

宗教を分析すれば三個の要素より成る。第一は徳操なり、第二は高潔なる情操なり第三は愛憐の念なり、第一は宗教の戒律となり第二に淨念となり第三は社會的事業として發顯す。宗教は實に此の三要素の化合物なり。此の三要素化合して茲に宗教的情操なるもの起り人生に何等かの意義を興へ、さらに進んで神なる理想的存在物を創造し、翻つて人生はかくあるべく、またかくあらざるべからずと宣傳す。吾人は世の進むに従ひて宗教のその勢力範圍のやうやく狭少となるを見る。古昔にありては宗教は萬事にして學問も教育も政治も凡てその内に含まれたりしと雖も、今やその天地は著しく狭まれり。第一の徳操は教育にその大部を委託せり。第二の情操は文藝にその

本陣を奪はれんとせり。第三は全く世間的の事業となり。かの救世軍の如きは名を宗教に存してその實全然社會的事業に専心せるものと見るも大過なしとす。余は宗教の事に關して殆んど門外漢たり、従つてその盛衰若くはその本質の如何を論せんと欲するものにあらず。只第二の高潔なる情操を興ふべき宗教の世界がやうやく文藝の浸入を受けつゝあるのみならず、此一角よりして今日の文藝が世の要求に應じ、人生をしてかくあるべし、またかくあらしめざる可からずと主張する宗教の本營にまで切り込めるの事實を語らんと欲するなり。

余はかくの如き事實を考ふる毎に今日の宗教の何故にしかく薄弱にしてまた何故に世の要求を満す能はざるかを怪しみ、往々パンを求むるものに石を授くるが如き態度のあるを見て、最早所謂宗教の消滅せんとする時機の到來せるにあらざるかを思はざるを得ず。少くとも宗教の一轉機に際せるを感ぜざるを得ず。余は佛國革命時代の無宗教的思想を指てしかく言ふにあらず。むしろ宗教的思想の偉大なるべきを思ひて此

言をなすのみ。

吾人は嘗て美的生活論の文壇に喧傳せられしを知れり。此れ實に現代が何者をお望するの聲なりき。さらに過去兩三年の間に於て青年の煩悶なるものを聞けり。此れまた人生に何等かの意義を加へんと欲するの聲なりき。余は美的生活を稱導したる結果甚だ不祥の事實の世に残りたるべきを想像す。煩悶の事實に至りては現代青年の一部の薄弱なる意志を遺憾なく發露したるものとして、むしろその苦悶者の或る者に對しては面に睡せんと欲するほどの感なきにあらざりき。而れどもその末流の如何に不祥にしてまた如何に輕薄なりしとするも、その現代の要求にして人生に意義を求めたるの事實に至りては決して否定すべきものにあらず。而して此の如きは凡て何處より來りしか余は聲を大にして言はんと欲す、これ實に文藝の鼓吹したるものなりと。余は敢て斯くの如き要求が文藝より出でたりとの證左を擧げじ何んとなればそはあまりに明白なる事實なればなり。而してかくの如き思想とこれに應ずる救濟の道とが宗教に出

ですして、却つて文藝其者に出でたるはや、怪むべきならずや。而かも美的生活の唱導せられ、煩悶の流行するや、教育家と稱するものは殆んどその何事なるかをさへ知らずして、叨りに文藝の社會を荼毒するものたるを言ふに過ぎず。宗教家またしたり顔に自から高ふしてその救の道を己に求むべきを説けるに過ぎざりき。何れもその本據を奪れたるを知らずして恬然として他を難す、むしろ笑ふにたえたり。

余はこゝに文藝の趣味に就て一言せんと欲するは文藝の極致を以て恍惚自我を忘る處にありとなす。所謂理智も入るべからざる、善惡を超脱したる處にありと信ず、若し文藝の作物に於て、その本質に對し論議の容るべきものあり、道義の如何を評隲し得べきものあらんか、そは未だ以て上乘の値なきものなりとす。ホーマーの詩かくの如く、ミルトンの失樂園かくの如し、ゲーテのファウストまた然り。吾人は西遊記を喜ぶ。アラビアン、ナイトの如きに至りては全く吾人が理性と徳操との外に超脱して、天地別に人間にあらざるの趣あり。余はかくの如き作物を以て絶好の藝術品となす。

す。

然るに時勢は推移せり、一轉せり。吾人の要求も實際の作物も、人生に意義を求め、一點に集中せり。此れすでに宗教の世界に入らんとするものなるに、たゞに人生に意義を求めんとするのみならず、進んでは人生を以てかくあるべし、かくあらざるべからずとする主義主張の如何を以て作物に對せんと欲するに至れり。此れ明に宗教の天地なり文藝が宗教の牙營を奪はんとせりといふは即ち此の事なり。見よ現代の人が文藝上の作物に對するや、先づその人生に對して教ふる所如何を問ふ。たとへばツルゲニエフの人生を見る所とダヌンチオの見る處とを異る處如何、イブセンが社會に對する考慮如何、マールテルリンクの神秘思想は如何と、これ等は則ち文藝を評價するの標準となり、決してイブセンの技巧を説かず、ツルゲニエフの書の興ふる快不快を問はず。全然人生問題、その人生に對する着眼點の如何を以て第一要義となすに至れり。此れ豈に文藝の宗教的性質を帯び來りたる所以にあらずや。現在吾が青年は宗教にその

要求を語りて得る處なく。去つて文藝にこれを求めつゝあるなり。余はかくの如き傾向が果して文藝の本旨なるか否かやにつき疑ひなき能はず。然れども社會に於ける一事實としてこれを見ればむしろ慶すべく嘉すべき顯象たらずばあらず。これ則ち醉生夢死を欲せずして人生に何等かの意義を興へんと欲する努力なればなり煩悶なればなり。

ニーチエ一派の本能主義と云ひ刻下歐洲に行るゝ近代新興の文學的思想と云ひ皆その説く處主張する處を以て之を實際に體現せんと欲せり。即ち新興の文學は嘗に世相を見るを以て満足せず。己の思考するが如く世を改造せんと力むるものなり。即ちその文藝上の主義は直に宗教たるなり。新興の文學は實にその主張者の宗教たるなり。かくの如き歐洲文藝の傾向はまた吾れに侵入せり、今日所謂自然主義と稱する名の下に漠然と唱導せらるゝ處のものは即ち歐洲新輸入の文學たると共にまた宗教なり。故にその主張者は本能主義の場合と等しくその漠然直覺する處を以て作物を評價するのみなり。

「ならず。また此れを以て個人の行動をも律せんとするなり。此れ明かに宗教の範圍に入りたるものといふべし。只それその論議のあまりに多く主張のあまりに甚しきや、その文藝上の作品としての價值に至りてはやゝ懸念なき能はず。何となれば余は曩きに説けるが如く真正の文藝的價值は凡ての論議と凡ての主義とを脱却したる處に於てあるものなりと信するものなればなり。さはれ現代思想の一顯象として見ればかくの如き傾向はむしろ敬重し且つ奨励すべきものにあらざるか。

然るを何者の迂儒か、その實際に顯はるゝ處往々曩日の本能主義若くは煩悶者流に等しき不祥の事あるに驚きて、これを嫌惡し極力此を防遏せんと欲する。吾人は何事にも率先してその迂を發表するに躊躇せざる教育家が未だ明白なる意見を發表せざるを怪む。然れどもその學究的俗論はすでに多少の響を爲せり。宗教家に至りてもまた一定の見識なきか、吾人は基督の自然主義など云ふ怪しき藪から棒の論議を見たる外未だ何等具體的の意見を聞かず。余を以て見れば新興文學のかくの如き態度は教育家

若くは宗教家のその本陣に切り込まれたるものとしてその耻辱を明白にしたるものなりと信ず。余は本能主義煩悶及び現在の所謂新文學がみな一貫したる現代青年の努力煩悶なるを思ひ、教育家宗教家の切實に此問題を考察せん事を願ふ。同時に文藝としてはその宗教の本陣に切り込める丈けそれ丈け未だ醇乎たるものにあらずしてなほ變轉すべき必要あるものにあらざるかを疑ふ。

### ○教育上注意すべき事實

吾が思想界には常に何者か缺陷あるが如し。則ち吾人は常時何者をか求めんと欲して而もこれを得ざるが如き状態にあり。この缺陷に對する不平不満は時に應じその形を變じて爆發せざれば已まず。蓋し硯筆者等が一派の結社を爲して、不健全の徒と目されしもまた無意識の間にこの不満を訴へしものか。吾人は一時美的生活論の聲の偉

大なりしを知る。其主張者がニーチエを擔ぎ廻りしを知る。それ美的生活とニーチエ主義とはこれ單に文藝上の主義にとゞまらず、これを以て吾人が行動の凡てを支配せんと欲せし嚴乎たる人生觀の鼓吹たりしなり。而して斯くの如き主義や主張や、これ明らかに固牢の道義慣習に對する反抗若くは挑戦たりしといふを得べし。西歐に於て宗教の威嚴に對しこれを打破する精神疾くに鬱勃として時にその爆發を見たるが如く、現代に於て吾が人心自然の活動は、古來の慣習と道德とに對し、かくの如き反抗の勢を爲す、實に已を得ざるに出づるなり。

この鬱勃たる精神は近者また自然主義の主張となりて顯はれたり。自然主義には種々の意義あり、區々の主張あり、これを概括すれば則ち輓近派と稱すべきか、その主義には幾多の缺點あるにせよ、人心を抑制しこれを拘禁する古來の宗教道德を打破し、人生と宇宙とに對し新生命を觀取しこれに新解釋を與へんと欲するは、その主張者の自覺せると否とに拘はらず、共通せる一點なりといふべし。則ちこれまた一種革新の



聲にして美的生活論と等しく、自から現代の制度文物に對し嫌厭たる人心の活動に外ならず。余は美的生活論若くはかくの如き人心活動の所因に關し、不平不満なる語を用ゐたり。不平不満なる語は往々誤解を招く恐れあり。余がこゝに言ふその意は、人間自然の心意が、固牢の橋壁に閉されて、その自由を失ひたる際の鬱勃たる状態をいへるものにして、怨嗟疾視の女性的思辨をいふにあらず。則ち余が列擧したる處の諸の活動は人心自然の要求に外ならざるなり、蓋しこの自然に反き、この自然を防ぐるものは危し。

凡そ心を教育に注ぐものは須くこの人心の機微を察せざるべからず、その歸趣を知らざるべからず。然れども不幸にして美的生活主義若くは所謂自然主義に反對するものは多く教育者なり、少くとも所謂教育者を以て任ずるものなり。これ頗る痛歎すべき事にあらずや。余はかれ等が所謂文藝上に於ける下劣なる作品の往々誤りて自然主義の産物なりとせらるゝ場合に於て、この主義に反對するをいふにはあらず。只此の大なる

人生觀としての自然主義に反對するの非をいふなり。則ち所謂謹嚴なる教育者は美的生活論といはず、自然主義といはず、常に舊套習俗に反するものに反對す。而してかれ等は此の如き新精神の勃興若くはその活動に關しては、常に一指をも染むる能はざるなり。此れ豈に吾が教育界に於ける一大缺陷にあらずや。余は切に此一點に關して、世の識者の留意せられん事を望むものなり。併しながら今余はこの痛切なる大問題に關しては、只これを注意するにとゞめ、別にこれに連關する教育上の實際問題に就ていふ處あらんと欲す。蓋し今余の言はんと欲する處は所謂現代の教育に於ける如上の缺陷を具體的に説明するものなればなり。

## 二

第一に余が屢耳にする處は教育勅語なり。教育勅語のその内容の完全せるまことに古今に亘りてあやまるべからざる眞理なり。何人か又これを疑ひこれに異議を挿むものあらんや。さすがにその完美せるの一事は、英人と雖も敬嘆せりとは吾人が近者菊池

男爵より聞き處なりとす。然しながら勅語は文字なり。若しこれを説くもの、精神と實行とがこれと伴はざらんか、教育上に何程の功果あるべきか。その精神を抜き去りたるものは、愚夫愚婦の御題目にだに如かざらん。よしやまたこれを説くものに精神ありと雖も、偏僻なる固牢の心を以てせんか、却つてその子弟を賊する事大なり。それ勅語の教ふる所は廣し。その量は海の如し。然るにこれを説くものこれを狹義に解し、その大なる精神を没却する事吾人の往々見聞する所たり。而して教育勅語のしかく濫用せらるゝ結果は、教育上に於けるその價値に就て疑念を狭むものを生ず。これ豈に慶事ならんや。

平民の徒、革命的思想を懷抱するの徒が、教育勅語の功果につき疑念を抱くは、將にあり得べき事なるに、余は實にその反對の社會にかくの如き念慮を抱けるものあるを知れり。反對とは貴族の社會をいふ、所謂皇室の藩屏と稱し民衆と隔離して別天地を享有する貴族の間にありて、かくの如き思想に接せんとは、余の實に意外としたる處

なりき。これ明らかに所謂偏狹なる教育者が極力その擁護せんと力むる牙營に於て敵に内通せるものを見たるなり。これまた一つに偏狹なる教育者の勅語濫用に依れるにあらざるか。一葉落ちて天下の秋は知らるといへり。よしや一人半個たりと雖も、貴紳の間にかくの如き所説の出づるは、凶事といはんか、はた慶事といはんか、大勢の那邊に動けるかを知るべく、且つこれを以て、現代の教育に何等かの欠陥あるを認知するを得ん。

さらに溯りて何が故にかくの如き思想の貴紳の間に動けるやを尋ぬるに、余を以てすれば此れ一に華胄貴公子の洋行にありと信ず。余は貴族諸家の吾が教育に對し、何等の考慮を有するや否やを知らず。かれ等は果して吾が教育に不平不満なるや否やを知らず。然れどもかれ等はその子弟を海外に留學せしむるを常とす。殊に英米の兩國に遊ばしむるを常とす。尤も自由放任の米國と保守ながら自由を尊重する事尋常ならざる英國とに遊べるものが、その感化を受けずして歸朝すべきか。殊に無邪氣なる貴

紳の容易にその感化を受くべきは當然なりとす。たゞかれ等一旦歸朝するや。幸か不幸か周圍の舊習に鎖されて、新たに得たる思想は消散しまた再び固牢の徒となり了し得るのみ、故にや、志あるものはその獲取し得たる新思想と新智識とを以て現代に對す、則ちかれ等は尤も緊要なる教育の問題に留意す。かれ等一たび教育の問題に留意す。自からその中心となれる勅語に關して、特殊の見解を抱かざるべからず。尤も保守的なるべき貴紳の却りて、往々著しき革命的思想を有するは此れがためならんか。その所因の何れにあるにせよ、貴族社會に此の如き革新の思想あるは余の親しく實驗せし處なり。而してこれ明白に現代教育の欠陥を指示したるものにあらずや。余は必らずしも貴紳の洋行を可否せじ、またかくの如き趨勢の善惡を言はじ、只この一事實を記述して、これを以て刻下教育の一欠陥たるを證明せんと欲するのみ。

## 三

さらに余は教育に關し、一種の異象の存在するを疾くに認めたり。そは識者のその

子弟の普通の中學に送る事を好まざるの一事なり。官人のその位高きもの若くは實業家のその資産豊かなるもの、並々その子弟を吾が中學に送らずして。特に海外に遊學せしむるものあるは敢て言はず。これを吾が教育界の薰育に委ねんと欲するものも、往々その子弟を世の所謂中學に送らずして、却つて特殊の中學に送るは頗る異とすべし。たとへば外國人の設立にかゝる學校を撰むが如きこれなり。蓋し高位の官人素封家はその權力若くは財力上の便宜あるため、世の子弟と隔離してその子弟を教育せんと欲する事あるべく、またその子弟の放縱なるや、普通中學の規定に服するにたへず、已を得ずこれを別種の學校に送る場合あるべし。然れども余の親しく聞きまた親しく見たる處に依れば、識者にして必らずしも斯くの如き私意私情に出でず、而も全く世の中學なるものを嫌ひ、考慮熟思の結果如上の學校にその子弟を送れるもの少なからず。これ豈にまた吾が中學の名譽なるべきか、はた吾が中等教育の誇りとすべき事なるか。

かく言はゞその識者なるものを以て或はまた革命的急進的思想を懐抱せるものと断定するものあるべし。然るに焉んぞ知らん、かの保守的なる貴族の案外に新思想を抱けると同じく、かくの如き人士のうちには、吾が高等の教育に干與し而も一種の保守的主張を有する人あるを。思ふに少しく心あるものは現代に於ける中等教育の甚だその道を得ざるを知悉せるならん。余は幾多の識者のその子弟を普通の中學に送らざる事の大に所因あるを思はずはあらず。余はまたかく言ふと雖も、素より一々統計に依りて立言するものにあらず。故に多少の誤謬なきを斷せず。然れども教育家自からが、現に官立中學に信を置かざるが如きは、實に天下の秋を知らする一葉たらずはあらざるなり。よしや、そは單に一二の例に過ぎずとするも、現教育界に於ける缺陷を明白に表示したるものとなすも何の妨かあらん。

蓋し若し社會樞要の位置にある識者に就て、現代の教育に對するその所説を聞かば、恐らくは意想の外なる答辯に接せんか。余は教育行政の衝に當るもの、深く此の趨勢を察し、自から省る所あらん事を切望す。若しそれ自由の思想を拘束し、革命的精神を助長するあらば、國家國民の不幸これより甚しきはあらざるべし。

### ○外國思想と現代の教育

#### 耶蘇教と歐洲思想

井上博士が教育と宗教との衝突を論じて耶蘇教を攻撃したりしは既に十年の昔となりき。而して今やまた加藤博士は耶蘇教の吾が國體と相容れざるを論じ、これを一卷の書として世に公けにせり。蓋し耶蘇が教の根本の思想に於ては、吾が國體と相容れざる處もあるべく、所謂吾が教育と衝突する處もあるべし。併しながら今日の歐米に於ける耶蘇教に吾が國家を危くし教育を阻害する力あるべきか。吾が國に傳道されつゝある耶蘇教はしかく重大なるものなるか。余は些か疑なき能はず。余は大體に於て今日の耶蘇教なるものが、一種の迷信か若くは習慣に過ぎざるを信ず。而して若し耶

蘇教のその今日宣傳せらるゝ處に於て、不滅の力不朽の精神ありとすれば、そは耶蘇が教へし本來の教訓にあらずして、歐洲の人種が幾百年の間に養ひ來りし所謂歐洲思想にあり。換言すれば今日の耶蘇教の所謂宗教思想なるものは耶蘇が教へしものにあらずるか、若くはその教の一小部分に過ぎずして、その大部分は歐洲の人種的思想なりといふを得べし。耶蘇は猶太の人なり猶太人の考慮は素より歐洲人の考慮と異れり。耶蘇の教の今日の耶蘇教が説く處と異なるは、即ち猶太人の考慮と歐洲人の考慮と相異なる處にあり。論者或は人情の萬世萬國に共通なるを説き、猶太思想も歐洲思想も究極に於て相等しきを言ひ、さらに一步をすすめて、歐洲も日本もその人情の一に歸するを主張し、東西宗教の一致を叫ぶならんが、此れ一應尤もなる事なれども、此の如きはむしろ始めより異りたる宗教を傳へざるに同じ。凡てのものが等しければ、敢て特更らに新宗教を説くの要なければなり。余は耶蘇の教と今日の耶蘇教の相違を認め、同時に今日の耶蘇教を以て歐洲の人種的思想の發現なりとなす。従つて所謂今日の耶

蘇教が宗教としてしかく重大なるものにあらざるを信ず。故にまた耶蘇教のしかく恐るべきものにあらざるを想ふ。耶蘇教を卻けんよりはむしろ歐洲思想を排斥するの勝れるに如かず。何となれば危険は却つて後者にあればなり。抑も此歐洲思想なるものが吾が教育と交渉する處幾何なりしか、その相衝突する處幾何なりしか、言ふまでもなく歐洲思想なる問題が廣大なると共に、吾が教育も亦狭小ならざる題目なり。此れを一篇の文章に盡さんこと素より難し、則ち余は只現時の吾か思想界に於ける外國思想の影響を摘記せんと欲するのみ。

#### 外國思想と女子教育

第一に吾人の注意すべきは婦人の問題なり。これを狹義に解すれば女子教育の問題なり。女子教育なるものは外國思想より來りしものなり。少くとも婦人に關する問題は、全く歐洲思想に依りて輸入せられしものなり。余はアリヤン人種より出でたる佛教が果して女人を等閑視したりしや否やを知らず、吾が國古來の習俗はむしろ婦人を

敬重したりしが如しと雖も、儒教の傳來は正しくこれを輕視せしめたり。孔孟の教支那の思想が女人の問題に等閑なりしは争ふべからず。耶蘇が如何にこの問題を考察せしかこれまた余の確知する處にあらず。然れども歐洲人は婦人を重大視せり。ゴス人種の野蠻なりし時代に於ても、婦人を敬重する事は怠らざりき。聖母の尊崇もこの人種に依り耶蘇教に入れり。歐洲に於ける祖先傳來の此思想は、現時の社會問題と相連結して今や重大なる問題となれり。此の婦人敬重の思想は、凡て新來の事物と共にまた吾が社會をも侵すを免れざりき。則ち女子教育の問題は疾くに唱導せられて、今日なほ論議の題目たり。此問題は歐洲に於て尤も重大なりとせらるゝも、吾が國に於てはさうに重大なる疑問たるべし。何となれば彼に於ては婦人敬重の問題がすでに一定せるに、吾れに於ては此根本問題が甚だ疑惑のうちにあればなり。今日女子教育に献身せる人は多々あり。蓋しこれ等の士人淑女は確たる見識を有するなるべしと雖も、事實は往々吾人をして了解に苦ましむる結果を生ず。吾が政府の方針に至りては言ふまで

もなく、一貫動かすべからざる主義の上に立てるものなるべし。雖も、こゝにも亦吾人は時に疑を挟む事なきを得ず。然しながらこの問題に關して余は女子教育者と、政府の教育の方針とを難するの甚だ所由なきを思ふ。何となれば社會がなほ此問題に就て明確なる意識を有せざればなり。果して然らば余の了解し能はずとなし、疑を挟むと言ふ所以のものは何ぞや。

そは政府若くは女子教育者が、今さらに女子の氣風若くは操行の穩健ならざるに驚惑せるの一事なりとす。女子教育その事がすでに西歐思想の輸入なり、これを西歐流に従ひ猶且つかれの第一要義たる道義の觀念を抜き去りて黨育し、黨育し終りて恰も驚の卵を孵化したる牝雞の如く驚くは抑も笑止ならずとせんや。論者は辨じてその教育が決して泰西主義の一點張にあらざるを説くべし。或る教育者は全く舊式の教育を施せりと言ふべし。然しながら如何に舊式舊法を強ふるも、教育その事が新事實新思想なれば、これを以て効果を收めんと欲するは難し。むしろこれ舊き器に新らしき酒

を盛るの類にして、たましくその爆發を見るに過ぎざるのみ。論者はまたその道義の教育に尤も力を致せる由を辯ずるなるべし。然れどもその教ふる道義は大抵頭腦の道義にして情意の道義にあらず。且つや新らしき事實新らしき思想に伴ひたる新らしき道義にもあらざるなり。その功果のなき怪むる足らず。今日の女學生に若し氣風操行の如何はしきものありとするも、そは必ずしも西歐的教育を受けたるものにのみ多く出づるにあらず、却りて固牢なる教育法に依りたるものにその例著しきは、實に世間の事實が證明する處たるなり。

加之男子は往昔に反して女子を視るに小人を以てせず。青年もまた斯くの如き思想を以て教育せらる。昔日の女子を蛇蝎視したりしは單に表面の事實に止まると雖も現代に於ては表裏共に婦人を敬重す。夜叉の如しとせられたるものは一轉して天人視せらる。明治の教育は決して女子を天人視せよと言はず、然れとも少くとも此れを敬重すべしとするの念は、自から一斑に普及して、青年の腦裏に浸濕せり。况んや女人崇拜

の西歐の詩文に親炙する場合多きに於てをや。彼等青年が從來蛇蝎視したる見解より他端に走りて天人視するに至るも宜ならずや。

女子は舊來の制裁より解放せられ、男子は女子を天人視するといふか如き事情の下にありては、此兩者が甚しく接近し、その物議を招ぐ事往々なるもまた自然の數ならずや。これ偏に西洋思想の形式をのみとりて、これと共にその精神を傳へざりし過失なり。先覺者往々形をかれに求め精神を吾れに取るとなし、以て得たりとなす。所謂和魂洋才を以て金科玉條となす。此れ抑も事を誤るの基るにして、かれの形またはかれの精神なくして存在し難く、かれの才はかれの魂と伴はざれば危きを見ざるものなり。余は決してその精神なるものを以て耶蘇教にありと爲すものにあらず。むしろ彼の歐洲人が自から養成せし倫理思想に於てこれを看取り得べしとなすなり。今若し此倫理思想を殘して、婦人を敬重するその形をのみ求めんか、そは極めて危し。世人の多くはかくの如くにして精神をもかれに取らば、吾が美風の消滅せん事を危懼するな

らん。まことに然り、吾が舊風は甚だしく毀損せらるべし。これ素よりやみがたき處なり。然れども吾人の歴史吾人の習風は牢として抜くべからず。吾が思想正に秀絶せるものあらんか、豈に新來の思想と衝突するものならんや。西歐式の教育の間に於て必らずや期せずし、その長は發揮せらるゝ事疑を容れず。蓋しそはニコデモの耶蘇の教を評したるが如くならん、曰くその教若し正しからば自から榮えんと。余は青年男女の教育に腐心するものゝ、活眼を開て這般の理を看取せん事を切望す。風俗の壞亂者が必ずしも耶蘇教主義の學校より出でずして、世俗の學校に多きは、その間多種多様の事情あるべしと雖も、また大に考察すべき事實にあらずや。宗教は東西相違すべし只人情は然らず。かれの形をとるもの並せてかれの心を體するを要す。かれの心を體すると國家の存立若くは繁榮とは決して相ひ矛盾するものにあらず。併しながら斯くの如き態度を以て、全く國家に有害なりとなすものあらば、斯くの如き論者はむしろ始めより外國思想の輸入を防遏しこれが撲滅を計るに如かざるべし。

## 外國文學と教育

吾人はまた日露の戦争に際して、教育と外國思想との不思議なる衝突を見たり。顧れば戦争當時にありては、何事も露西亞に關するものは禁物なりき。所謂舉國一致の名の下にありて、苟も露西亞の長を説くものあらば、直ちに露探の惡名を冠せらるゝを免れざりき。然るに此間にありて一部の人士殊に青年のうちに、此の戦争に對し頗る冷淡なるものありき。或者は憤慨して此種の徒輩を叱責せしが、かれ等は敢て公然その思想を發表することなかりしが故に、その範圍の幾何なりしかは知るに由なかりし。然れども余の知る限りに於ては、たゞに多數の青年の、その内にありしのみならず、識者の間にもまた此輩甚だ少なからざりしが如し。豈に識者とのみ言はんや。直接露軍と接觸せし將士も亦等しくかれの長を説けり。外征の將士若くは老熟の識者の敵國を揚ぐるは怪しむに足らず。獨り政府も社會も等しく此外敵を呪咀せるに際し、只有爲の青年に於て、かくの如き思想を見しは抑も何の徴ぞや。



思ふに彼等青年の輩と雖も、國家の大事に際し、好んで斯くの如き態度に出でしものならんや。只社會のあまりに外敵を罵るに過ぎ、甚しくこれを輕侮せるに反動してしかく冷淡なるに至りしなり。然れども事實は單にこの反動の故を以てのみ説明し得べきにあらず。國家が兵力を盡し、國民が全力を舉げて戦ひつゝありし間に於て、青年はその敵國の文學を愛讀玩賞しつゝありし。戦争當時より今日に至るまで尤も吾が文壇に勢力ありし外國文學は則ち露西亞文學なりとす。吾文壇はトルストイにあらざればツルゲニエフ、ゴルキーにあらざればドストイエフスキー、アンドレエフにあらざればメレヂコフスキーなり。かくの如き文書の流行は豈にそれ偶然ならんや。蓋し露西亞爲政者の態度は往々吾れのそれに似たるものあるが如し。露西亞の文學は廣き意味に於て治者に對する被治者の憤怒を洩らしたるものと爲すを得べしといふ。トルストイの破壊的思想、ツルゲニエフの自然主義、何れも精神の自由活躍を意味す。翻て吾國情を見るに、鬱勃の氣は常に一種の壓抑を破つて放射せんとせり。只それ壓抑あり

此氣運は常に社會の奥底を流れて、容易にこれを見るべからず。恰も戦争の間に於て一たび特殊の思想を發表せんか、直ちに露探を以て呼ばれしと等しく、平時にありても輕々に此鬱勃の元氣を口外せんか、則ちまた國賊を以て目せらる。情勢かくの如くなれば凡ての活動的思想は詩文のうちに隠れ去る。かくの如き彼我一致の事情は則ち露西亞文學の吾が文壇に喜ばるゝ所以の一にして、また一部の識者並びに青年の戦争に冷淡なりし所以なるべし。

余はこゝにも言はんと欲す。かくの如き鬱勃の精神、かくの如き反抗の思想は則ち外國思想より來ると。若しそれ外國の文字を讀まざればやむ。苟も中學高等學校若しくは大學に於て外國の文書を購讀せんか、かくの如き外國の思想は潮の如く浸入し來り、これを禁抑せんと欲するもまた得べからず。文部省は力めてこれが防遏に盡せりといふべし。たとへば圖書の檢閲を嚴にして、事苟も愛情に亘るか、また道義的觀念の相違に關するものは、直ちに此れを禁止するに躊躇せず。而れどもその禁止は些の効

力なし、凡そ講堂に於ける講讀の書は、事實を教ふるにあらずして、單に研究の方法を授け若くは讀書の能力を養成するものなれば、應用の才あるものは、直ちにその好む處にゆき、その欲する處の文字を樂む。則ちかの文部省が極力禁止する處のもの、如きも、その禁止せらるゝが故に、益々これを讀まん事を欲するものあるに至る。未だ讀本をさへ満足に讀破し得ざるものが、モーパッサンに走り、ツルゲニエフを追ふに至る。禁遏は大勢を防止する所以にあらず、顧みざるべけんや。斯くの如きは文部の識者の一考を煩はさるべからざる所なり。

今一度び外國の文書を繕かしむ。則ちその一部を取りまた一部を捨てしむるは、人爲のよく成し得べき事にあらず。むしろ眞實に大膽に外國思想を咀嚼し同化してこれを教ふるに如かんや。教化の道また斯くの如くならざるべからざるなり。然らずんばかの女子教育の場合の如く、はた戦争の際に於ける青年の如く、反動の氣勢を養成し甚しき危険を招ぐものなきを得んや。學校に於ては比較的健全なる英吉利文學を教へ

らるゝものが、一度び校門を出づれば、これを顧みずして極端なる文學に趣くの理由また一つに如上の事情より出づるにあらざるか。余はなほこゝに一つの事實を擧ぐるを得べし。戦争の當時眞摯なる學者浮田氏は教育會に於て金州丸事件を演説せしに、その所説時流の俗見と異なるものありしがため、忽ち一斑の批難を買ひ、終に文部省をして早稻田大學に干渉せしむるに至りしとさへ傳へらるゝに至れり。幸にして干渉はなかりしか、大學に何等の變動なかりしと雖も、浮田氏の健全なる思想はかくの如くして一時葬り去られんとするの不幸を見たり。かくの如きは罪素より社會にあるべし、然れども爲政者またその責を願たざるを得ず。余は今日の爲政者がかゝる問題に關して如何なる考慮を有するやを知らずと雖も、これまた至大なる問題にして、國運の消長に關する所頗る大なりとす。若し爲政者の腦裏外國思想に付て全然何等の考案なからんか、そは極めて危険なる事なりとす。

### 哲學思想と教育

哲學思想も亦新來のものなり。心理學倫理學若くは認識論は則ち一種の科學に過ぎざるべし。従つてその實際の思想界に於ける力は微々たるべしと雖も、なほ哲學そのもの、概念は新思想なり。吾人は支那に哲學思想ありしを知る。印度哲學あるを知る、吾が國また哲學的思索全くなしとすべからず。然れども吾國に於ては宇宙萬有に對する概念としての哲學、人生に對する觀念としての哲學は、むしろ外國思想の紹介に依りて得たるものなり。少くとも自覺し始めたものなり。幸か不幸か、吾が哲學は多く單に學藝として研究せらるゝの故を以て、その力微弱にして大に社會を動かすものなしと雖も、若しこの哲學にして世に實際の果を結ぶに至らんか、舊來の道德舊式の思想は、その際に於て多大の衝突を爲すを免れざるべし。現に學理としての講述にさへ、數年前ミアヘンドの倫理學に於て、文部省がその教授に干涉し故障を唱へし事ありき。倫理なる一學科の而も學校に於ける學科としての教授に於てさへ此事ありとすれば、教授ならざるその自からなる普及の間に於て、暗々の裡に幾多の衝突を醸製

しつゝあるや未だ知るべからざるなり。

若しそれ余をしてその實際の方面に顯著なりし一事實を舉げしむれば、則ち本能主義の唱道これなり。此れ實に吾が哲學の活きたる唯一の運動なりき。然れどもこれまた忽ち吾が教育と衝突せり。外國思想の何者たるかを知らざる、むしろ人間の生命の何者たるかを知らざる頑迷者流は、これを以て青年の徳育に害毒を及ぼすものとして、これを禁壓し去らんとせり。則ち哲學らしき哲學はその芽を刈去られたり、然れども發芽はそれこれを摘む事を得べし。その根に至りては動かすべからず。余は壓迫せられたる哲學の如何なる形となりては顯るべきかを知らず、たゞこれをして發露する處あらしめざれば、則ち甚だ危きを思はずばあらず。余はまた一時の流行なりし青年の煩悶なるものを以て甚だ高尚なるものとは信せざりし、然れども此まの哲學思想流布の一變態と見做すべきか。

教育は個人の自由を教ふ。同時に個人は國家の一員たる事を教ふ。個人が自由を享

有せるはよしこれを教へられざるまでも、外國の文書に接するものは、自から此れほどの理を悟り得んなり。然れども教育は此の個人の自由なる命題をその究極まで進ましむる能はず。これを途に要して他の國家若くは家族等の間道に誘致す。只論理は自から進む處に進まざればやまず。故にその指導者を得ざる理論は、ひたすらに猛進して、終に華嚴淺間に至るものなしとすべからず。一たび汝は自由なるべしと解放せられ、直ちに併しながら服従の義務ありと強ゐられ、その正當なる解釋を聞かせられざるもの、惑はらざんとするも得んや。その獲得したる自由を濫用して自他を害するに終るは自然の成行きなり。此處にも余は先覺の指導の足らざる、むしろその新思想を了解する能はざるを憾とす。

#### 社會主義

なほ西歐思想の産物は社會主義なり。社會主義は直接に教育に關係する處なきが如しと雖も、その直接ならざる處却つて意外に密接なるものあり。政府が極力社會主義を防遏し、教育の府また甚だしくその思想の蔓延を恐るゝ間に於て、小學校教員の多數が此の主義を奉持すとは些が意外なる事實なり。余は今多數といふ。然れども余の見聞狭少にして、その實を得ざるものあるべし。則ちその多數は余の見聞せる内の多數に過ぎざるべしと雖も、社會主義の教員の如きはこれを統計に見るを得ず、これを思想の發表に見るを得ず。結局余が寡少なる見聞を以て説を爲すに過ぎずと雖も、而もそれは甚だしき誤想にあらざるべきを信す。況んや政府及び教育界の尤も恐るゝ所なるに拘はらず、此の主義者の國民教育の任務に膺れるものゝ内にあるは、よし一人たり二人たりとも將に特筆すべき顯象なるに於てをや。

凡そ如何なるものも其主義に於て甚しく非難すべきものある筈なし。何となれば甚しき悖徳沒理の事を主義として標榜するものなければなり。社會主義もその主張に於ては必らずしも排すべきものにあらざるべし。只その現時の事情と境遇とを顧みず、はたその手段と方法とを顧みざる所に於て甚しく嫌惡せらるゝなり。殊にこの主義は

歐米に於て著しき勢力あるものにして、吾れと同主義者の如きも、偏にかれを摸しかれに倣ひたるものに外ならず。従つてその實行は甚だ吾が社會の狀態に適順せざるものあり。蓋し社會主義の主張する處は眞理なり、その語る處は道理なり。思想の幼稚薄弱なる徒の此れを聞きて隨喜するは當然なり。然れどもその隨喜を得るはやがてその主張の極めて單純簡易なるがためなり。従つてその主張は深き根底を有するものにあらず。然るに爲政者は常に迫害者たる態度を以てこの徒を待つ。教育の府も亦事々しく此徒を排す。かれ等主義者の境遇は、古の清教徒が迫害せられたるが如く然り、吾が國に於ける往昔の耶蘇教徒の如く然り。而もその實、これを極言すればかれ等は無爲無能の輩なるべしと雖も、これを壓迫するもの名と、その壓迫の強大なるための、たま／＼賢子の名を爲せるか如き觀なくばあらず。かれ等は極めて淺薄なる思想を以てその徒を教化す。かれ等の主腦のうちには、口を此の主義に藉りて、不正を働くものさへありといふ。簡易單純は勢力の素なるべしと雖も、薄弱の思想不正の

行爲豈に永くその主張を推持するを得んや。爲政者若しこれを放任せば、かれ等は自から滅びんのみ。若しそれなほ此れを放任するの危険なるを見るか、教育の府はむしろ進んで此れを研究し、これを學徒に教へ、その眞相を知らしむべし。かくの如きは多少かの主義の長を容るゝの道なるべく、従つて極端なる主張を緩和するの道なるべく。社會主義には眞理あり。多少たりともその主張を容るゝを非とするは眞理を否むものなり。長はこれを容るゝを要す。外國思想の入來はまた社會主義の思想を伴ふ。前者はとりて後者はこれを捨てんとするは所詮行はるべからざる空望なり。これを思はず。只これを防遏して得たりとなさんか、その結果は益々社會主義を強大ならしめ遂に不測の禍を生するなきを保せず。

余は大勢の一として、此の社會主義を外國思想の産物の一に加ふ。吾人はその主義者の人格如何に拘はらず、その主張の理あるを忘るべからず。

#### 進取の態度

余は今外國思想の影響より出でし如上の數例を擧げたり。これ等の思想は至る處に舊思想と衝突し若くは抱合し、各種の顯象となりて社會に出づ。耶蘇教は或る人の考ふるが如く有力なるものにあらず。實際に社會を動かすものは此外國思想なり。凡そ新事物新思想を忌むものは耶蘇教を防遏せんよりもむしろ外國思想の輸入を止むべし。只外國思想の有力なる耶蘇教の比にあらず。これを止めん事極めて難しとす。蓋しそはまた言ふべくして行はるべからざる事か。そは政府も社會も此れを紹介しこれを誘引し今なほなしつゝあるものにして、その輸入は實に明治照代の國是なればなり。明治の初年に於ける五事の御誓文に於ける汎ねく智識を世界に求むとあるは則ち此事ならずや。政治の上に鎖國主義を今日に夢みるものなきが如く、思想の上に於ても排外主義は成立すべからず。只眞實らしき主張の上に立つものは和魂洋才主義なり。余は今以上の各項に於てその非を説けり。これを要するに吾人の取るべきの道只進取の一にあり。則ち進んで外國思想の眞相を明らかにし、これをして自由なる發展を遂げし

め、以て究極吾れの思想となすの外また道なし。此の大勢を防止して不測の害を招かんよりは、これを迎へて自家藥籠中のものとなすの賢明なるに如かじ。先覺の士の固牢の見を主張する間に於て、幾多の外國思想は潮の如くに吾が海岸に寄せ來れり。識者はこれに對する態度を定めざるべからず。芋の煮えたも御存じなきは甚だ名譽なる事にあらず。

## ●机上小觀

### 一 自覺の苦悶

Aus der Nacht der Bewusstlosigkeit zum Leben erwacht findet der Wille sich als Individuum, in einer end= und gränzenlosen Welt, unter gahlo= en Individuen, alle strebend, leidend, irrend, und wie durch einen bangen Traum eilt er zurück zur allen Bewusstlosigkeit

無明の闇より出で、限りなき世に生を享けて、人となれる意志は、もろくの友と共に、迷ひ悲み、はた悶へつゝ、恐ろしき夢より免るゝ如くに、急ぎて舊の無明の境に入るなり。

淀の川船の乗客すでに満ちて、今船を水上に浮めんとし、これを坐上せる砂汀より押し出せり。たまく數多砂上の蜆貝、これに轢かれて塵滅され了せり。旅客の一人これを見て憐憫の感にたえず、同乗せる出家に問ふ、アア此無辜の故なく死する、抑もたれの罪かと。僧言下に答ていふ、問ふ勿れ、此れ則ち汝の罪なりと。こは嘗て法話の書に讀みし事なりと記憶す。佛家の教理は吾知らず、此の一話自覺の罪業を教へたるに感銘する處殊に深かりき。人生は罪惡なり、苦悶なり、知は罪なり苦なり。一たび無明の境を出で、有漏の世に生る、則ちこれ懊惱の世界に入れるなり。赤鬼青鬼の訶責に苦むなり。知る處いよく多くして、苦は益々深し、若しそれ罪業を恐れ、煩悩を厭はゞ、去りて山の奥に入れ、山の奥に鹿の聲悲し。如かず化して犬馬とならんに、

犬馬に煩惱あり、むしろ木石たらんには、意志の存する處、死もまた苦を滅し得じとは、西哲の教なり。ア、如何にして救はるべきか、如何にして涅槃の境に入るべきか、ア、罪障の世や。

當初上帝天地を創造し給へり、こゝに人類を保育し給へり。無爲無覺の人類は其樂園に優遊せり。忽ちこゝに誘ひありき。惡魔來りてかれ等に自覺を與へぬ。かれ等に善惡を知るの樹果を味はしめぬ。禁制の木の實其味の甘き事如何ぞや。ア、然れどもこゝに彼等の眼は醒めたり。こゝに彼等は自覺の境に入れり。これよりかれ等罪障の子となれり。然りかれ等は世界の人類となれり、まことの人間となれり。罪は人世なり、苦は世界なり。抑も亦何等上帝の愚弄ぞ。

頃日知友藤村子に「破戒」の著あり。一個平凡善良の小學教師、始めて其穢多族なりしを自覺して苦あり。彼自から影を書き、自から形をつくりて、而もまた自からこれを蔽はんとし、これを蔽はんと欲して、益々これを顯出す。自覺終にかれの靜平を

破れり。自覺は世の悲劇なり。自覺の悲劇は宇宙永久の態なり。

顧て思ふ 文藝復興の當時は奔放の時なりき。また自覺するの暇なかりき。次て宗教改革に及びてや、内省的となれり。然れども下りて前世紀智識の進度著しく、こゝに苦悶懊惱やうやく益し來れり。進化論出で、人生の解釋一新せしと雖、根蒂の問題なほ益々疑問を加へたり。世紀末及び現世紀に至りては更らに甚しとす。人智年に進み、心眼日に開けて、苦惱益多し。近時輩出の吾が預言者に、得意の氣焔見えて、此の苦惱の姿なきはむしろ異とすべし。似而非預言者の輩出は笑ふにたえたり。青年男女の所謂煩悶は憂ふべし。而も洋の東西を貫きて、宇宙的苦悶の溢るゝは事實なり。抑も何者かこの横流を沮むべき。前世紀の苦は前々世紀の知らざる處、世紀末の苦は、世紀當初の苦にあらず。似而非預言者、懶惰青年男女は知らず。世に苦悶懊惱のあと絶えじ。ア、如何にして救はるべきか、如何にして涅槃の境に入るべきか。牛馬となり 木石と化せんか、抑も亦如何にして意志を滅すべき。然れどもこの意志夫れ終に滅すべから

ず。如かじこれをして益々向上せしめんには、勇猛、奮闘、苦戰して吾が性を磨き、聖賢となり、神人となり。依て以て涅槃に入り、神とならん。人生の極致こゝに在るのみ、此れ則ちこの苦惱の世に處すべき唯一の奮闘的生活たるなからんや。

## 二 基督教會は時勢に後れたり

余は頃日密かに吾が社會事物の變遷の跡を考へ、其進歩の急激なりしに驚嘆しつゝ、ありしに、計らずも一事の現社會の事物と全く逆行せるものあるに心附き、好奇の念を以てこれを觀察するを禁じ能はざりき。一事とは則ち基督教會をいふ。則ち余は漸じて基督教會は時勢に後れたりと言ふを憚らざるなり。然り宗教に古今なく東西なし、そは人間終極の渴仰なり。それ宗教は人の性なり、人性の上に、其基礎を置ける基督教の、其教會また古今なく東西なし。然るを號して基督教會は時勢に後れたりといふ、識者は言の淺薄輕浮を笑ふべし。而も余はなほ重ねてこれを斷言するに躊躇せじ。

願れば明治時代事物の轉化變遷は驚くべきものあり。殊に過去の十數年に於て然り



とす。一時間數十里を疾走する汽車に乗れるもの、如く、目眩み頭舞ふの感なくばあ  
 ならず。その進歩變化の急なるや、徒に海外に留學するもの、時勢に後るゝの恐あり  
 との、某知名の士の言頗る當れるものあり。これまことに現時の状態を説破して餘  
 ありといふべし。而して其進歩變化の由來たるや、吾が社會の特に日清戰爭以後、一  
 躍活動の世界に入り、新事物新智識を吸収する機關となり、其手段となれるものは則  
 ち新時代の新人物にあり。新人物の出顯則ちこれ時代の進歩なり。新進氣鋭常に時代  
 の先頭に立つ人士の輩出、これ尤も世運消長の關する處たり。然りと雖も新進氣鋭と  
 は單に年齒の多少を以てすべからず。則ち新思想を有し新智識を蓄へたる識者を指す  
 なり。

余は現時の状態を致へ、其停滯して進歩なきものを數へて、僅かに政黨と基督教會  
 とに想ひいたれり。然れども政黨の一面、舊態を株守する、むしろ厭ふべきものあり  
 と雖ども、なほ近時の進歩は頗る注目し値すべきものあり。現首相年齢すでに耳順に

近くして、其鋒銳の往年政黨に名を列ねたる當時の面影ある。侯の一身すでに政黨の  
 一新現象たり。殊に偶然にも政黨界の新空氣が其一半基督教會に關聯せるに至りては  
 奇といふべし。徳富氏は政黨に加入せずと雖も其政界の雄たる全くこれに縁なき人に  
 あらず、而も其主義主張の變化や驚くべし。横井氏は教壇より入りて政黨員となれ  
 り。西園寺首相が參謀たるの觀ある竹越氏亦教會に關係ありし人、而も現時政黨の間  
 に新思想を注入する、氏は第一たり。此他二三の所謂高襟黨と惡稱せらるる人、常に  
 政黨の空氣に刺激を興へて、おのづから此れが發展に力めつゝあり。今日の政黨は又  
 昔日の政黨にあらず。今基督教會が若し政界の斯くの如きを見て、自から政界清新  
 の本源たりと誇る處あらば、これ自からを知らざる大愚の爲たり。かの諸氏は教會  
 をすてたるなり。教會は諸氏を包藏する能はざりしなり。蓋し何人も諸氏が爾後の行  
 動の明らかにこれを證するを見る能はざるほどに盲目なる能はざる也。現時の基督教  
 會に、安んじて自己の生命を托し能はざるもの、必らずしも前記諸氏の如き才人にの

み限らざるなり。些少の志あり多少の識見あるもの、相率ゐて反き去ると雖も、教會はこれを防濁する能はざるなり。生命の淵源にして、而も志人識者の生命を預る能ざるは、豈に末路と言はざるべけんや、抑も亦時勢に後れたりと言はざるべけんや。

現代吾が政黨の機略權謀に富み須臾も一定せざるに反して、宗教は本來靜止的のものたり。たとへば羅馬舊教の如き、萬古不易一貫して變る所なし、かくの如きは幾多の弊あると共にまた實に、宗教の美處たるを失はず。余は舊教のことに宗教の性に合へるに敬服せり。若し夫れ羅馬舊教の如くんば、そは時代に後れ前立つの譏りとはた賞讃との外にあるべければなり。然れども新教に至りては全く其趣を異にす。其根本の主義すでに舊教と異れり。新教は當初より自由を稱へたり。個人の自由を認容せり。故に教會は必然教派に依りて區分せられ、終に其停止する處を知らざるに至れり。新教の各派はユニテリアンを生じ、ユニテリアンは唯物論に至らざればやまず。其結果する處

信仰は全然各個人の主張となり、これに満足するの外に道なきに至り、ここに教會は絶滅す。此れ新教主張の論理的結末なり。然れども新教の此主張にも亦其美所あり。進歩開明の社會に處す、宗教も亦たおのづから斯くの如くならざるを得ざるべし。然れども果して斯くの如くならんと欲せば、則ち宗教に東西なく古今なしとして泰然たるべからざるなり、はた能はざるなり。然り、教會も時勢に、後る、能はざるなり。何となればそは教會自からの主張たる、自由と進歩とに矛盾するものなればなり。

今は教會興起の時なり、爲すべきの事業積んで山を爲せり、況んや氣運は宗教を渴望せるをや。所謂時機なるものは來れるなり。見よ世には所謂自稱神佛なるもの出現して、想界を騒がしつゝあるにあらずや。かれ等の徒或はそれ自負驕慢の結果こゝに至れるものならん。然れども其心裏豈に一片の誠心なきを得んや。かれ等をしてこゝに至らしめしもの、豈に時代の要求する處あるに依らざらんや。而も基督教會は一指を

だにこれに加へ能はざるにあらずや。抑も亦かれ等をして出現せしめし事實、すでに教會の恥辱ならずや。神秘主義は歐洲の想界に瀾漫し、文學藝術に偉大の勢力を及ぼしつゝあり。何事にも容易に動かされざる磐石の如き英國に於てすら、此氣運現代を動かしつゝあるは頗る留心すべき事實たり。かれの神秘主義と吾が神佛と何等關係する處なからん。而も東西融和の急潮は自からこゝに至らしめしやも未だ知るべからず。現に神秘主義のメーテルリンクはうるさき迄、吾が詞壇に紹介されつゝあるにあらずや。象徴派の詩盛んに稱道せられつゝあるにあらずや。象徴これ神秘の一面にあらずや。神秘これ宗教の捉ふべき大機會にあらずや。而も基督教會は此等に對し、如何なる態度を取れりや。余を以て見れば、教會は凡ての新思想凡ての新氣運に對して恬然超然主義を取れるが如し。否、抑もこれを了解する事だに能はざるが如きの觀あり。かれ教會の知れる處はウォーズワース、ブラウニングのみ。ウォーズワース、ブラウニング亦可なり、只其着眼の舊套なるを憾む。老衰は蓋し新氣運を感知する能はざるか。

ア、老衰、此れ凡てを解釋するの秘鑰たり。吾が社會の轉化變遷は青春の氣に依りてなる。必らずしも年齒を言はず、何れの方面を見るも、常に新進の後繼者相率ひて先進を押し且つ排して進むなり。此に於てか先進後輩共に一日安逸なる能はず、安逸なる能はず、故に力行研鑽日もこれ足らざるなり。力行研鑽日もこれ足らず。故に進歩あり。今翻りて基督教會を見るに、曩きには有爲の士を逸して、今や先輩を凌ぐの後繼者なし。必らずしも神秘主義を解せざるを咎めじ、氣運を捉へざるを怪まじ。余は只後繼者新進の士の全然教會に求むべからざるを見て、以て教會は時勢に後れたりと爲すなり。吾が斷案非か。政黨の依然伊侯隈伯を仰ぐはなほ恕すべし。何となればかれ等は神輿として擔はるゝに過ぎずして、新進の士は少なからず後陣に輩出せるものあればなり。而も教會には十年二十年はた三十年、以前の老輩なほ局に當りて事を執れるにあらずや。老輩の跋扈は可なり、老輩必らずしも老衰にあらざればなり。

余は斯界宿老の過去を想ひ其十年一日の如くなるに感謝す。然れども青年の士一たび教會に入りて生色なく、老輩の模倣に入りてまた進まざるは如何。此れ實に教會其もの、老衰する唯一の原因なりとす。

果して然らば其後續者の輩出せざるは何に職由するか。ア、夫れ何に職由するか、これ頗る注意を要する問題なり。基督教其もの、性質と廿世紀以後の新思想との關係、さては吾が國民の性情との關係より深く考察すべき問題たり。

### 三 伯爵大隈重信閣下

伯爵大隈重信閣下、閣下の盛名一世を蔽ひ、政界の分野は閣下の占有する處只其三分の一に過ぎずと雖も、氣魄は則ち常に在野の政黨を左右し、其一言隻句は日本全國の傾聽する處たるのみに止まらず、遠く海外に渡りて影響する處僅少ならず。身官位官職を帯び政廳の權威に依りて僅かに其名をなすのもの、現下の才人比々皆然りとす。ひとり閣下の單身孤立資縁する處なく、學なくして其語る處學者を驚かし、坐らにして能く世界の氣運を觀知する事堂をさすが如くなる、蓋し偉人にあらざれば能くする處にあらず。而して伯爵閣下が這般の偉觀は治ねく萬衆の知れる處、一世を舉りて其盛名を贊頌する決して偶然にあらざるなり。

然るに伯爵閣下近者また推されて文藝協會に長たり。こゝに於て世上兎角の評あり。多くは閣下の此の任に就くの甚た其當を得ざるを難す。然り伯爵閣下の協會に長たるはそれ或は其の當を得たるものにあらざるべし。然りと雖も吾人はなほ未だ遽かに其可否を斷すべきにあらず、何となれば協會は伯爵の勢威に依りて其發展を遂げ其勢力を社會に大ならしむる事を得ればなり。蓋し世評の難は文藝協會員の無能なる、殆んど目に一丁字なしとせられたる伯爵閣下を推戴せるの、其卑屈なるを指彈するにあるべしと雖も、これを社會の一事業として見んか、協會が勢力隆々たる閣下の力を藉るは必らずしも咎むべきにあらざるなり。要するに斯くの如き可否の論争は、文藝自身を主眼とすると協會を主位に置くとの、立脚點の相違に起因するものとす。然れどもさ